

野口英世

小泉
丹



序

本新書の一冊として「野口英世」の執筆の相談をうけた。そして考慮の末に、次のような考から、其を引受けた。

野口氏の伝記には、奥村鶴吉氏の優れた『野口英世』があり、エックススタインの、此とは違った、これまた優れた「Noguchi」がある。伝記としては、此等以上のものは望めないであろうし、また必要がないようでもある。なお外に、単行本の形で出ているものが四種（或はそれ以上）もある。併し私は小さい形で、現行のものとは別趣の点のある内容のものがあってもよろしく、またあるべきだとも考えた。其は立志伝的、訓話的、読物的のものでなく、彼の生涯の叙述に添えて、学人としての野口、人間としての野口を、吟味し味わったものである。私は此を少しばかりやってみたいと思つたのである。そして其が、日本人の世界的、現代的教養の資を以て任ずる本新書の一冊として適当なものであらうと考えた。

私は本新書の為めに、メチニコフ伝の翻譯を約束していた。然るところ、幸に宮下君の訳稿の提供があつて、其に当てるべき時間と労力の救助を得ることになった。しかし私としては、執筆を約した責務をはたすべき途が考えさせられていた。よつて私は、其にこの「野口英世」の仕事の向けるとにした。

以上執筆の心持と事情を述べて序とする。

——昭和十四年四月二十三日夜。靖国神社臨時大祭祭典式場よりの軍楽隊奏曲の放送を聞きつつ——

目次

序	一
一 前書き	三
二 生涯	—— (一)	六
三 生涯	—— (二)	五
四 生涯	—— (三)	四
五 業績	五
六 人間	七
七 母・師・友	七
八 後書き	〇
略年譜	四

一 前書き

野口英世の生涯は、比類少なき多趣多彩なものである——少なくとも日本の学者として、彼以上のものはあるまい。またその生涯に有機的に織り込まれた人物が豊かである点に於ても珍らしい。彼の生涯と共に伝えられねばならぬ幾人かの人物がある。私のこの冊子の一部は、其等を略述する目的に向けられる。

野口英世の伝記には、奥村氏とエックススタインの詳細なものがある。奥村氏は多年の親交者であつて、内面的に彼を知承していることの深かつた少数者の一人であろう。そして多年の丹念な資料の蒐集と、遠慮のない叙述は、まことに立派な仕事になつてゐる。エックススタインに就ては私は知るところがないが、アメリカに於ける野口、特にニューヨークに於ける野口に就て叙述するところ、まことに細微であつて、奥村氏の故国に關係のある項目に於けるものと相對応して、例えば山門の二王尊を見るが如き感がある。野口はよき伝記者を得たことに於て、恵まれてゐる。

私は同郷の産であるが、郷人としての交りは全くない。學業を了えて伝染病研究所に位置を与えられたが、其は野口の渡米の七年後であつた。彼が錦を飾つて帰朝した大正四年（一九一五）には、台北の研究所に在職中であつた。直接に面晤し得たのは唯一度、大正十年（一九二一）の春ニューヨークの研究所に於てのみである。私は、奥村氏、エックススタイン以上の資料を持っていない。持つてゐるのは、つまらぬものか、眞偽の疑わしいものである。この冊子の彼の生涯と他の人物の叙述は此等兩氏からの複叙である。私見によつて諸所に多少の更改を加えてはあるが。

この冊子に於ける私の企図は、他の一半にある。そして其を私は前記の一半と對等なる或はそれ以上の仕事として為ようとしているのである。其は學人としての野口を吟味すること、及び人間野口英世を味わつて

みることである。

個人の業績が語られる場合、特に伝記のうち^に其^が取扱われる場合に、当該個人のものに重点が置かれる關係上、また全般的の叙述が簡略され、或は^な全く^な為^されない^たために、其^が過重に表現されることが、普通である。少なくともその事件なり問題なりに門外的な読者によつて、左様に感得される。私的な会合、葬祭の悼辞、追弔の式文などでは、それでよろしく、或はその方がよいかも知れない。併し^し学問を生命とした人物の伝記が書かれる場合には、適当に公正、冷静な態度が要求されるべきである。故人にして若し^も耳^あらば、恐縮に感ずるであろうような、少なくともくすぐす、つたい、感を起すであろうような叙述は、故人その人に対しても適当な礼儀ではあるまい。まして棺を蓋うて年を経た者である場合、故人の業績を顧みて、公正な吟味を試みることは、学人を追憶する正しい途^{みち}であり、学術史の理解を深くする所以でもある、と私は考える。野口は、^{ばいどく}梅毒、トラコーマ、蛇毒という^{ごと}が如^くき、一般人の耳に親しい名称の疾患の研究で知られている。従つて、その業績の叙述が何れ^いの伝記にも書き込まれている。而して^{それ}等^らには若干^{じやくかん}の是正が必要であるもの、及び一般の広い理解が望ましいものがある。私の本冊子の仕事の一部は、主要な問題に就て^つ全般的な記述をして、野口の業績の本当の価値に就て語りたいということにある。

地上の有生無生の万象を通じて、人間ほどに味のある存在はない。其^{それ}を^か噛^かみ試みて人間ほどに味の豊かなものとは他にあるまい。市井^{せい}（^{てい}人家の集まつて^{いる}ところ）無名の人間にも独自の深い滋味が噛^かみ当^あてられる。また、謂^いうところの偉大な人物なるものに往々にして粗末な味しか噛^かみ当^あてられぬこともある。野口英世という一人間を一通り味わってみようというのが私の仕事の一つである。そしてそこに頗^{すこ}る^さ齒^ばごたえのある豊かな味のある人間としての野口英世を見出すのである。野口英世の学勲、波瀾のある生涯等々に関してよりも、寧^むろ人間野口英世というものにより大きい関心を私はもつのである。而して^しこの冊子を書く目的の一つがこの仕

事にあるのである。ところで、人間を嘔み味わうということは容易に出来ることでない。僅かばかりの材料で論じたり、結びのある言葉を弄んだりすることは、慎しまねばならぬことである。人間の本当の味は、逸話や表面的な伝記などで感得され得る筈のものでもない。多年の内外的の交遊と、公正な判断と、鋭敏な感觸とをまたねばならない。私は此等の何れをも身にもっていない。従つて茲で人間野口を嘔みしめた味を語るというような資格は缺いている。併し出来るだけのことを敢て試みようとするのである。そしてまた種々の意味に於て、それだけでも徒爾(だむ)ならざるべきことを信するのである。私は野口とは同郷の産である。野口を味わう上に、私はこの關係を絶対に脱却することを勉めた。同郷の人物というものに世上一般以上に深い関心を私はもっている。併し一面に深い批判的の心組みを忘れないように努めている。常に同郷の故を以て親愛を感ずるといふようなことを避けている。同郷なるが故を以て批判を朦朧にするが如きことを慎むことに勉めている。野口英世を同郷人に見出すことに於て一層の愉悅を私は感ずる。併し同郷なる点が野口英世觀に影響を来すようなことはないように心掛けている。

二 生涯——(一)

鉄道東北本線は白河で奥羽に入る。其から福島に至る中間の郡山駅で、浜海道、常磐線の平から越後に至る磐越線が交叉する。その磐越線は西に向つて、中山の長い隧道(ネン)を通つて、会津盆地に入る。盆地の中央若松の手前三つ目の駅が翁島であつて、「宝の山よ……」と謡われた磐梯山の裾、猪苗代湖の岸にある。湖水に届いているスロープ地で、一帶の景色は相当に美しい。その翁島村大字三ツ和字三城瀉というのが野口英世の生れ郷土である。

駅から約一里(約四キロ)。(メートル)。戸数僅かに三〇戸の塞村である。

英世の両親の代から五代を遡つての奥村氏の調べによると、家柄は貧農ではなく、並以上の家作をもち、普通に田畑をもち、金穀の融通を受けたりはしていなかつた。併し家運は代と共に傾いて来て、赤貧というべき状態に陥つた境遇に英世は生れた。明治九年(一八七六)十一月九日である。英世は後に改めた名であつて、もとの名は清作である。

父佐代助、三六歳、母シカ、二四歳。佐代助は、明治五年(一八七二)、シカが二〇歳の時に入婿に来たのであつて、清作には二歳年上の姉イヌがあつた。

母シカの生涯はまことに苦難重畳の途であつた。其に就ては後に述べる。佐代助はまるで働きのない、度を過ぎたお人好しで、その上に飲みぬけであつた。朝酒、昼酒、居酒屋飲み、夜酒。時に臨時の仕事をして得た労銀も忽ち飲代となるのみだつた。それに賭博にもはまっていた。会津戦争の当時、村の寺が屯所になり、官軍の人足が多数三城瀉に來り、日夜賭場を開いて、近在の百姓を集めて、丁半(二つのサイコロの目の合計が偶数は丁、奇数は半)を争つた。この悪風が長く土地に浸淫していたのだという。かくて佐代助は、飲む賭つ二拍子揃つたやくざ

者になつてしまつた。田畑は抵当に入れられた。母親のみさは、五十そこらで、働き盛りであるのに、働くことを好まなかつた。一家はシカの手一つで支えられていたのである。田畑の仕事を女の手一つで働き上げ、他家の田畑の手伝をし、野菓や稲田の蝗こんむしや、湖の小蝦こえびや、柿や芋やを二三里の町村に売り歩いたりしていた。清作三歳の農繁季の或る日の夕暮に、彼にとつて、いろいろの意味で因縁の深い重大事が生じた。囲炉裏いろりの自在鉤に汁の鍋をかけ、汁の実をとりシカの出たそのあとで、そこに爬はいついた清作が、其それを浴びて、燃えていた薪株にその軟かい手を入れたのである。シカは観音経を請しつづ、信心の観音様に念願して、三七日の間、清作を抱いたまま看護した。火傷は癒えたが、左手の手首から先は赤黒く爛ただれ、拇指おやゆびは腕首の脈処に、中指は掌に癒着して、手先は木の切節のようになってしまつた。貧乏暮しには十分な治療を施すことは到底叶かなわぬことであつた。

八歳の春、村の三ツ和小学校に入学させられた。寺小屋式のものであつた。六年の課程を終つたのが明治二十二年（一八八九）である。優秀な成績であつたが、始めの四年は首席ではなかつた。後の二年は首席を占めた。母親は赤貧の裡うちにあつても学習を励はげまして、駐在所の巡査にたのんで国語と漢文を習わせた。また朋友の一人と共に寺の和尚わしやうについて漢学と英語をも習い、英語の進歩は著しかった。卒業前の二年間は生徒全部の生長というものにされ、教員に代つて生徒を教えることもした。卒業して温習科に入った。そして彼のために運命が恵んで来た。三ツ和から三里のととりに猪苗代町がある。附近での都会で、郡役所がある。その猪苗代高等小学校長が、後年英世が父上と呼んだ、世にも稀なる彼の為ための保導者・愛護者となつた小林榮氏であつた。同氏は郡の教育主任と共に三ツ和小学校に出張して来て、生徒の口頭試問を行なつた。そして、温習科の左手の木の瘤こぶのようになつて、清作に、学力の優秀と共に、珍しいみどころのあるのを感じしたのである。小林氏は家の事情なども知つた上で、母と兩人を自宅に招いて会談した後、その高等小学校に

入学させた。この学校は当時には珍らしかつた硝子張りの窓、椅子式の教室というモダン建築で、近郷から見物に来るといふ程のものであつた。清作にとつて至幸であつたことは、そこには、優れた、また誠実な先生達が居られたことだつた。小林榮氏は首席訓導であつた。往復三里の路を清作は一日の缺席もなしに通学し、独学で学習を進めた。夜間は家事の暇に読書したくてもランプの石油がなかつたので、隣家の旅籠屋松島屋の風呂場に手伝に行つて、そのランプで読書することもあつたという。この家の息子代吉とは仲好しであつた。特に勉強したのは英語で、ナショナル・リーダーの第四を読破していたという。好んだ学課は理科で、作文も得意であつた。常には口数の少ないむ、つ、り、や、であつたが、生徒仲間の辯論会では、壇上で辯を振つて喝采を博したという。

猪苗代で清作は数人のよき朋友を得た。彼は良き母、良き師と共に良き友をもつたことに於て、まことに珍らしく恵まれた一人であつた。このことは後に更めて述べるが、此は少年時代から始まつていのである。母のこと、小林先生のこととは既に話し始めている。貧乏な彼は富裕な家の兒に美しい親愛の友を得たのであつた。そして其等の友愛は後年まで長く続いた。清作の苦惱はその不具の左手であつた。不自由はいうまでもなく、それが為めに大きいひ、け、めを感じた。少年の心情として真に惘然なものであつた。高等小学四年の或る日、彼はその悲恨の情を作文に綴つた。其は小林先生の熱涙を催おさせた。教員一同の同情は一致して、清作の手に手術を施してやろうという議が定まつた。小林先生の発議に呼応して、級友中の親交仲間が率先して醵金し、級友全員が金若干を出し合ひ、教職員の寄附金を加えて、十円餘が集まつた。そして若松で盛名のあつたドクトル渡部鼎氏の手術を受けることになつた。五指の末節はなくなつていたが、手術によつて五指が切り離され、僅かながら物を握ることが出来るようになった。吾々が現に見た彼の手は、後に上京した後、後に近藤次繁氏が更に手術を加えた結果のものである。

やがて高等小学校を卒業した清作は、深く医術の尊さを身にしみて感じ、将来医を以て身を立てようという発念をした。彼の将来に望をかけると共に、現在の窮乏状態を以てしては如何とも為し難いのに心を勞していた小林先生は、一日訪ねて来た清作に、医者になる気はないかと質ねた。自身の熱望と合致した先生の言葉に、清作の胸は躍った。小林先生は、手術を受けた渡部ドクトルに身を寄せて、その途に進むことをすすめた。清作は直接にドクトルを訪ねて頼んだ。幸に其が叶って書生として奇食することになった。

渡部鼎氏は若松の目抜きの通りの土蔵造りの大きい家で、会陽医院の名で開業して、地方に盛名があり、特に外科で重んじられていた。豫備役(現役を終えた軍人だが、必要に応じて召集される)の軍医で、米国に学び、カリフォルニア大学でドクトルとなり、ベルギー、ドイツ、イギリスを廻つて来たという、当時には珍らしい学歴の人物であつて、欧風奨励者で、婦人の束髪化を唱道し、病院も外部は洋風にし、洋服を着て診療するという工合であつた。父は、越後への街道筋の野沢という村で、漢方の名医として知られていた、学を好んで文雅の道をも楽しんでいた人であつた。ドクトルは若松地方で異色のある人物であつた。代議士に出馬して二回当選した。私は青年時代一年あまり若松に居り、その後数年の間時々帰郷したので、しばしば街頭等で会した風貌がいまも眼底にある。巨きい軀体に、一物を肚に蔵しているような人物であつた。地方人からは親しまれるよりは畏敬されていたようである。特に私の敬服しているのは、氏の学を好んだことである。大正の末年頃に生理学会に出席して、演説か討論を行なつたことがあるように記憶する。

当時の医学教育機関としては、医科大学は東京にあるばかり、医学士という肩書は今日の博士号などよりもずつと以上のものであつた。高等学校医学部というのが仙台、千葉、岡山、金沢にあり、其他に大阪、名古屋、京都、熊本等に医学校があつたが、此等の正規の教育を受けるものの外に、医術開業試験を通過して資格を得るものが多数であつた。本郷鎮台といわれた長谷川泰氏が開いていた済生学舎が、後者に属する青

年を集めて、天下に気を吐いていたのであった。経済的に資力を缺いた青年は、開業医師に身を寄せて、独学と経験とで開業試験通過を志し、また書生生活の後に東上して、済生学舎で勉強して目的を達するという途が普通であった。相当に資産をもった者にも、この途をとった者も多かつた。それで相当の門戸を張った医家にはこの種の青年が寄食して居り、年数を経た者は診察も処置も往診もしていたのである。会陽医院などでは書生は食費負担で来ていたのであった。

会陽医院の書生生活四年、清作には十八歳から二十一歳まで、多感な青年時代である。医院には五六人の先輩がいた。清作の仕事は玄関番であつたが、吉田という同輩と相競つて勉学に精を出した。睡眠を三時間に節したという。二人して英語の師匠に通い、また師を求めてドイツ語を学んで、其等に異常な進歩を示した。ドクトルの書架には英語ドイツ語の医書があつた。此が清作の勉学慾を刺戟し、またその或るものを読むことも出来た。渡部家の土蔵には先代の蒐集した漢籍が多数に蔵されていた。清作はそつと取出して来て勉強した。そして自ら激励する漢詩を作つたりもした。後年漢詩を作っているのはこの頃の勉強の結果である。湖柳と号している。猪苗代湖畔の柳の意であろう。やがて拔擢されて玄関番から薬局生にされた。医学の方の勉強も進んで、その頃医師仲間有志で、お互のもとに寄食している医学志望者のために開いていた医学講習会で、清作の質問は往々講師の多くを苦しめたと伝えられている。またカールデンの独文「病理組織学技術」の翻譯をするという努力振りと進歩を示した。

明治二十七年（一八九四）、日清の役（日本と清國との戦争）が起つた。渡部ドクトルは代議士に出馬して二回当選し、第三回の立候補をして運動白熱の折であつたが、三等軍医正として召集に応じて出征することになった。ドクトルは門下生、書生などに暇を出し、或は他の医に託し、清作を一人選んで留守中の医院及び留守宅の仕事一切を託した。診療は休止したのであつたが、種々の複雑な事情や家事の仕事があつた。併し十分に勉

学の時を得たので、清作は精一杯に勉学することが出来た。天主教会のフランス人に通ってフランス語の勉強もした。此は年来二三の青年がやっていたことで、私も高等学校の夏休暇に厄介になった経験がある。

二年が過ぎて、明治二十九年（一八九六）の春、ドクトルは凱旋して来た。そしてその四月に、師弟交友の亀鑑ともいふべき、血脇守之助氏と清作との関係が始まった。まことに彼は師友に恵まれた者であった。血脇氏は東京芝の高山歯科医学院の幹事をしていた、まだ歯科医になりたての青年であった。そして夏季休暇に若松に来て、会陽医院筋向いの旅館で出張診療をしたのである。専門の歯科医の無かった町のこととて、受療者は終日集まって来た。夕方に診療を片付けて後は、毎日ドクトルを訪ねて談じ合うのを常とした血脇氏は、そこに真剣に読書をして居り、特に欧文の病理学書を勉強している薬局生清作が目についた。更に清作の質疑を受けるようになって、その才分にひそかに感歎した。そして東上遊学の時あらば訪ねよといった。これが清作の将来に重大な因縁とはなったのである。

医術開業試験の前期試験に合格するだけの自信が十分に出来た清作にとつては、東上して勉学を進めたい念願が旺盛に力をもって来た。ドクトルの凱旋となつて、その熱は押え切れず、小林先生にその意見を求めた。先生は『東都に出でて苦学力行、大成を期せよ。自分も亦幾分の援助を願うところでない』という答を与えた。ドクトルも同意して、血脇氏への添書と金子を与えて餞した。清作は、前期試験の願書を提出した。小林先生は猪苗代校から転じて、千里小学校校長になっていた。そしてその月俸十二円のうちから十円を清作に与えた。

当時はまだ磐越線は通じていなかった。九里（約三六キロ）の路を本宮駅に出るのがきまりであった。初秋九月、磐梯山をうしろに、町端れの六角橋の辺りで、恩師、慈母達と袂を別った。明治二十九年（一八九六）である。

着京した清作は安下宿屋に落つき、受験準備をして、翌月の試験で、前期試験に難なく合格した。まず目的の初段を達して、友人達を廻り巡ったりしているうちに、十一月に入つて懷中には一物もなくなつた。万策盡きた彼は、天長節(明治天皇の誕生日)の日、芝伊皿子の高山歯科医学院に血脇氏を訪ねた。この学院は、明治二十三年（一八九〇）に創立された、日本最初の歯科医学学校であつて、いま我国歯科医学界に鬱然たる地歩を占めている東京歯科医学専門学校のそもその前身である。当時血脇氏は幹事をしていた。そしてこの学院からいまの盛況なる専門学校まで発展させて来た育ての親なのである。さて一年ぶりの再会に、清作の事情とその決心の程を承知した血脇氏は、院長高山氏に学院に寄宿させることを頼んだが、成就しなかつた。僅かに月給四円であつた血脇氏にとっては、金子の上で如何にする途もなかつた。そこで氏は寄宿舎の賄方の爺(老)と媪(女)とに事情を打ちあけて、清作を隠れ住ませた。そして少時の後には、いつとはなしに時間の鐘を鳴らしたり、掃除などをして、学僕として認められるようになった。

学院に住み込んだその月の末に、同町内でドイツ語の教授をしているドイツ婦人の許(もと)へ夜学に通う希望を起して、月謝の一円を血脇氏に依頼した。氏は院長に増俸を願出で、その要求が応じられ、七円に昇給し、清作に二円を与えて、翌日から通わせることにした。年が過ぎて五月、済生学舎に人学したい希望を血脇氏に申出た。この機会に氏は学院の附属病院の一切を任かして貰うように高山院長に申出た。この突然の申出は、院長を面喰(めんら)わせるものであつたが、年来の功勞者であり中堅人物であつた氏の要求が容れられた。そして清作は氏から月額十五円の支給を受けることになった。願叶つた彼は本郷の下宿屋に移つて通学することになった。済生学舎は本郷の真砂原にあつた。学校というよりは長谷川泰氏の私塾のようなものであつた。長谷川氏は、一面には官界民間にあつて我国の衛生行政に、一面にはこの済生学舎によつて我国の医育に巨大な足跡

を遣した人物である。特殊な過渡期にあつた日本に適切な人物であり、その時世の産んだともいふべき剛快な人物であつて、本郷鎮台といわれた。学舎には、入学期日、修業年限、学年別というものはあるわけがなく、常に千名の生徒があつたが、講堂は二つあつただけ。講義は朝の五時から夜間まであつて、生徒は銘々に欲する課業に出席するのであつた。教師も多彩であつて、大学教授の時間外の出講があり、専ら洋行帰りの気焰をあげる先生などもあつて、澆刺たる講義も聞かれた。長谷川鎮台は、虱のたかつた汚れた古和服を着用して、『大多数の人間は寄生虫である。自分は寄生虫に恩恵を施すのだ』といつていたという風であつた。生徒の格質も上下極めて雑多で、少数の女子も交つていた。誠実で熱心な勉学者も多く、朝の五時には続々と詰めかけて、よき席を占領し、遅れたものは三方に立ちふさがつて講義を聞いた。事務の手伝をするために四時から出校して、仕事を終つて聴講したという類の人達もあり、一方にはまた遊蕩三昧をこれ事として、幾久しく親の資産を喰いつぶしている類の連中も至つて多く、学舎の生徒がこの類の書生の代表者の如くに思われてもいた。

紅燈の明るい東京に投じた清作には青春の血が熟していた。そこには悪友もあつた。茲で日清日露の兩戦役の中間時代のことを一応回想してみよう。当時書生といつたのが今は学生となつてゐる。言葉が變つたように形態も行動も變つて來てゐる。ぞろりとした和服姿、反対に弊衣破帽、袖をたくり上げて握り太のステッキを打振つた書生は、金ボタンの制服に派手なズボン、角帽、てらてらと撫でつけた頭の学生、汚なくした角帽を長髪の後頭部に押し当ててゐるという工合などに変態を見せてゐる。書生と学生の行動の變化も鮮かである。酒と女の關係にしても、様式も變り、範圍も變つて來てゐる。清作の時代の書生界の一面を描寫したものが逍遙先生(坪内逍遙。早大の)教授でもあつた(教授でもあつた)の『当世書生氣質』である。(この小説は野口にとつて重要な關係をもつてゐる。すぐ後にその話になる)。

高山齒科医学院で、時間の鐘を鳴らし、ランプ掃除をしているうちに、清作はそろそろ東京書生生活の一面の味を知った。清作の夜の不在が多くなった。仕事振りにも缺陷が現われて来た。下宿に移つて済生学舎の書生となつて更に増長して、周囲を矚せしめるものがあつた。茲で併し清作には独自の一面があつた。其は一方に勉学の努力を忘れなかつたことである。つまり為すべきことを当然以上に為し、慎しむべきを慎しまずして愉しみ、明暗清濁の交錯した、常人の二倍の生活をしていたと見るべきであらう。学舎には同郷の友があつて実に硬軟二筋途をかけたの盟交を結んでいた。清作は最初は早朝五時から十四時間もぶつ通して聴講したが、そのうちに出校の時間がだんだん減じて来て、臨床科目だけになり、遂にはその時間も減つて来た。行動は目立つたので、血脇氏に警告する人があつたが、氏は黙して言わなかつたという。後期受験を寸時も忘れる清作ではなかつた。茲で一つの問題がまた彼の手の上にあつた。其は診察に當つての打診である。一応手術を受けてはいたものの、打診には困難で、其に自信が得られなかつた。この訴を聞いた血脇氏は、大学の近藤次繁博士に頼み込んで、学用患者として再度の手術を受けさせて呉れ、其で自信が得られるようになった。そしてその十月には後期試験に八十名中四名の合格者の一人に加わつた。出郷後滿一年にして目的を達し得たのである。

血脇氏は取敢えず学院の病理学と薬物学の講義をさせた。数箇月前まで鐘を鳴らし、掃除をしていた清作が、教壇に立つたのには生徒は啞然とし、彼の痛快感甚だ大きかつた。清作は臨床をもつと勉強せねばならぬと思つた。そして血脇氏の仲介で順天堂病院に入つて助手となる事が出来た。そこで与えられた仕事は雑誌の編輯であつた。興味のある患者のあつた場合にその報告を書き、外国の新しい発表を紹介するといふような仕事であつた。賄附きで月二円というのがその俸給で、その俸給が懐中にあるのはその日唯一日であつた。そして彼の後年まで続いた無心、借金の習癖が始つて来た。此に就ては沢山の逸話ともいふべきも

のが伝えられている。茲で其等に就て語る要はあるまい。

かくする間に、細菌学を専攻する希望が高まつて来た。そして北里柴三郎博士の伝染病研究所への入所を願望した。併し彼の履歴を以てしては不可能事に思われた。併し順天堂病院長や、北里博士の知友などの紹介で、目度くその望が達せられて、見習格の下級助手として入所が許された。明治三十一年（一八九八）四月であつた。

伝染病研究所は、北里博士が六箇年のドイツ遊学から、世界的名声を荷つて帰朝して、直ちにベルリンのコッホの研究所に準ずる研究所の創立を志したもので、前記の長谷川泰、高木兼寛、石黒忠憲等の諸氏の建議に発して創立を見、明治三十二年（一八九九）に至つて国立になつたものである。野口の入所したのは大日本私立衛生会の経営、国庫補助の時代で、研究所は芝愛宕下、いまの郵便局のところにあつたのである。當時北里所長の傘下には英才が頭を並べていた。志賀潔氏は赤痢菌の発見をしていた。野口より数日前に秦佐八郎氏が入所していた。入所して後も歯科医学院に寄宿して、日暮に帰つて、夜間の講義、それに順天堂の雑誌の仕事を続け、学院の出版物の編輯も受持つていた。夜半二時三時になつて寢床に入り、六時に起床して勉強した。一面にはまた金があれば前後無差別に使い果して、無心、借金をする習癖は相変わらずであつた。其が為めの手段として、会陽醫院時代に始め、順天堂時代に続けていたカールデンの翻訳を「病理学的細菌学的検究術式綱要」という名で出版した。渡部ドクトルとの共訳とし、北里博士の序文を貰つてゐる。

小林先生夫人の病の報知が彼を驚かせた。やがて病症重篤の報を受けて帰郷した。経過は抄々しくなかつたが、幸に軽快に向つて一同愁眉を開いた。その時に一つの出来事が起つた、それは清作から英世への改名である。看病の餘暇に、読書界に驚異的な波を起していた『当世書生氣質』を借りて来て読んだ清作は、そ

ここに野々口清作という人物を発見した。其は衆人から将来を属望された秀才であつたが、遊蕩に身をもちくづして墮落の途を進んで行く者として書かれていた。彼は驚歎した。姓が酷似し、名は同一である。そして近来の自身の醜態を鏡に写して見せられるが如くであつたのである。慙愧の時が続いた後に、先生に改名の相談を持出した。彼の行状を知らなかつた先生も、この不祥な名を好まなかつたので、同意して、新しい名に案をめぐらした。そして選ばれたのが英世であつた。

研究所員としての英世はまだ学術的にその鋒銳(ほうばう)を露らわすには至らなかつたが、その外国語の力量が注目され、また尊重されていた。そして一方にはそのしばしばなる脱線の行爲も亦目に立つていた。彼はドイツ留学を念願していた。入所の当時北里所長が『勉強していれば、そのうちに留学もさしてやる』といつたが、その順の廻つて来る迄には先輩者が五六人もあると考へて悲観していた。

明治三十二年(一八九九)四月伝染病研究所は官立となり、英世は助手に任ぜられた。そしてその月に彼の運命を定めた一つの出来事があつた。彼の学者としての生涯を通じての援助者・支持者となつたサイモン・フレクスナーとの会遭である。フレクスナーは当時ジョンズ・ホプキンス大学の病理学教授であつた。(アメリカ、イギリス等では、病理学と細菌学が離れないで、病理学という名で取扱われている。フレクスナーは細菌学者である)。同氏は、ゲイ其他数名と共に、フィリピンに於ける合衆国軍隊の衛生状態視察の為に派遣され、横浜に寄港したので、東京に來り、伝染病研究所を訪ねたのである。所内で英語に通じていた英世が選ばれて、その案内役を命ぜられたのである。更に続いて市内の視察や案内の役をもつとめた。この案内中に英世はフレクスナーに、自分の渡米研究の志のあることを話して、いわば氏の脈をひいてみたという。フレクスナーは、其はよい考へであると答へ、その節は力添えをしようと言へたという。後日同氏は、渡米を奨めるようなことはいわなかつたといつたそうであるから、要するにその場の辞令であつたのであろう。併

し英世は躍り上らんばかりに喜んだ。無理のないことである。発表した論文があれば見たいという申出に對して、順天堂時代に書いた二三の報告と、前記のカールトンの訳本を著作として示した。

かくするうちに彼が管理の責任をもっていた研究所圖書室の書籍紛失事件が起つた。事の真相は何れにもせよ、日頃の放縦な生活はこの場合に彼にとつて極めて不利であつた。それでやるせない日を送り迎えていた彼に、一つの途が開けた。その時、我国で海港検疫の制度が開始され、英世は海港検疫官補に任ぜられて、五月に横浜検疫所勤務となつた。検疫官の仕事は彼にとつて愉快なものであつたらしい。金びかの制服が彼を喜ばせたということである。間もなく彼はその才能を現らわした。即ち寄港の米國船アメリカ丸にペスト患者を発見したのである。我國検疫の力量を國際的に示したわけなのである。

諸伝記には、此が我國の海港検疫所でペスト患者を発見した最初であるとしてあるが、一応飯村保三博士の『日本内地ノ「ペスト」流行ニ関スル調査』に就てみると、此は第九回目に當つてゐる。伝記には九月上旬となつてゐるが、右の調査書では六月二十二日となつてゐて、前月に長崎で日本船で発見されている。その前年には三回あり、イギリス、アメリカ、日本各一艘である。

ペストは更に彼の前途を拓いた。当時遼東の貿易の主港であつた牛莊(中國遼寧省)にペストが流行し、各國の領事館が協同して國際衛生処を設け、我國当局に医師の招聘を申込み来り、北里博士の手で詮衡が行なわれて、英世がその一員に選ばれたのである。一行は村田昇清氏を主班として十五名であつた。出発に際してまたしても血脇氏の厄介になつた。(このことは後に語らう)。牛莊では英語、ドイツ語、フランス語に通じていることが重宝(ちゆうぼう)がられて本部詰の仕事をした。船中で支那語を勉強して、早速活用したり、支那官憲とも親しく交わるというような目立つた才能をも示した。

一行の行つた時は、猖獗しやうけつを極めていた流行も下火に傾いていて、やがて終熄しゆうそくしたのであつたが、日本人医師達は、支那人間に信頼を受けたので、懇望こんぼうされて、一般の治療も行なうことになつた。臨床には経験も学識も乏しかつたのであるが、英世は人気を一身に集めて働いた。その間にペスト菌の寒冷に対する抵抗力などの試験を行なつて英文の報告を書いた。支那語も話せるようになり、ロシア語にも一通り通ずるようになったという。一面にはまた高給二百兩の俸給を欽樂郷に蕩盡とうじんしていた。渡米の宿志をはたす為ための貯蓄をするつもりであつたのだが、しようとはしなかつた。やがて翻然ほんぜんこの宿志が覚醒した時は、翌年の五月、一行の契約満期の時であつた。ところが囊中のうちゆう（さいふ）の中のちゆう無一文の悄然しやうぜんたる彼に、また次の助けの手が出て来た。ロシアの衛生隊が、更に百兩の増俸をして、居残りを求めて来たのである。其それを受諾して、今度こそは渡米の費用を貯蓄せんものと決心して、一人の助手と共に留まつた。併ひかし間もなく起つたのが義和団匪の蜂起である。其それが為めにロシア側も引上げることになつて、彼の任も切れた。この三箇月間に彼は二百兩の貯金をした。併ひかし其それは親しく交わつていた日本人に消費されて、残つたのは空証文一通だけだつた。

牛莊から歸つた彼は、久振ひさしりに帰省した。母を見舞い、また渡米費用の調達の目的もあつた。村で奉仕的の診療をして、親切が評判を博し、年来の病気が治つたという例もあつて、旧のてんぼう、清作は名医として人気を集めた。旧友八子彌壽平氏を訪ねて渡米費用の援助を乞い、五百円貸与の承諾を得て喜んだ。併ひかし小林先生から、先まず背水の陣を布いて奮起せよ、他人に頼ることを断念せよと、戒められて、八子氏の厚意を辞退した。

歸京して無一物であつた英世は血脇氏方へ食客として入り込んだ。血脇氏はその齒科学校の病理学と薬物学の講師にした。前記の高山齒科医学院は、東京齒科学院となり、血脇氏が校長として経営し、大成中学の校舎を間借りして夜間授業をやつていたのである。彼には渡米の熱意が燃えていたが、費用の調達は何として

も分に過ぎた大問題であつた。仲介や紹介やで三四の知名の士との交渉も試みられたが何れも纏まらず、船医となつて渡航することも考えられたが、それも不可と知れた。最後に、血脇氏に伴なわれて箱根の温泉に数日を過した間に、同宿の婦人に見込まれたのが機縁となり、その娘女と婚約を結んで金三百円の渡航費の提供を受けることになつた。

旅費が出来たので、帰郷して母と小林先生を訪ねた。旅費の出途に就ては先生には打明けなかつた。先生は父親や母親、一家一切のことは引受けるから安心して行けといつた。英世は、先生夫妻に今後お父さんお母さんと呼ばせて下さいと願つた。そして親子の義縁が結ばれたのだつた。夫人はその年の養蠶の収入だといふ金二百円を出した。後年英世の手紙には生母を城母と書き（城は三城瀉の城）、先生夫妻を父上様、母上様と書いている。

かくして明治三十三年（一九〇〇）十一月五日、齒科学院の生徒に新橋駅で送られ、アメリカ丸に身を託し、血脇氏と検疫所の二三の旧友などに送られて、横浜をあとにした。二十五歳の暮である。出帆前にまた血脇氏の厄介になる事件を起した。此は後にゆずる。これまで彼に対して寛大であり、迷惑を迷惑としなかつた血脇氏は、船上に於て、巖然として、彼の短所缺点を指摘して、痛切に訓戒を与えた。君が秀物であつたか、悖徳漢であつたかの運命を決する大事の首途だ。今迄の汚名を雪ぐだけのものになつて帰つて来て呉れ、子を谷底に投げ入れる親獅子の思いだ、忘れるなよ、といった。

サンフランシスコに上陸、五日の汽車旅の後に、志ざすフィラデルフィアに着いた。そして直ぐとフレキスナー教授をペンシルヴェニア大学に訪ねた。同氏はジョンズ・ホプキンス大学からここに転じて来て間もないのであつた。約束によつて頼つて来ました、助手として勉強して下さい、学資の用意はありません、と

いのであるから、フレキシナーを面喰めんくらわした。一応大学当局と相談してみようといった。案内して貰もらった最下等の安下宿屋の屋根裏の室に泊とつて、待つていた返事は、学長は同意を与えない、諦あきらめて、他の途みちを考もえずになるまい、というのであつた。懐中には僅わずか二十三ドル半しかなかった。教授の家に同居どうきよさして勉強べんけんさして貰もらえる位に考もえて来た見当はがらりと外れた。公使館か領事館かで働く口はないものかと考もえた彼は、同船で渡航して来て、血脇ちまき氏の紹介で船中世話になつて来た、公使館書記官の小松緑氏に旅費の借用をたのんでやつたが、謝ことわられた。

窮状を見るに見かねたフレキシナー教授は、大晦日の日に彼をよんで、毒蛇どくへいに就つて知識があるかと質たずねた。伝染病研究所で守屋伍造氏が蛇毒の研究をしていたのを野口は思い出した。そして、知らないが勉強べんけんしてみたいと答えた。やつたことがあると答えたとも伝わっている。また其以上のことを答えたという噂も存ぞんしている。何れであつたかは兎とに角かく、それなら個人の助手として其それをやつて見て貰もらおう、ということになつた。手当は月額八ドルしか出せない、学資は国元からの送金を受けねばならない、ということであつた。年があけて直ただちに古い建物の窮屈な室で仕事を始めて、一先まず安堵あんこはしたものの、学資の送金ということには困こつた。またしても血脇ちまき氏にたのんで、金百円の送金を得た。『鰻鮒うなぎの水にも愈いよいよまして辱かたじけなく拜受たいまつ奉そうろうり候』と礼状に書いてある。

折からサンフランシスコにペストの流行があつて、フレキシナーは政府から現地に派遣されたので、サイラス・ワイア・ミッチェルという老ドクトル宛の紹介状を与え、指導を受けよといつて旅立つて行つた。ミッチェルは当時七十歳を超していた神経病学の老大家で、四十餘年の大学教授生活から隠退いんたいしていた。同氏は父子二代の毒蛇の研究で、父親が其の研究を始め、広く各地から蛇毒を蒐集して居り、同氏は其それを継承して仕事を続けて来ていたが、老境に入ると共に、研究室の仕事に精が出なくなつていた。そこへフレキシナー

の許にたどりついて来た、東洋の青年が紹介されたのである。

寒い雨の土曜の晩に、野口が訪ねて行つたその時のことが老ミツチエル夫人に鮮かな記憶として残つたといふことである。ミツチエル老は人の心の奥底まで見抜くような眼力をもつていた。相手の日本青年は鋭い眼の持主である。『青い眼と黒い目の睨み合っている、あの様子を御覧なさい』と老夫人はその娘にいつたという。ミツチエルは野口を気に入つて感じた。この日本の青年は非凡な心の持主だ。尤も東洋人が西洋人の中に入つて来て果してどの程度まで發達し得るものか、そこは解らぬが、とその息子にいつたさうである。ミツチエル老は既に日本に関心をもつていて、美術品、特に扇を翫賞していた。

この会見で老ミツチエルは、蛇毒の研究を託した。その希望は、蛇毒の毒物学や免疫学等の新らしい方面の研究に進んで呉れというのであつた。英世にはまるで無知識といつてよい領域であつた。そして此から学人野口の生涯が始まるのである。フレクスナーと同道して日本に来たゲーの指導のもとで、最初はまるで見当のつかない仕事を真剣でやつて見た。フレクスナーの留守中に、大学の図書館で蛇毒に関する文献を丹念に涉獵した。そして三箇月の後に教授が帰つて来た時に、二五〇頁に書き上げたものを提出した。この精励は信頼を値したのである。月額二十五ドルを支給されることになつた。

ミツチエルから供給された材料の蛇毒は乾燥されたものだつた。フロリダから生きている響尾蛇ガラガラヘビをとりよせて、生まな毒で研究が始められた。蛇から毒を採取するには、助手に革紐で蛇の頸を巻いて支持させ、口を開かせて、そこに時計皿を挿込み、毒腺を絞るようにして、だらだらと毒の粘液を出させるのである。周到細心を要する、危ない仕事である。この仕事を野口は最も好んでやつたといふ。六月に書いた手紙に、『蛇毒の研究は一月以来引続き一日も休暇なしに朝の九時から夜の六時まで毎日やらかし未だ半分にも達せず候、実に広漠なる問題にて教授と共に興に入り居り申候、日記は既に五六百頁に上り書籍にするも二三百頁に相

成る位に候。愉快に御座候』とある。

研究は十月になつて一区切り完了し、十一月の『ナシヨナル・アカデミー・オブ・サイエンス』でその概要が発表された。ミッチェル、野口の連名でフレクスナーが演説して、野口はデモンストレーションを為したものである。老大家を主とした少人数の会合であり、其等から親しい言葉をかけられ、また賞められ、夜はホテルのバンケットに招かれ、また日刊新聞に記事が掲載されたりして、彼の得意は頗る大であった。(印刷された論文はフレクスナー、野口の共著となつて居り、ミッチェルの序文が附してある。関係者が三人とも名を出したわけである。校正の時まではフレクスナーの名はなかつたのだという。後に関係があるから附記して置く)。且つミッチェルの推薦によつてスミソニアン・インスティテュートのフェローに挙げられて二千ドルを給されることになつた。助手としての期限は二期で、其は来年の五月で終るわけであり、それで大学との関係が絶たれる懼れがあつて、心配していたのであつたが、此で救われることになつた。この頃に百科事典に日本医学に関する一項目の執筆を依頼されて、『小生は及ばずながら日本を代表致申候』と手紙に書いたりもしている。

それから蛇毒研究の第二段の仕事に入つた。そして勉強は白熱的になつた。溶血作用の研究に入つたのである。純学術的研究の外に、当時蛇毒咬傷の唯一の治療血清であつたフランス製の血清が、アメリカで最も重要な毒蛇である響尾蛇の咬傷に対しては効果が十分でないことがわかつて、其を製造すべきであるという実際的な問題もあつた。

このように仕事が進んでも、一方にまた心中には苦惱が往来していた。将来を案じて他の大学に転じようかと考えたり、ドイツへの遊学を切りに望んだり、種々の計画を細々と列記した手紙を書いたりしている。一面には星を一杯に描き、他の一面には骸骨を描き、『成功か自殺か』と書いて、部屋の壁に掲げて置いたりし

た。また人間としての落ちつきが出て来たようで、『小生は出立時頃までは夢中であつた。何んでも成功さへすれば立派な人間だと思つたことがある。しかし当地に着いて、自分の最も窮した時分に……翻然悟る所があつた。人間は技倆ばかりでは世に立てない。……技倆は第二者であることを始めて目が醒めた様に感じた。……是非共人らしい人になりたいとのみ思つている』と、血脇氏に宛てた手紙のうちに書いてある。

夏六月から九月初旬まで、ボストンに近いウッツホルの臨海実験所へ研究に行った。この実験所はイタリアのナポリ、イギリスのプリマスなどと共に、臨海実験所の最も隆盛なものの一つであつて、夏季には生物学方面の研究者が集まるところである。英世はカーネギー研究所から費用を給されて、蛇毒の海産動物の血球溶解作用の研究を行なつたのであつた。

ウッツホルから歸つて十月に、大学の病理学の助手に任命され、来年度にはヨーロッパに留学させる豫定だといふ内意を聞かされたりして、幸福に二十七歳の春を迎えた。研究の結果は続々発表された。また響尾蛇ガラガラヘビ咬傷の治療血清の製造も出来た。

三月になつてニューヨークのロックフェラー医学研究所の設立が内定し、フレクスナー教授の其の所長就任が決定した。そして其と聯関して英世のヨーロッパ留学が具体化した。フレクスナーは彼を伴なつて研究所入りをする豫定なのである。十月にニューヨークを立てデンマークのコペンハーゲンに向つた。

ペンシルヴェニア大学の三箇年、此は英世にとつて最も意味深い歲月であつた。浮ぶか沈むかの危ない時であつた。また深刻な試練の時でもあつた。彼はこの歳月を泳ぎ通し、働き通した。そして此あるを得たのはフレクスナー教授の信頼に由るものであり、氏の力添えによつたものである。そして氏との直接の師弟關係、氏の誘導と交情とは彼の死に至るまで続いた。

コペンハーゲンに留学させられたのは、フレキスナーとその師に当るウエルチの意図によるものであって、其には理由があつた。免疫学、血清学では、ドイツに於て秀でた学者が相繼いで現われて、斯界を独歩するよなな壯觀を呈していたのであるが、ヨーロッパの偏隅たるデンマークのコペンハーゲンに、新しい光錠が光りつつあつた。その学者は国立血清研究所長マドセンであつて、アレーニウスという学者もいた。その新しい光錠というのはこの方面の研究に数理物理化学的な取扱いをとり入れたことであつた。この学風の将来に矚目したフレキスナー、ウエルチは、野口をそこに学ばせて、新研究所に其を導入せんとしたものと思われる。『何故に独逸を後にしてコッペンハーゲンに行くかといふに、同地に豫而有名の学者有之、世界の視線は漸々彼地に向ひ居るを、早くも小子の師フレキスナーと、米国病理学の指揮者たる……ウエルチ兩人が看破し、流行の独逸を後にして機先第一に小子をコッペンハーゲン大学に送る訳に有之候』と手紙に書いてゐる。英世はデンマークへの最初の外国留学生であつたという。

コペンハーゲンは美しい落ついた町だということである。そこで英世はマドセンから手厚く優遇され、アレーニウスとも親しくして、自由な和らかな気分の研究することが出来た。研究項目としてはマドセンと共に毒素と抗毒素の仕事をやつた。響尾蛇ガラガラヘビの毒を携えて行き、マドセンと協同で、血清作用の研究などもした。当時三十六歳であつたマドセンが学界に光錠を投じていた、研究の新味は、野口をして、『自分に仕事は正確に定量的にということを教え込んで呉れたのはマドセン先生である』と後々までいわしめるものがあつた。コペンハーゲンで論文十篇を書いた。

留学中に日露の戦が起つた。『日夜戦争の事のみ屈託して研究も面白からず候』と、四月十四日づけの手紙に書いているが、留学期の終る九月になつては、皇軍（日本軍。当時は軍隊は天皇の軍隊とされてい）は連勝し、それを背景とし、マドセンの推賞もあつて、英世は人気を集めて得意であつた。

歸途には先^まずイギリスに行き、ロンドンの医学会で蛇毒の研究の講演をし、ドイツ、フランスを廻り、フランスでも講演をした。ニューヨークに帰り着いたのは九月の下旬であつた。

三生 涯——(二)

九月にニューヨークに帰つて来た野口は、既に開所されていたロックフェラー医学研究所の助手に任ぜられた。これから、アフリカの辺土で学に殉ずるまで、二十有五箇年の歲月がこの研究所員として送り迎えられるのである。

先ずこの研究所の来歴を述べて置こう。此は一九〇一年にジョン・ディー・ロックフェラーが十年間二十万ドルを支出するプランで始まつたものである。そして第一年の終りに、以後の九年間に研究所の建築及び作業の支持の為に百万ドルの追加が申出られた。最初の四箇年間は、世界各地での研究者への援助のみに支出された。一九〇四年に、自己の研究所を完成する準備として、産院児科病院であつた建物の一部に改造を加えて、病理学、生理学、化学の研究室を開いた。そして一九〇二年に、所長に選ばれていたフレキシナーの主宰のもとで作業が開始された。最初の所員は、フレキシナー、メルツァー、オピー、野口英世、スウィート、レヴィン、ビッチナー、ハウトン、アウアーの九人であつた。一九〇二年十月に、現在の位置をロックフェラーが購入し、更に一九〇四年に土地を買い加えて、二箇年を費して研究室の建物、動物舎、動力室が建てられた。その費用約三十万ドルで、一九〇六年五月に正式に開所した。一九〇七年にロックフェラーから二百六十二万ドル餘の資金を得て基礎の堅いものになった。その年に、開所以来考えられて来た研究室と密接な連絡のもとに患者の処置治療等を研究する為の施設が必要であるという案が熟して、約九十万ドルの資金を得て、病院と隔離病舎を完成し、一九一〇年十月から患者を收容した。其と同時に研究所の増大した能力を支持する為めに、新たに三百六十万ドルがロックフェラーから与えられ、一九一一年には更に九十二万五千ドルの追加があつた。これ以降のことは略する。

九月に野口が帰って来た時には、研究所の仕事は仮の建物で既に始められていて、助手(アシスタント)に任ぜられ、直ちに仕事を始めた。これからの研究所員として学的活動の時期、その年数二十五箇年。此が一九一五年の三箇月の母国訪問を中心として、前十二年、後十三年と、大体前後に切半されている。そして一九〇四年からの前十二年を、私は一九一〇年までの七年と一九一一年から後の五年とに区画してよいように思う。この区画は彼の学問上の仕事の上で立てられるのであるが、不思議と彼の生活の上にも此が当嵌まるようである。また更に彼の研究所での位置の変化にも大体一致しているのである。先ず此を大体に於て見て置こう。

一九〇四—一九一〇年——蛇毒の研究の継続、血清学、免疫学の諸研究の発表。結核、トラコーマ等の大きい問題にとりついて、成績をあげ得ず、苦闘した時代。位置は一九〇七年にアソシエートに、一九〇九年にアソシエート・メンバーに昇任している。

一九一—一九一五年——スピロヘータの研究大成の時期。一九一二年に結婚。一九一四年にメンバーに昇格。一九一五年帝国学士院賞授与。同年母国訪問。彼の最も得意の時代。

一九一六—一九二八年——主として黄熱研究。遂にアフリカで其に殉じた、彼の悲劇的の時代。

アシスタントになって、千八百ドルを給され、新研究所で仕事することになった野口は、研究所の近くに下宿を定めて、全く人間離れの勉強奮闘をした。仕事としては蛇毒の研究を継続し、コペンハーゲンでの研究に続いて免疫学、血清学の研究を進めて、黴毒にも及ぼし、多数の報文を出している。一方ではこのような純学問的の地味な研究の外に、世間一般も讚歎するような派手な問題をものにしようにという野心を起していたらしく、トラコーマの病原体の発見を目ざした。また手紙によると、外に結核の治療法などにも手をつけたことが知られる。トラコーマは報文を出すまでの仕事は出来なかったが、後に微生物を培養して報告した。

蛇毒の研究は、其を總括したものが一九〇九年に、カーネギー・インスティテュートの出資によつて『毒蛇及び蛇毒』と題され、三一五頁の大冊子として、同インスティテュートの出版物第一一一号として出版された。この研究にはフィラデルフィア時代にインスティテュートから研究費の出資を受けて居り、出版の爲めの出資も約束されていたのであるが、デンマークでも、ニューヨークに歸つてからも研究が続けられ、また二三年は他の研究に専念して、以前の研究の總括などには気が向かず、延び延びになつていたものらしく、最初の話から八年もたつて完了したのであった。

血清学、免疫学の方面では報告を続々出し、エオシンの作用、特に其の破傷風菌との關係、コンプリメント等の研究には學術的の価値の大きいものとして注目されるものがある。

一九〇五年にシャウデインとホフマンがベルリンで黴毒の病原体を発見し、其から二年後には同じくベルリンでワッセルマンが黴毒の血清診断法を発表した。此は研究の「大もの」を目がけていた野口に衝動を感じしめた。ワッセルマン反応は彼の当時の研究の領域のものであったので、負け嫌いの彼には大きい衝動であつたろう。この反応に関する研究を続々行なつて数篇の論文を発表した。当時アメリカでは血清学免疫学の研究は至つて振つていなかった。臨床医家や開業医師の社会などでは関心がもたれていなかったのであるが、黴毒の血清診断ということは實際上範圍も広く、直接の必要も大きいので、其に関する知識の要望が俄然高まつた。野口は講演をしたり、実地示説をしたりして、大いに努め、そして一九一〇年には『黴毒の血清診断』という単行書を書いた。その翌年には、脊髄液に酪酸を作用させて黴毒を診断する方法を発表した。血清学の関心が高まつて、血清学会が出来、其の会頭に押されて、二箇年間其をつとめた。(此を謝絶したともいうが、茲では奥村氏に従つて置く)。

一九〇七年にペンシルヴェニア大学からマスター・オブ・サイエンスの学位を授与された。一九一一年(明

治四十四年)に医学博士の学位が授与された。約二年前に京都帝国大学に論文を提出して請求していたのである。

彼の生活状態はこの時期に於て最も異常であつた。二四時間主義ということをして、八時に研究所に行き、朝までは宿で彼を見る者はないのが常で、宿に帰つて寝ない日が多かつた。訪ねて行った奥村氏に、『これで僕は三月の間下宿に帰つて寝た事はないのだが、君が来たから今晚は居よう』といつて、度胆をぬいたそうである。研究の上で、彼の心はあせつて、精神は頗る苛立つていた。前にいつたように、血清学免疫学の上の細かい研究では満足が出来ず、学界も衆人も目をみはるような仕事を見せてやりたくて苛々していたのであろう。精神状態も動揺苦惱を続けていたようである。異常不規則な生活に、過度の喫煙、それに飲酒、それに経済上の不如意もあつた。

一九〇六年に、新築の研究所のすぐ近所に、医師の宮原立太郎氏と、五室のフラットを借りて共同生活をした。そこで宮原氏は診療をやり、兩人で経済的な生活をしようというのであつた。このフラットの生活が当時の野口の生活及び気持の様をよく物語っている。エックスラインから、この時期の彼の記述を左に借用する。

『室代は一週間たった五ドルだ。宮原が食事を調理するだろう。……相変らず幾晩も自分の寢床には歸つて来ない。矢張り下宿でしていたように朝食前に帰るのだが、時としては全然歸らぬことすらある。宮原は八時頃に、いつも自動車に少しばかり注意しながら、急いで研究所をさして走つて行く野口の姿を見る。……タクシーに乗る方がよい、と彼はいう。そして其を執行する。』

『野口が家にいる時には、調理の任に当るのはいつも宮原だ。野口は書き物をする、書き且つ喫煙する。』

同じような精力を以てやる。独特なことは、野口が前夜ぐっ通しに起きていても、精力があることだ。どうも解らぬことだ。彼はどんな幻滅を感じた際でも、どんな激昂した時でも、どんな意気銷沈の折でも精力を失わない。唯その時には顔色が青くなるだけだ。彼は大いに宮原に話しかける。折々は熱狂して話す。……大いに共鳴する。二人の友情を助けるのは、宮原は野口が金を借りる望をもつことの出来ない日本人たることだ。いづれかといえ、却つて宮原の方がその希望をもちそうだ。だから動もすれば野口は、その宮原を嬉しがらせたり、困らせたりする、あらゆることを勝手にやらかす。二人は大に女の子の話をやる。人は誰にかその話をせねばならぬ。その話相手は憚るところのない者がよい。自分が金銭を貸す男ならいよいよ宜しい。そして其が日本人であればますます宜しい。……研究所では野口は平壁と同然である。そこで彼を見た人が旨く評したように、全く平らな東洋風の壁である。

『僕の身体を見給え。小さい。けれどもこん中の臓器は強壯だ』。彼は入浴せんとして裸体になった時に、こういうのである。前にまた後に潤歩する。宮原は彼を好いている。宮原は彼を窘めることがある。彼も亦宮原を窘めることがある。彼等は相愛する人達がするように、互に窘め合うのである。野口は室内を躍り廻る。そう度々ではないが、多くは気紛れにやるのである。調子のよい時には彼はこの上もなく陽気な男である。話して熱中すると特にそうである。宮原は喜んでその話を傾聴する。』

奥村氏の伝記に、宮原氏と郊外に散歩して、檻の動物を見た記事がある。ブロンクスパークの動物園であろう。彼は宮原氏を無理に獅子の檻を見させて、『猛獣の活動状態を見て置き給え。君も亦いつか何かの参考になるよ』といい、そして『僕は丁度従順な小羊のようによく働いて、遂には獅子の餌になって食われて仕舞うんだね』といったという。

医師の村瀬九郎氏の宅が当時の梁山泊で、いろいろの人が集まっていた。野口はそこへしばしば出入して

いた。序に、そこでの野口に就てのエックススクインの描写を紹介して置こう。

『レキシントン通の或る三階に、或る人達の集まるフラットがある。野口も其所へ来る。いつも彼特有の気分で来るが、時によるとひどく沈んで来ることがある。その際に彼を連れ出すのは容易でない。屹度彼は大きな葉巻を銜えている。……彼は二十四時間に十五本も喫うという者がある。もつと喫うという者もある。折々葉巻を置いてウイスキーの杯を執る。そのウイスキーを極めて徐々に、極めて徐々に飲む。誰かがもつと其を強いようとする、彼は忽ち笑つて、母の教訓をいつて聞かせる、「飲んでよいが、唄い出すほど飲むなよ」というのである。きまつて天井の一点を見詰め、其の外に眼を外らさないのが彼の癖だ。誰かが問いかけると、「ウム」といい、或は「ア、」といい、或は何ともいわぬ。ところが或る夜には屈託なく話して、流暢にやつていたが、忽ち離していた例の天井の一隅に眼を向ける。騒がしい会合は彼の性に合わない。彼と一ドクトルは次室なる厨へ去る。そこで一人でウイスキーを飲むのが好きなその一方は、壘の口から其を飲む。』

宮原氏との共同生活は一年続き、同氏は帰朝した。ひどく郷愁の思いに襲われていた野口は、その別れに、羨望の嘆を洩らしたのは、涙ぐましいものであったという。その後も引続いて、フラットで独住みをしていたが、一九一〇年になってまた共同生活者が出来た。其は同じく血脇氏が目をかけて来た青年で、陶菌の仕事志して渡米して来た、荒木紀男氏である。依頼心のないこの青年を野口は気に入って、フラットに同居させたのであった。野口はこの青年を可愛がり、荒木氏は彼に先生として甚大な尊敬と誠実とを以て奉仕した。彼は致学上の心得を語って鞭撻し、心情を発露する相手ともした。この共同生活は野口の黴毒の血清反応の研究に熱中していた時であつたから、健康者の血液の材料として、荒木氏は散々に血液を採取された。宮原氏との生活の模様と照応させるために、この共同生活の折の模様のエックススクインの描写を借用して添えて

置いっ。

『日曜に荒木を御馳走に連れて行き、そのあとで二人は散歩する。日曜には野口は別人だ。他の日には半狂人である。荒木が始めて来た当時ほど狂人じみではない。野口も変わった。といつても、まだ半狂的である。自分は自分の生活に満足していない、などと折々いう。……研究所でも自分は幸福ではない、と時々いう。併しそれを口にすることは憚っているらしい。夜、たまたま家にいる夜には、宮原がいた当時のようにひどい。野口は喫煙し且つ書く。時に読書している時でも、決してその眼を書物から離さない。彼は寸陰をも利用する。彼は周囲にどんなことがあつても決して知らぬ。荒木が何といつていゝかも知らぬ。荒木は宮原がしていたように料理をする。折々は餘儀なく野口に炊いている飯の番をたのむことがある。荒木は其を好まぬのだが、野口はいつも喜んで其を引受ける。彼は椅子を勝手へ持つて来てガス竈の前に据え、足を重ねて読書を続ける。俄かに荒木の方を向く。何の臭いだらう。彼にはその臭いが自分の番をしている米の焦げる臭であるべきだとは少しも悟れぬらしい。荒木は急いで釜の蓋をとる。野口はのぞき込む。頭をふる。「イヤ失策った、一人で外で食事しよう」。彼はきまつて同じ言葉を使用する。二人は帽子を被つて、勝手から出て、きまつて同じ日本料理屋へ行く。廉いのである。給仕人は彼の姿を見ると、すぐ来て給仕をして、何を注文するのか質ねない。野口は始終同じものを喰べているからである。時によると野口は一言も発しない。挨拶の言葉さえもしない。すぐ書物を開いて皿の傍へ置く。そして荒木は決して其を邪魔するようなことをしない。けれども荒木は野口の喰べ方が目について仕方がない。それは特別だからである。彼は肉叉で皿の方を突くが、何を刺したかは一向頓着せずに、肉叉の先に附着したものを何でも口の中に投げ込む。而して箸を用いる際も、その様子はやはり独特である。——茶碗の中を見ずに、箸で米を口中に掻込むのである。』

一九一一年からの五年間が野口にとって最も得意な時である。

シャウデインの**梅毒**の病原トレポネーマの発見(一九〇五年)は近世医学界の最も耳目を集めたものであつて、其の研究には多くの学者が轡を並べて進み立つたのである。病原体が検出されれば、次に来るものは其の培養——**純粹培養**——発病力を有する**純粹培養**を得ることである。諸地の研究者達によつて先陣が競われていたこの仕事は、一九一〇年からその翌年にかけて五六の研究者達によつて、ゴールインされたのであつた。そして野口の仕事が特に一頭地を抽いていた。

トレポネーマはスピロヘータ類の一属である。スピロヘータは、ごく繊細な長い体が、螺旋状に捲いている微生物であつて、普通の細菌とは種々の点に於てその性状を異にしている。この類には、スピロヘータ(回歸熱の病原体等が此に属する)、トレポネーマ(梅毒の病原体、口腔内に寄生するもの等が此に属する)、レプトスピラ(黄疸出血症の病原体が此に属し、後年野口は此の一種を黄熱の病原体とした)等の諸属が区別されている。

野口の**梅毒**の血清反応の研究は、前述の如く、着々進められて業績が出ていたが、培養の方面にも進んでいった。いつ頃に手をつけていたか明らかでない。このトレポネーマの培養の仕事は先ずロシア人のシエレシエフキーが先鞭をつけた。其は一九一〇年のことである。併し此は**純粹培養**ではなかつた。そしてその年にドイツのミューレンスによつて**純粹培養**が得られ、翌一九一一年になつて野口は独自の**純粹培養**に成功し、発病力のある**純粹培養**株を作るに到つたのである。続いて其から翌年にかけて、ソワデー、ホフマン、トマチエウスキー、ドイツに留学中の島峯徹氏、中野等氏等の**純粹培養**の成功報告が続出し、**培養**株による動物試験にも成功した者もあつたのである。それ故**純粹培養**の成功は公正にいつて野口一人のものではない、併

しその方法が優れて居り、多数のトレポネーマが液体培地中に發育させられるという点に於て、断然一頭地を抽んで居るものなのである。なおまた野口は、他の研究者の純粹培養と稱するものは何れも悪臭を發するが、自身のものは決して悪臭を發せず、其を發するものは不純なものであり、純粹なものは彼独自の方法、即ち培養基に臓器片を入れたものでなければ發育しないといった。

純粹培養を得た彼は、その方法によつて多量の材料が純粹に得られることを利用して、其を黴毒の診斷用に供することを考えた。即ちコッホが結核菌の培養からツベルクリンを製したと同じ方針で、純粹培養トレポネーマからエクストラクトを作り、其を用いて皮膚反応を試験して黴毒の診斷をするという方法である。此を「ルエチン」と命名した。即ちルエチン反応検査法というものである。

野口の黴毒研究に於て最も輝かしい業績は、麻痺性痲果と脊髓癆の腦と脊髓からのトレポネーマの検出である。この仕事の成就したのは、一年を隔てた一九一三年である。そしてこの間の一九一二年に彼の生活が一変りしている。茲でそのことを挿んで置こう。

荒木氏とフラット生活をしていたことは前に述べた。一九一二年に入つて彼は荒木氏との生活をやめることをいい渡した。結婚する為めであつたが、其は告げなかつた。そして四月には結婚式をあげた。夫人はメリー・ダイジスという。結婚までの経過はよく伝わっていないが、デンマークから歸つて間もない頃に一度会い、其後会わずにいて、その頃に一回会つたのが機会で決定したということである。デンマーク留學中に談の始まつた結婚話があつて、歸米後に話が続いて居り、彼の室には写真が掛けてあり、彼地から使者が来たりしたのだが、その談は流れてしまつた。此は良い家柄の令嬢であつたという。彼は円顔を好んだという。新夫人は円顔である。デンマークのも円顔であつたという。何故か知らぬが、彼はこの結婚を内証にしてい

た。フレキシナーにも一時知らさないうでいた。

家庭生活を始めた彼の生活は、宮原氏、荒木氏との生活のようなものではあり得ないことはいうまでもないが、変つたにしても、其は普通のものに近いものではあり得ない。十分に彼らしい独得のものであった。自宅を研究所の延長とすることは以前と変りはなかった。顕微鏡や鏡検材料を持込んで来た。細菌類の培養の道具を始めさまざまなものまで持込んで来た。台所も湯殿も其で場所が塞がれた。

同じ家のフラットに彼の親しい日本人が住んでいた。其は写真専門家で芸術家の堀一郎氏である。二人は深く親しく交わつた。堀氏から将棋を習つて、其に熱中した。下手だったが負けることの嫌いな彼は、勝つために極度に熱中した。そして一面には常人の考え及ばない仕事振りでも仕事した。食事の時にも人の寝る時間にも仕事をしたのである。

左にエックスタインから一節を引用する。

『この結婚生活には閑暇というものは極めて少ないことは明白だ。ビディー(英世)は研究所ばかりにいろ。……而も彼は其所で働くだけでは足りないで、自宅まで仕事を持って来て、台所まで一杯にする。その台所が一つの見ものだ。

『日曜日にも一時頃まで研究所にいる。それから電話をかけてメイジーは彼をよぶのがよいと思う。そうしないと限りがないからである。毎日夕方帰るのはいつも七時である。……少し急いでいる。「何処にいる、何処にいる」という。勝手元に入るのが好きで、料理に手を出す。……彼は電光の如く早い。堀もその室から出かけて来る。やはり勝手元が好きだ。そして或る時二人でメイジーにすぎ焼の仕方を伝授する。

『いよいよよ食事となると、ビディーは早く仕舞つて了うのを好む。メイジーと一緒に食事を始める時に

は、いつも顕微鏡と書類とをテーブルの一方に押しやって、半分だけクロスを掛けられるようにして、食事のまだ終らぬうちから、ちよいちよい顕微鏡を覗いたり、鉛筆を削ったり、黄色のノートの紙を抜いたり、煙草に火をつけたりする。やがてメイジがテーブルを拭き、皿を洗って、食堂に帰つて来る。彼女はビディーが書いているよりも寧ろ顕微鏡を覗いているのを喜ぶのである。彼が書いている、彼女が話をする、彼は突然鉛筆を投げ出して、「ア、書けない」と叫ぶ。……併し顕微鏡を覗いていれば、彼女は何時でも何か読んでやる習慣になつた。彼は顕微鏡を覗き、彼女は読むのである。時としては非常に遅くなるまで、彼は傾聴する。

『二人が家をあけることは極めて稀で、時としてオペラに行くが、これも度々ではない。……クリスマス・ディナーにビディーは独りでフレクスナーを訪問する。そして夕方帰つて来て、二度目のディナーをする。二重生活をやるのは難かしいことだわいという。その意味は、その結婚をまだ秘密にしているからなのである。』

麻痺性痴呆と脊髓癆に於けるトレポネーマの発見は、普通の発見とは意味の違つたところがある。そして、そこに彼の独自の面目が存するのである。此等の疾病は晩期微生物性とされ、メタシフィリス、パラシフィリスと呼ばれるのであるが、駆黴的治療が効を奏しないのが理解されず、またトレポネーマが発見されても、此等の症例では脳にも脊髓にも此が検出されず、其がために、黴毒との關係に疑をもつ学者までも出て来たのである。野口は此等のものからトレポネーマの証明を發心したのである。即ち彼から見れば、脳にも脊髓にもトレポネーマは存在している筈である。其を他の連中は見出し得ないのである。俺が見出してやる。俺なら見出し得られる、というのであつた。真鍋嘉一郎氏に、『出るか出ないかやってみようでは出や

せん、之は必らず出にやならぬと確信せんければならん』といったそうであるが、この場合は正にこの確信と意気によつて、努力の結果として到達し得た業績なのである。彼は自らを鈍才といったそうである。自らを鈍才というのは相当の英才だという自信がなければいぬ言葉ではあるが、この場合は彼のいう鈍才の一面を充分に發揮したものである。

彼は助手のムーアと共に七〇例の麻痺性痴呆の脳のうち十二例に於て検出し、更に二百例に於て四八例に検出した。脊髓癆でも十二例中の一例に検出した。

トレポネーマは繊細で螺旋状に数回巻曲している微生物であるが、麻痺性痴呆などでは、固有な体形のものでなく、球形か何か違った形態のものに変態しているのかも知れぬと考えられたのであるが、野口の見出したのは、形態は少しも變つていないものだった。但し見出したのは染色標本であつて、其が活きているのか否かは確かでない。そこで野口は更に其が生きていることを確かめるために、暗視野検査で非処置の材料を検査して、運動することを確かめ、其を培養し、更にまた動物試験で其の発病力を有することを確かめた。かくしてその研究は完全なものにされたのである。

この仕事も研究所と自宅、将棋と夜半検鏡の連続の生活の裡に出来たものである。エックススタインの次の一節が、この當時を活描している。

『截片標本を一包みにして家に持ち帰る。堀が来る。堀も野口が休息を必要とすることを知っている。けれどもまた、いったところで無駄なことも心得ている。メイジューは茶を運んで来る。昼間は暑かった。そして夜に入つていよいよ暑い。稍あつてメイジューは室を去る。二人は上衣を脱いで、シャツ一枚で将棋を闘わす。夜半過ぎて堀は自分のところへ帰る。野口に寝るようという。野口も寝るといふ。併しもう少しすることがあるという。メイジューも亦彼が寝ないではいけないと思ふ。……』

『戸外には音もない。最も近い市街電車はコロンプス街の方に去り、間遠くなり、遙かに聞えるのみである。涼しくなつて来る。彼は高いピアノの腰掛をもつて来る。腰掛けたまま廻ることが出来るので、よいのである。それから顕微鏡も持つて来る。昼間作つて置いた二百枚のスライドも持つて来る。彼はいつも二百枚を一組として、其を染色するが、一枚一枚其を見て行かねばならぬ。それで毎夜其を見ることにしている。』

最初のトレポネーマの発見された時、深更に堀氏は激しいノックをその戸に聞いて、行つてみると、シャツ一枚の野口が立つていて、いきなり『いた、いた』と叫んだそうである。「いた」というのは、郷土の言葉で「あつた」ということである。

この当時彼は外になお研究の手を拵げていた。フレキシスナーと共に小兒麻痺（脊髓前角炎）の病原体と見做されたものを培養して報告し、トラコーマから微生物を培養して此も報告し、狂犬病でも同様な成績を得ていた。なおその外に結核の療法にも手をつけていた。

トレポネーマの純培養、麻痺性痴呆の業績は、彼の声名を広く高くした。そして、九月にウイーンで開催されるドイツ自然科学者及医師総会に招待をうけてヨーロッパに渡つた。そして十一の都市を巡つて各地で貴賓の如き待遇をうけた。けだし彼の生涯の得意の頂上であつたであらう。パリに四日間滞在し、ストラズブルクに立寄つてウイーンに着いた。ウイーンでの会がこの旅行の華かさの頂上であつた。会合は極めて盛会で、彼は人気を中心であつた。講演はドイツ文で書かれたものをワンガーが代読し、自身はトレポネーマの純粹培養、麻痺性痴呆の脳、トラコーマ、狂犬病の病原体の培養、脊髓前角炎の病原体等のデモンストレーションをした。この会に列席した真鍋嘉一郎氏の談話が、当時の状態と、野口の行動に就て興味深く伝

えている。其の一部は後章で引用することにするが、他の一つを茲でエックススタインの記述を借用して紹介して置こう。当時の彼の向う意気の強さを物語っている。

『それから群集は野口が脊髄前角炎の病原体と見做す生体を示す顕微鏡の方に行く。ドクター達、教授達、講師達が静かに近づいて覗き込み、去る時に、名刺を野口の手に渡す。野口の手は其等の名刺で一杯になる。ベルリンのコッホ研究所から来た青年が一人だけ感服せぬ様子で、黙ってはいないで、質問を敢てする。その質問は本当の質問ではなくして、体のよい批評である。静肅は忽ち静肅を加える。併しコッホ研究所のこの青年は自分の価値を知つて、述べ進む。静かな人々はハラハラする。野口は顔色を赧くし、捲き上つた髪の毛はいよいよ著明になる。眼には何物かがある。顔の筋肉は微動だにしない。遂に彼は大喝する。彼はコッホ研究所に就て何かいう。一般的な悪意のあることをいう。その研究所では誰も彼が為した仕事の価値を見ることが出来ないでいるという風という。そしてその青年に向つて、「して君は何年細菌学を学んだか」という。彼はこの言葉をゆっくりと聞いて、それ以上は附加しない。この先に付け加うべきドイツ語を彼は考えられなかつたのが本当らしい。併しそれが一層よい。コッホ研究所の青年は彼に跳びかかりそうな劍幕を示す。野口は何心なく手中の名刺のうちからさがしていたが、じきに求めていた一枚を見出す。其に觸れるのが清浄感に反するかのよう、其を破つて投げ棄てる。』

ウイーンからミュンヘンを経てフランクフルトに行き、エールリッヒの款待をうけ、それから十年振りにコペンハーゲンを訪れた。マドセンの客となり、クリスチャン十世陛下からナイトの位を授けられた。ノルウェー、スウェーデンを経てロンドンに廻り、ベルリンに行つて、ニューヨークに帰つた。

帰米してからは再び苛立つた気持で日を送っていたようである。思うように仕事が進まなかつたからである。一面には、彼を喜ばせた事は数々あつた。即ち七月に研究所の位置がアソシエート・メンバーから最上

位のメンバー（正員）に昇せられて、五千ドルを給されることになった。但し此はマウント・サイナイ病院から、六千ドルの俸給で、研究部長として迎えられる交渉があつたに依じて、メンバーに昇進させて研究所に引とめられたのである。東京帝国大学に提出していた論文によつて同じ月に理学博士の学位が授与された。翌年の四月には、我国学術上の最高の榮譽である帝国学士院の恩賜賞が授けられた。そしてその九月に、十五年ぶりで母国訪問をした。

大正四年（一九一五年）の九月から十一月までの母国帰省は彼の生涯中で最も喜ばしい、感銘的な時であつたろう。この帰国は、老母を見舞い、恩師を訪ねて奉謝することが土台であり、また錦衣を示すという意図もあつたと思われる。而してまた彼の郷愁を慰するという満足があつたことも明らかである。

フィラデルフィア時代から彼は深い郷愁をもっていた。そして米国に落ちつくという気持は結婚の頃まではなかつた。母国に旅立つ頃の彼の心持はニューヨーク定住と決まっていたらしい。ロックフェラー研究所の正員という位置は、自己の意志以外には動かされない、特殊安定な而して高給が与えられる位置なのである。落ちつく気持になつたのも自然だと見られる。ところで母国での三箇月はその撚りを戻してしまつて、結局は『諦められぬと諦めた』といわしめるに至つたという。この辺に彼の人間味の豊満さが涙ぐましいまでに感得されるのである。以下の若干の紙面を此に費したい。

渡米二三年の間は、米国で勉強した上でドイツに渡つて一勉強して帰朝するつもりであつた。当時の我国の医学界の情勢として、ドイツ医学が絶対圧倒的な勢をもっている有様で、米国の医学というものはまるで尊敬されていなかつた。それ故に、彼としては、米国での勉強や、其処での名声というのでは満足出来るものでなかつたのは当然であつた。アカデミーでの報告をした翌一九〇二年の春には、『都合により米国を全三箇

年とし独逸及仏蘭西には數箇月見物位にして早く御膝許に参り度候やも不測候。是は学資金の都合にて、若し一時に三千弗(六千円)を都合出来候時は米国を二箇年とし独逸及仏蘭西に二箇年にて最初の五箇年を四箇年にて切上げ可申候。国の事や老母の事等考えれば少しは鈍り申候。尤も此の目的丈けの金額を此地にて得ざる時は(多分出来る見込)断然留任して米国の大金にて豊かに研究し』云々と手紙に書いている。「出来る見込」というのは蛇毒血清を製薬会社に造らせることであつたらしい。デンマーク留学に出発の時にも『滿四箇年か五箇年に帰朝の都合に御座候』と書き、同じ心持をいろいろに書き送っている。併しまた別の手紙には、『五箇年は愚か恐らくは米国に長く溜まり、日本には時々帰省位にして置き度き心算に御座候、理由は日本に於けるよりは凡ての点に於て将来有望なればに候』とも書いている。ところがその翌月の手紙には、『一先ず米国に帰り留学の復命をなし序に一書を著はし……名誉学位を受領し、芽出度帰朝するは横濱解纜(船)後五箇年の後即ち明後年に有之可申候』とも書いている。

結婚の頃には米国に留まる気持になつていたもののように、それと共に一度帰省したい気持が一方には高まつていた。その年の二月に書いた手紙には、『来年の六月中には必らず帰省仕るべく候』といい、『小子の大業は世界を舞台とするものにて、且つ世界の人道の爲め、日本の名声の爲め、米国の切望の爲め再渡米致す覚悟に御座候。……日本人に対する侮辱も排斥もみな日本に海外に名ある人なき故に候』という風に書いている。

永く留まるか帰国するかという問題と、郷愁とは別物であつて、研究と其の土台となる位置の問題から考へて、後者を克服していたに相違ない。併し情熱家であつた彼には、此が苦しいものであつたらうことは想像される。多くの手紙に此を感得することが出来る。共同生活をしていた宮原氏が帰朝する決心をした時に、慕郷の思ひの高まつていた彼が、其を羨ましそに聞いた様子は涙ぐましいほどだつたという。そして、『専

門で先鞭をつけて大いにやろうと思う』という宮原氏に、『どの位儲かると思う』と質ね、『ざっと三十万円位にはなるかね』というのを聞いて、『なんだい、たった三十万円。嘘でも百万円といえ。僕は、それよりは、こんな排日思想の高まっている北米国民に、いかに日本人が馬鹿に出来ないかということをはつきり見せてやるんだ』といったという。そしてまた至極真面目につけ加えて、『併し学問というものも一種の投機事業だよ、一生遣ったところで、果して当るか当らぬか分らぬ……』といったという。彼の面目が躍動している。

帰省の気持は高まっていたであろうが、実現せずして時は過ぎた。其には研究への執着の為めということもあつたであろう。併し一方にはその費用の問題であつたことも争われない。貯金をしようとしてもその出来る性分ではなかつた。前記の手紙に、『今年非常に多忙にて且つ貯金の準備も少き故』といつてゐるのは、その通りであつたろう。

大正四年（一九一五）恩賜賞を授けられた同じ四月に、彼と高山齒科医学院で共に玄関番をしていた石塚三郎氏が、三城瀉に彼の老母を見舞い、その老い衰えた姿を写真に撮つて、其を送つた。そして、訪問の始末を報じ、いま帰らなければ、また会うことは出来まい、という意味を書き送つた。親孝行の野口の帰省は決心された。併しそこには旅費という自分だけではどうにもならぬ問題がある。此を救つて呉れたのが星一（SF作家星新一の父。星製薬を築く。星薬科大学の創立者）氏であつた。星氏に電文した。『ハハニアヒタシ、カネオクレ』というのであつたという。星氏は金五千元を送つた。星氏には以前に手紙を出して依頼してあり、いつでも電報をよこせという返事を得ていたのではあつた。

エックスラインが、野口の帰朝の心理を解剖しているが、其は如何にも穿つてゐるように思われる。真実のところは野口自身のみが知ることであるが、エックスラインの見方にはうなずかせるものがある。黴毒の研究で金的を射当てて、ヨーロッパで款待され、ノーベル賞受領者の候補になつてゐるといふ内報を得てい

るといふ勢であるが、研究は思わしくない。小児麻痺（急性脊髓前角炎）、狂犬病、トラコーマの病原体の発見、結核の治療法等の研究をしていたことは前にもいつたが、其等は彼を満足させる結果にはなりそうではなかつた。小児麻痺の研究は研究所の他の専門者達との協同研究で、一人でものにすることは出来ぬ都合であつた。狂犬病でもトラコーマでも既に其に固有な小体というものが知られていて、其が病原体であると確かにしたとしても、また病原体ではないと確かにしたとしても、要は他人の仕事の後始末をするようなものである。結核の仕事は見当がつかない。斯くして彼は沈んでいたのである。そして研究に一息入れるのもよいと思つてゐる状態だつた。そこへ恩賜賞の授与があつて、母国で名声が最上に高まつた。帰朝のよい潮時だと思つてゐたろう。そこへ写真のことがあつて、彼の帰省が決定された、というのが大体エックスラインの心理解剖である。

九月五日に着、十一月四日に、やがてその肉体を埋めた米国に再び船出したまでの三箇月間、朝野の豪華な款待を受け、勲四等に叙して旭日章を授けられ、老母に短かいながら親しく孝養をつくし、小林、血脇両先生にも多年の奉謝の至念を表らわし、旧友との交情を温ためた。其等に就ては茲では省く。

この帰郷は野口に深い里心を起させた。日を重ねるに従つてさまざまの事物に面して故国の土に愛着の感情が濃く深くさせられた。そして、長く滞在すればする程好きになるから、出来るだけ早くアメリカに帰るといつたという。そしてニューヨークに歸つて、諦められぬと諦める、思い切ることの出来ないものをお願い切つてしまった、といつたともいう。私はこの切々たる心情に動かされる。

四 生 涯 —— (三)

一九一五年十一月、三箇月の母国訪問の旅から帰った野口は、日本で見聞して来た疾患に關係した研究を始めたのであったが、二年あまりたった一九一八年には、南米への黄熱調査団に加わり、以後十箇年の長い間、此の研究に苦闘し続け、終にアフリカの辺土でこの黄熱の爲めに、学に殉じた。この章は彼の悲痛な最後の苦闘を物語ることになる。

野口は日本で二つの特殊な疾病を見聞して歸つた。其は恙虫病と黄疸出血症（ワイル氏病）である。

恙虫病は新潟県の信濃川、秋田県の御物川などの沿岸の農村に、夏から秋にかけて患者の出る病気で、高熱を發し、リンパ腺が腫脹し、皮膚に発疹が現われ、三〇%の死亡率を示すものである。湿地の草地で、至つて小形の「だに」に咬着されて感染するのであつて、その「だに」は「つつがむし」「あかむし」「けだに」と呼ばれる。病原体はリケツチアと呼ばれる類の微生物である。此は普通の細菌よりも少なく、其よりも原虫的な性質のものである。リケツチアが有病地の野鼠に寄生して居て、「あかむし」が其を人間に感染させるのである。この恙虫病は旧くから知られて居り、ベルツも調べたことがあつて、洪水熱という名を与えたりした。明治三十年代の終りの頃から研究に努力する学者が出て来て、各自の研究を提げて年毎に論争が重ねられて来たが、病原体はなかなか明らかにされず、その発見は昭和まで持ち越された。

恙虫病によく似た病気が旧くからアメリカでも知られていた。其はロッキー山地方にある発疹熱（スポットテッド・フィーバー）というものである。一九〇六年から一九〇八年にかけてリケツツという学者が立派な研究を發表していた。病原体の属名はこの学者を記念したものである。リケツチアの種類に因る疾患には、なお外に発疹チフス、暫壕熱等があつて、近年の目新しい研究題目の一つになっている。

ニユーヨークに帰った野口はロッキーマウンテンの発疹熱の研究に手をつけた。この発疹熱の病原体を培養し出そうというのが野口の仕事であつたが、その途中でチフスに倒れた。助手のスチーブが仕事を引受けて熱心にやり、医員には内証で培養試験管を病室に持込んで見せたりしていたが、不幸にして不明の病気で殞れた。解剖の結果などから、発疹熱と思われた。この不祥事は野口を甚だしく悲しませた。そして、研究室での感染だけでも防止すべき豫防ワクチンや治療血清を造ることに努力を注いだ。成就するに至らなかつた。遙か年を経て、一九二六年に「だに」からリケツチアを培養して報告した。

黄痘出血症(ワイル氏病)は佐賀、福岡、高知、茨城、千葉等の地方で地方病的になつて居り、京浜地方にも患者が発生して、一般の人達も相当に名を知っている病氣である。ヨーロッパにあることは旧くから知られていて、一八八六年にドイツでワイルが記載したので、その名が附してある。世界大戦中には兵士の間にも流行を見たりした。発熱と黄痘が主症であつて、死亡率は三〇—四八%といわれている。病原体はスピロヘータの種類であつて、大正三年(一九一四)に九州大学の稲田龍吉、井戸泰の両氏によつて発見された。学名はレプトスピラ・イクテロヘモラギエーという。この病氣は人間のみの病氣でなく、寧ろ溝鼠の間に蔓延しているもので、レプトスピラは尿のうちに排泄され、其が為めに汚水に接する農夫、工夫などに多く患者が発生するのである。稲田、井戸両氏等とその門下の研究者達は迅速旺盛な研究を続けて、臨床、病理の方面、レプトスピラの培養、ワクチンの製造まで、頗る見事に仕上げられたのであつた。この研究は我国のみならず、世界的に近年の医学研究史上の一光彩とされてきているものである。野口の来たのはその翌年である。野口は此の研究もした。併し稲田氏等の研究が十分に進んでいたので、野心的な問題は残つていなかった。それでもアメリカにこの病氣があるや否やが知られていなかつたのを明らかにした。即ち市内で四一匹の溝鼠を集めて、其から五八匹の天竺鼠に接種して一二匹が発病することを認めて、ニユーヨークにも存在する

ことを確かめた。また日本から送って貰った株と免疫反応を比較して、相互に防止力を示すことを見て、両者が同一なものであることを確かめた。また野口はこのスピロヘータの形態を細かに観察して、スピロヘータ類のうちで、特別な一属を設けるべきものであるとして、レプトスピラという名を提出した。此は普ねく用いられている。

レプトスピラの研究を進めて、その最初の論文を発表した五月、野口は病気に罹った。チフスらしかったが、実験中に過って培養を口に入れた後であったので、黄痘出血症だといって頑張り、入院を肯じなかったが、チフスであった。而かも甚だ重篤で、マウント・サイナイ病院で、生死の境を彷徨した。よほど前から健康を害していて、心臓が拡大していた。幸にして恢復して、七月一杯で退院することが出来、直ちにキヤッツキル山中のホテルに移って静養することになった。入院中は苛々しているると無理をいったりした。山のホテルでは氣力が衰えて、泣言ばかりいっていたという。魚を捕ったり、絵を描いたりした。ニューヨークに帰ったのは秋の末であった。

十月の終りにニューヨークに引上げて来て、十一月にメリー夫人が盲腸炎を病み、その翌月には彼自身もまた盲腸炎を患って入院手術を受けた。日本流の教え方で丁度四十二歳、即ち厄年に当たっていたのである。

翌一九一八年（大正七年）六月からいよいよ彼の黄熱研究が始まる。政府が南米のエクアドルに派遣する黄熱調査団の一員として望まれて加わったのである。病後の彼は両脚がまだふらふらしていた。

黄熱（イエロー・フィーバー）は人類の疾患中で最も猛悪なものの一つであって、伝染が至って激しく、経過が迅速である。症候は前記の黄痘出血症によく似ていて、其の更に激悪なものといつてよい。黄熱の黄は

黄痘おうたんである。死亡率は地方により、また有病地の土着者と然しからざる者と著しく異なり、一般には五〇%内外、或は其以下といわれるが、八〇%、九五%等である場合もあり、研究者中から少なからざる感染犠牲者を出しているのである。此が黄痘出血症(ワイル氏病)と似ていることに就て、思い浮ぶのは、レプトスピラの発見以前に、西盛之進氏が此これを疑似黄熱だと論じたことである。当時突飛とつびな論として取扱われたが、その周到な観察と比較は大いに敬服すべきものである。而して此等これらの両疾患が甚だよく似ているということが、野口の悲劇の最後の因をなしたものといひ得られるのである。

野口の加わつた黄熱研究団は陸軍軍医総監、ゴーガスの計画せるものであつて、このゴーガスは、パナマ運河工事の衛生主任として黄熱とマラリアの防圧に成功して、盛名を世界にあげた人物なのである。

黄熱は中南米の熱帯地とアフリカに浸淫ひびきして、パナマ運河開鑿かいざくの工事が失敗頓挫とんざを反覆したのには、マナリアと黄熱の力が大きいといわれているのである。スエズの運河を掘り通した自負心と野望を以て、レセツプスが手を着けて失敗し、フランスの手で再び着手してまたも失敗した。其それには種々の原因があつたのであるが、重要なものの一つが人命の損失であつた。先ず工事用の鉄道八〇キロメートルを敷設するために、その枕木の数だけの犠牲者が生じたという有様で、現場は白人の墓といわれた。その疾患はマラリアと黄熱であつたのである。合衆国が軍事上其他そのたの立場から、両回の不成功の後を継いで此これを完成したのであるが、その偉業の達成の大きい力はマラリアと黄熱の防止に成功したからであつた。これより先、合衆国軍医の研究団のキューバに於ける有名な研究によつて、黄熱が蚊によつて伝播でんぱ、感染させられるものであることが確かめられていた。マナリアに就ては既にその以前に同じことが明らかにされていた。科学者であつた時の大統領ルーズヴェルトは、此等これらの疾患の防圧如何いかんがこの大事業の成否を決するものとして、キューバに於て蚊の対策によつて黄熱防圧に力量をあらわしていた、軍医のゴーガスを衛生主任として、この事に当らせた。そ

してゴークガスの合理的、徹底的に行なつた作業によつて、成績はあがり、八年後に発生した患者を最後として黄熱を運河地帯から駆逐した。パナマ運河は医学が成就させたといわれる所以である。

パナマで黄熱対策処置に成功したゴークガスは、周囲を眺めてなお不安を禁じ得なかつた。隣接諸国、交通の近い諸地には黄熱が依然浸淫している。其等の諸地で十分な対策が講ぜられない限り、不安はいつまでも去らぬのである。合衆国本国も亦危険にさらされているのである。其等の諸地に於て蚊の対策が進行されねばならぬ、というのが彼の見解であつた。このゴークガスが陸軍の軍医総監になつて中央に出て来た。そこで彼はその遠大な意図を実現に移そうとした。先ず中南米の諸国の黄熱有病諸国をして対策を講ぜしめるために、調査団を派遣して、実状を調査し、当該政府を鞭撻し援助指導することである。その第一に選ばれたのがエクアドルであつた。其がために、細菌学界の元老ケンダールを動かして団長とし、其にロックフェラー研究所から野口を借出して病原研究の主任としたのであつた。ゴークガスの意図は研究ではないのであつたが、相手国に対するテクニクとして、研究の色を濃くその団に与えて、カモフラージュしたのであるということである。

七月十五日に一行はグアヤキル港に着いた。人口五万というが、大きいペストの隔離病院と黄熱のそれが隣合つて建つていてという状態であつた。市街は不潔、不衛生、黄熱病者が街頭に横わつていてなどという評判が行なわれている土地だつた。一行の乗込みは至つて悪い感情を以て迎えられた。野口がゲートルを着けて上陸したのを見て（写真で見ると、白服に黒いゲートルを巻いている）、抗議を申込んだという風であつた。併し直ちに発した団長のステートメントに、『……グアヤキルは決して不潔な都会ではない……市民は皆ベッドの上で死ぬのである。また鼠の死骸一つさえも見たことがない。……』などとあつたので、相手

の感情は落ちつき、野口のスペイン語の挨拶が好感を与えたりした。彼はマウント・サイナイ入院中に此を勉強していたのである。

到着して直ちに研究を始め、九日目の二十四日には、伝染病院長で黄熱の精通者であるという院長が黄熱と確認した患者から、レプトスピラを発見した。間もなく天然鼠に接種し発病せしめた。続いて純粋培養を行ない、其でワクチンを作り、また血清も造った。其の注射が患者に効果的であった。豫防ワクチン注射を約一千名の聯隊新入兵に行なった（此の結果は有効と後に知れた）。新聞は病原体発見と報じ、引続いて盛んに書き立てた。恐らく野口自身が左様にいったのであろう。

九月にケンダール以下一行は帰米の途にいたが、野口はなお研究の爲めに十一月まで独り居残った。出立を前にして、豪華な謝恩送別会が劇場で開かれた。公私知名の紳士淑女が雲集した。（写真で見ると壇上正面の壁に大きい日章旗と星條旗が垂れている）。そこで彼は陸軍軍医監並名譽大佐の称号を贈られ、劍を贈られた。彼の仕事をした研究室には「衛生局所設本病院研究室にて一九一八年七月二十四日、ロックフェラー研究所員日本細菌学の泰斗野口英世博士黄熱病の病原菌を発見す」の刻銘青銅牌が掲げられることが決定され、更にまた避病院と市会議事堂に銅像を建て、フチャンドイ街を野口街と改称、飛行船を「ノグチ」と命名することが決議された。

エクアドル人は甚だ熱し易く、そして純朴である、とエックスタインは書いている。

この南米研究中の十一月十日に、郷土で母親シカ女が歿した。六六歳であった。野口はニューヨークに帰り着いてこの悲報を受けた。

エクアドルから帰って来て矢つぎ早に八篇の報告を出して、其等で、発見したレプトスピラは、黄痘血症のレプトスピラに酷似しているが、免疫学的に同一でないと論じ、病原体であるとして、レプトスピラ・

イクテロイデスと命名した。

調査委員団の一行は何れも野口に同意したが、キューバから一行に加わったレブレドーは反対の意見をもっていた。野口の試験技術の確実で巧妙なこと、純粋培養から造られたワクチン及び血清が有効であつて、新兵の豫防ワクチン注射の結果は、罹病率が従来の一六%から一六%に減じたこと等が彼の所論に信頼を与えたのであつた。そして、八月には米国医学会が銀牌を贈つた。

十二月に助手のクリグラーと、第二回の黄熱研究にメキシコに赴いて、二月まで滞在した。メキシコのメリダの町に五年ぶりの流行があつたのである。『コロンプスは第二回の遠征でアメリカに到達した。我もまた第二回の遠征の途にある』といつて意気込んで行つた。行つた時には患者は少なくなつていて、十分に目的は達せられなかつた。併し前と同じレプトスピラを発見し、血清がこの地の患者にも有効なことが証明された。途中でハバナでレブレドーと会見した。レブレドーは反対意見を持していた。

四月にはまたもペルーに行つた。患者は多く見られなかつたが、骨折つて検査した数名でレプトスピラを見出し、また助手のクリグラーとペルーの一軍医が黄熱と診断され、血清注射を行なつた結果恢復したという。彼にとつては満足な事件もあつた。かくしてペルー遠征は黄熱では収獲が乏しかつたが、オロヤ熱とペルー疣病という特殊な疾患を見ることが出来、此が彼の研究の主要なもの一つになつた。詳しくは後に述べる。十一月にユカタンへ第四回の黄熱研究行をした。特別な収獲はなかつたらしい。

一九二二年二月、血脇氏が東京を発ち、ヨーロッパを廻つて、五月の末にニューヨークに着いた。ワシントン、フィラデルフィア、ボストン、クリーブランドを経て、シカゴまで、一箇月餘の間、日夜離れずに、公私万端の世話をした。血脇氏をシカゴで見送つてから、ニューヨークとシャンデッケンの山荘とに転じつつ、ヘルペス毒などの研究をした。この研究は共同研究になつていて、彼には不満であつたようである。

翌年の七月、喜びと悲みの二つの報らせが日本から行つた。父佐代助の死と、帝国学士院の会員に選ばれたことである。

十一月にブラジルに行つた。第五回の黄熱研究行である。この国では彼は失望した。研究所は外観が立派だが、研究の設備はなっていないかつた。研究者は熱心にも技術の習練にも缺けていた。黄熱の患者もなかなか無かつた。恢復者の血清を集める手筈をしたが、此も思うように行かず、やつと九人分を得た。それでプアイフェル反応を検して、エクアドル、メキシコ、ペルーのレプトスピラと同一であつて、黄痘出血症のものとは異なるという成績を得た。麻疹やいろいろの仕事をして、二月に歸つた。

七月に英領ジャマイカのキングストンで熱帯病會議が開かれた。野口は休暇を利用して其に出席して、黄熱研究の論文を読んだ。茲で彼のレプトスピラの病原体としての是非の論が学会の壇上で討論されることになつた。黄熱研究で二〇年来有名な、キューバのアグラモンテは、正面から反対を述べた。『黄痘出血症のレプトスピラとの間に認められる血清学的の相違は、異なる菌株の間に認められる相違よりも大きいことはない』といい、『自分は黄熱のレプトスピラとは真実に同意することは出来ない』と公に申立てる』といった。熱帯病学者として有名なカステラエは、野口の席にいつて、貴下の研究を認める、自分は反対の議論には動かされないといつた。併し彼は公に発言して討論はしなかつた。カーターが立つて、エクアドルでの兵士の豫防注射の成績を述べて、野口によつて豫防の実現したことを賞揚した。併し全然野口に同意するのではなかつた。そこで立つたのが野口の親しい友人で、陸軍軍医学校の教官のニコルズであつた。そして『陸軍軍医学校はレプトスピラ・イクテロイデスを黄熱の病原体と認めてゐる』といつた。

野口は、『アグラモンテは、賛否を決しかねている人達の心に、幾分の躊躇を起させることに成功した。あとで私は、アグラモンテに標本スライドを見ることを勧めた。其を見た彼は、このやうな特殊な障害と脂肪

変性を動物に生ぜしめることが出来ようとは全く思はなかつた、といつた。……私の力説したもう一つの点は、実験的研究のこの些か専門化した部門に於ては、適当な設備と技術的素養が重要なことである。この点はいかに力説しても力説し過ぎることはないと思ふ」と書いてある。

この会で、ヴェネズエラから来ていた医師から植物に寄生する鞭毛虫の話聞き、ホンジュラスで五種の植物に見出して材料を持ち帰り、シャンデーケンでも一種を見出して其の研究の結果を発表した。

黄熱の研究が、叙上のような形勢になり、数回の遠征研究の結果も、たいした研究の前進を示さず、暗い壁に面している心地であつたらう。健康もよくなかつた。糖尿病の所見もあつた。一九二四年から二五年にかけて、このような状態のうちでなされた三つの研究を報告している。オロヤ熱とペルー疣病、ロッキーの発疹熱、トラコーマの微生物である。オロヤ熱とペルー疣病は先年ペルーから材料を持ち帰り、また新たに材料を取寄せて研究したものである、此等の病気は、一方は高熱を發して貧血を起す重篤な病気であり、一方は皮膚に贅疣の生ずる病気である。以前は両者が同一疾患とされ、其後オロヤ熱の方で病原体が発見され、其とペルー疣病とが同一なものなりや否やが問題になつていたのである。野口は雙方の材料から進んだ試験の結果、同一疾患であるという結論を下したのであつた。此は野口の主要な研究の一つで、一六篇の報告が發表され、其の發表は彼の死後に至つて完成した。

トラコーマの病原体の問題は最も長く心がけていたもので、前に一度報告を出したことがあつたが、南部地方のインディアンに適当な材料のあることを知つて、現地に行つて仕事を始め、類人猿まで用いて大掛りな研究をして、發病性の小体を培養した。自身は病原体とはいわなかつたが、世間はそうしてしまつた。学界からは認められなかつた。(なお後章で述べる)。

一九二七年十月、最後の——本當に最後の黄熱研究行にアフリカに旅立つた。

黄熱研究はやがて十年になつた。エクアドルに足跡を印して早くも九日後にはレプトスピラを発見し、現地で新聞によつて大々的に報道され、豪華な記念を遣さしめたその時は兎に角、帰米して学術的にレプトスピラ・イクテロイデスを病原体なりとして発表したのであつたが、同調査団中にもレブレド―は其に不同意であつた。研究者の社会では疑うもの、不同意な者が少なくなかつた。引續いてメキシコに、ペルーに、ブラジルに遠征を重ねたその結果は、彼自身にはその信を動かさしめず、更に其を強めるものもあつたのであるが、不同意者の疑点を払拭し去るだけのものは無かつた。一方に他の研究者達からは、彼にとつて不利な事実がだんだん発表されて来た。彼のワクチンは中南米の諸国では有効であることが認められるが、アフリカの黄熱には効力がないようである。レプトスピラも亦それ等の地方の患者からは発見されないと報告された。其はイギリス、アメリカの研究者達のみでなく、ロックフェラー研究所から派遣された研究者もそのように報告した。野口が黄熱患者として取扱つた患者には黄疽出血症の誤診されたものもあるのだからという者もあるという状態であつた。野口としても、だんだん、アフリカの黄熱と中南米の黄熱とは同一でないのかも知れぬ、黄熱と中南米の黄疽出血症と欧米や日本の黄疽出血症と三通りの同様の疾病があるのではあるまいか、というように考えないわけにも行かなかつた。数回の遠征に巨額の支出をして呉れた財団に対しても責を感じないわけに行かなかつた。

彼にとつて茲で敢行すべき仕事は、どうしてもアフリカで自身で黄熱を研究することである。この考は久しく彼の頭にあつたに相違ない。併し此の実行には躊躇していた。研究所の幹部は此をすすめなかつた。レプトスピラを病原体と信じない傾向にあつたのである。しばしばこの意志を彼の口から聞いた友人達は挙つ

て彼のアフリカ行を止めさせるに熱心であつた。彼は前進か停立かに苦悩していた。ジャマイカの会で合衆国陸軍軍医学校の名に於て彼を支持した親友のニコルズの突然の死が彼を甚だしく悲しましめた。

ロックフェラー財団は、以前から西アフリカのラゴスに研究所を設けていて、数名の研究者がそこに派遣されていた。ラゴスはイギリス領ナイジェリアの、フランス領ダホメーの境に近い、ギネア湾の港である。野口とペルーに同行したクリグラー、ブラジルで研究したムラーなどがそこに行つていた。この年に、野口は、大戦中に黄痘出血症の研究を行なつた経験者であるストークスを、このラゴスに派遣してあつた。其は黄熱の研究には猿を試験動物とすべしという研究者間の意見であつたので、猿を用いて試験を行なわせる為であつたのである。ストークスはこの仕事を進めて、患者の血液を注射して猿に発病せしめることに成功した。そして不幸にして彼自身が感染して、終に殞れた。接種試験成功の報告と、彼の殉学の報とが殆んど同時にニューヨークに伝えられた。其は九月であつた。ストークスの死は彼に遠征の決意をさせた。忠告や反対を押しつけ、財団に願つて、十月にはその途についた。

今回の研究は専ら猿を用いてするプランであつた。リバプールで船を乗り継ぎ、そこからハンブルクのハーゲンベックに猿を注文し、一路南下した。船中でラゴスと患者発生の状態を打合わせた結果、研究地を変更してアクラと決定した。アクラは、ナイジェリアとダホメーを挟んで西に位する、ゴールドコーストの港である。十一月十八日にそこに上陸した。ここにはイギリス政府の建てた小さい研究所があつて、その所長をヤングといつた。その研究所の一部が提供された。ヤングは野口に非常に敬服して、熱心な共同業者となつて、少なからぬ努力をして研究を助けた。そして後にいうように、二人とも相ついで黄熱に殞れたのであつた。

ハーゲンベックに注文した猿も着き、附近からあらゆる種類の猿を沢山に集め、フランス領、ベルギー領などからまでも集めた。その数は九百頭以上に上り、毎日三トン以上の食糧を購入している、と手紙に書い

ている。

クリスマスの翌日から入院を要する程度の病氣になった。診断の結果は軽い黄熱ということであつたが、幸にして快癒した。自身ではニューヨークでワクチンの注射をして来た結果であると説明し、ストークスは注射しなかつたから不幸を見たのだともいった。

患者は思うように手に入らず、土地の人達や、其他の状態が愉快でなく、健康も思わしくなく、気持は良くなかつた。研究の方では、大体レプトスピラは病原体ではないという考に落ちついていたようである。そして其以外に病原体を求めていた。存外平凡なものであるのを、むつかしく考えているのかも知れぬと思つたりした。『当地着研究開始以来、既に五種の菌種を発見することに成功。研究は非常なる勢にて迅速に進行中』と手紙に書いたりしている。ここでいつている五種の菌というのは、枯草菌のようなものであつた。熱心で誠実で厳正なヤングは、野口に対して批制的な態度をも示し、兩人の間は親しい上に真剣でもあつた。

滞留六箇月に及んで、仕事は、設備の完全なニューヨークに帰つて仕上げるのが適當であると考えた野口は、五月第三週にアクラを引上げる計画にした。

引上げに先だつて、財団の人達に会見して訣別する為にラゴスへ行つた。十日に着いて、十二日の朝に悪寒があつた。自身はマリアだといつたが、血液検査で原虫は見出されなかつた。すぐアクラに引返した。港では海が荒れて、ボートの覆いが吹き上げられて進まなかつた。其を剥がしたらボートが進んだが、そこへ雷雨がやって来て皆が濡れ鼠になつた。それでも元気で歩んで上陸して入院した。黄熱と診断された。而も軽くなかつた。前回入院中は我儘をいい、氣むつかしくて大いに周囲を苦しめ悩ましたのであつたが、今回は全然元氣がなく、衰態が甚だしかつた。黄熱では第七日が危険の頂上とされて居り、此日を経過すれば豫後は有望とされている。幸にしてその第七日は経過した。併し第九日になつて、痙攣の発作があつて、嗜眠状

態に陥^{おぼ}つた。ヤングに“Are you sure you are quite well?”と質^{たず}ねた。“Quite”と答えた。野口は“‘I don't understand’”と聞いたという。此^{これ}が最後の言葉であった。ヤングに質^{たず}ねた言葉は、彼も同じ様に感染してはいないかと案じたのであろう。最後の言葉はいろいろに考えられるが、感染した経路がわからない、ということであつたろう。

翌五月二十一日の正午、世界は野口英世を失なつた。五一歳六箇月である。

六月十三日、遺骸がニューヨークに着いた。ウッドローンの墓地に葬られた。

特に勲二等に叙し旭日重光章を追賜された。

五月二十日に、“Quite”と野口に答えたヤングも、同じように感染していた。そして同じ月の二十九日には彼の跡を追つた。アクラには二人の為^{ため}の記念碑が建っている。

ストークスは、ラゴス引上げを二週間延ばして、その間に殞^{たお}れたのであつた。野口は引上げの時に迫つて殞^{たお}れた。ヤングは僅^{わず}か八日の後に追いつくように殞^{たお}れた。人間生死の運命は奇しくも悲しい。

五 業績

野口は比類少ない程の多数の論文を書いた。研究の段落毎に、短かい論文として着々発表したことに、また英文の外にドイツ語、フランス語などで臨期に重複して発表したものもあるのであるが、その研究の旺盛であつたことが、数字にも表らわれている。蛇毒に関するものが大小五〇篇ほどある由である。デンマーク留学中には一〇篇を発表した。微生物学に於ける論文を土肥博士が編録されたものによると、トレポネマ・パリツムの培養に関するもの一二篇、ルエチン反応のもの四篇、麻痺性痴呆及び脊髄癆のもの一二篇、ワツセルマン反応のもの一二篇である。ロックフェラー研究所で発刊してゐる Journal of Experimental Medicine に掲載された、本格的な論文だけを調べてみても、一九〇四年のフレキシナーと共著になつてゐる蛇毒のものから始めて、アフリカで瘧れた一九二八年のものまで一〇一篇を数える。其等の最後のものはオロヤ熱研究の第十五報、其の前のがトラコーマのものである。翌年になつて、協同研究者と合著の三篇（何れもオロヤ熱）が掲載されている。二八年間に発表した報文は大体二百篇と見てよいであらう。

研究項目も亦多般の種類に亘つた。野口は常に研究に大ものを狙い、黄熱では十年以上も其と取組んでいたのであるが、その間に沢山の問題に手をつけて居り、また到るところで研究の対象を拾い上げ、そして其等を着々纏め、或るものは大きい仕事に仕上げた。晩年の黄熱研究の南米、西インド諸島、アフリカ行でも、行く先々でさまざまの問題に手をつけている。オロヤ熱、ペルー疫病の如きものは、其を大きい仕事にした。

研究項目の主要なものだけは、概ね、これまで書き込んで来たつもりである。また特に重要なものは、常識的な程度の解説をも試みたつもりである。併し前書きに特に述べたように、私が本書にペンを執つた一つの目標は、徒らに野口英世を賞揚し讃歎することではなく、彼の業績に関しても、公正な立場から見た、其等

の真実の位置を明らかにするということである。その目的の爲めにこの一章を設ける所以である。

多くの読者諸君には、この章をとぼして読んで貰つて差支ない。また勉めて読んで貰えば、決して無駄にはならぬであろうように、記述の範圍を広め、また興味ということも考慮したつもりである。

茲では主要な項目だけを選んだ。即ち蛇毒、其に続いた免疫血清学の作業。此等は若い野口が、豫備作業の無かつた大きい問題を与えられて、其を見事に研究しこなし、先から先へと進んだ、その俊英振りを發揮した業績である、という点で、意味が深いものである。それ故、少しく専門的なことを書いて置くことにする。次に蠱毒の諸研究。此等は野口の業績として最も有名なものであり、一般読者にもその内容の理解が困難でないものであるから、少しく多くの紙面を此に当てる。続いてオロヤ熱とペルー疣病の研究。此は興味のあるものであつて、前章で解説をして置くべきものであつたのだが、此の研究は黄熱研究の中間に挟まっているので、其をすることは、黄熱研究の進展を述べる途中で、其の感興を殺ぐ虞があるので、ここでは略して、本章に移して来た。終りにトラコーマの問題に就て略述し、黄熱の話をつけ加えることにする。

蛇毒 我国内地では毒蛇は「まむし」だけであつて、此の咬傷も人命を危くする程のものではないが、沖繩には猛毒な「はぶ」がある。熱帯地方には毒性、毒力の強烈な種類が多い。オーストラリアには、雨傘蛇、百歩蛇、其他数種の猛毒な種類があつて、年々其等の咬傷に因る死者が出る。此に対する民間薬の類も各地で知られているが、薬物治療には効果の確実なものがない。各国で咬傷処置の爲めに免疫血清が研究され、また製造して使用されている。我国でも北里博士の伝染病研究所の初期の頃から、「はぶ」咬傷に対する治療血清の製造が着手されていた。前にいったように、野口はその作業を傍観していたのである。また学術的には、蛇毒にはその作用機構の上でさまざまのものがあつて、免疫血清学の上で極めて興味のある材料になつてい

野口の研究は、此の免疫血清学的研究の始まつた時期に光彩を放つたのである。

毒蛇の種類により、また試験動物の種類によつて、その作用に異なつた結果が現らわれる。蛇毒の働きには、神経を犯す神経毒、血管壁を犯す出血毒、細胞を溶かす細胞溶解毒とがある。その外に野口の研究によつて、蛋白を溶解する酵素があることが解つた。蛇に噛まれると動物の肉が軟かくなる。毒が蛋白を溶解するからである。

野口の研究は専ら細胞溶解毒に注がれたが、就中血球、特に赤血球を溶解する溶血毒に主力が注がれている。その当時ヨーロッパで血球溶解（ヘモリゼ）の研究が勃興していて、エールリツヒ門下其他の人達が此の研究に力を注いでいたのであつた。野口はフレクスナーとの協力で、アメリカから其等と研究を競つたわけなのである。その頃の学説として、細胞溶解は単一の力ではなく、そこには二つの物質の力、即ち所謂アンポチエプツールとコンプリメントの二つの力が必要であることが知れていたのである。蛇毒の働きが此に似ていて、よく洗つた血球に蛇毒を働かしても、多くの場合に血球は溶けない。其にその血清を加えると直ちに溶ける。そこで野口は、右の学説で説明しようとして、蛇毒はアンポチエプツールの働きをし、血清はコンプリメントとして働くと考えたのであつた。然るに研究を重ねて行くに従つて、血清の働きが普通のコンプリメントと少しく違ふことに気付いて来た。それでコンプリメント様物質と呼び、更にアクチベーターという名を用いることにした。ところでアクチベーターの本態に就て、カイエスという研究者が一つの重要な発見をした。即ち蛇毒にレシチンを加えると、血清を加えぬ血球が溶けるといふ事実である。そして血清中には可成りの量にレシチンが含まれているから、血清中のアクチベーターはレシチンに外ならぬといふ説である。この説はヨーロッパで多くの賛同者を得たのであるが、野口は疑問をもつた。蛇毒による血球と血清の溶解作用に於ける関係は動物の種類によつて異なる。然るに血清又は血球中のレシチンの含有量にはさま

で大きい差異はないのである。それで、アクチベーターが直ちにレシチンであるという説は認め難い、というのである。そこで野口の仕事はアクチベーターとレシチンの異同を試験することであつたが、その当時までは其を区別して試験する途がなかつた。種々苦心の末に野口はその方法を見出した。而かもそれは至つて簡単な方法であつて、血清中に十分一定規クローカルシウム液を少量入れると、アクチベーターの働きはなくなつて、蛇毒を加えても血球は溶解しない。この時にレシチンを入れると血球は溶ける。かくしてアクチベーターとレシチンの働きが区別する途が知られ、アクチベーターの全部がレシチンではないことが明らかにされたのである。野口は更に研究を進めて、種々の動物の血液中のアクチベーターは、レシチンではなくして、エーテルによつて抽出することの出来る脂肪酸か、石鹼質か、或は中性の脂肪であるということを示らした。動物の種類によつてこのような物質が血球中に存するのである。なお或る動物の血清は、アクチベーターとはならずして、反対に蛇毒の溶血作用を妨げるものがある。この作用をするものは、血清以外にも、乳汁其他種々の組織中にもある。そして此はコレステリンの働きであることが明らかにされた。

続いて重大な問題にぶつかった。其は血球を溶かさずの蛇毒を多量に加えると血球を溶かさなくなるという現象である。野口は此の研究には苦しんだが、此も解決した。其は毒の作用は血球に働くのであるが、蛇毒中にある物質が血球の蛋白質と結びついて、そこに生じた不溶解性の物質が血球を包むが為めであるといふのである。かくして種々のリポイド、コロイド等が種々の血球溶解性物質に対する関係や影響等を深く研究する方面に入つて、数多の研究を仕遂げたのであつた。

免疫及血清学 ヨーロッパで、色素のエオシンなどの所謂フォトダイナミックの物質の、種々の毒物に及ぼす作用の研究が出て来た。そこで野口は蛇毒に対して、また他のコンプレメントに対してのエオシンの働

き方を研究した。蛇毒と似た毒作用のある破傷風菌の毒に就て行なつたのである。エオシンは破傷風菌の毒作用を減じさせる。破傷風菌の培養にエオシンを作用させると、或る濃度であれば菌は発育しない、其よりも薄い溶液であれば、菌は発育するが芽胞を形成しない。更に薄い溶液では芽胞は形成するが毒素を生じない。そこで動物に破傷風菌の芽胞を附着させた絹糸を植えて置き、その周囲に毎日エオシンを注射していると、動物は発病しない。そこでその絹糸を取出して他の動物に植えてみると破傷風を起こす。即ちエオシンの注射によつて芽胞が殺されるのではない。また毒素を造る力を失なつたのでもない。その局所で免疫が出来ていると考えねばならぬ。そこでそこへ破傷風毒素を注射してみたところが、発病しなかつた。破傷風菌の毒素は脳の細胞とよく結びつくものであるところから、破傷風の免疫には、神経中枢の細胞の働きが主要な役をしているのだから、と一般に考えられていたのであつたが、脳脊髄とは関係なしに、局所で免疫が生ずるといふことも、此で立証されたのであつた。

野口の免疫血清学上の仕事は後年まで続き、特にワッセルマン反応が発表されて後は、この方面の研究を多数に発表した。其等に就ては、茲では省略する。

黴毒 黴毒は十六世紀に驚くべき迅速さを以て世界に拡まつた疾患である。病毒が西インド諸島からスペインに齎らされて後二〇年を経ないうちに、極東の我島国にも侵入して来たのであつた。此の浸淫、禍害等に就ては茲で説く要はなからう。この黴毒の研究が旧くから熱心に行なわれたのはいうまでもないことである。以下に少しく病原体を中心としての研究史の一端を顧みてみよう。

イギリスのリスター、フランスのパスツールなどによつて細菌の作用が明らかにされ、人類や家畜の種々の疾病の病原体が細菌であることが知られ、研究されて、細菌学が新興の学術となつて、無比の活気を呈し

た。それは十九世紀の七〇年代のことである。伝染性の疾患の病原体として、続々細菌が発見され、其等の純粹培養が得られ、やがて血清療法が創始された。

淋疾と軟性下疳と梅毒の三者の異同區別、即ち三毒異同論が、久しく学者の間に論議されていたが、十九世紀の中葉になってその討議は結末を見、一八七九年にはナイセルが淋菌を発見し、軟性下疳菌は一八八九年になってドウクレーによって発見された。然るに梅毒の病原体はなお其の後一六年の間、研究者の眼から逃がれ続けていたのである。病原体を発見せんと勉めた研究者が早くから多数であったことは勿論である。一九〇五年に至つて此が検出せられたまで、病原体に擬して發表されたものは実に六〇種以上に上るといわれているのである。

梅毒の病原体の研究には、他の疾患と異なつた困難があつた。其は感染せしめ得る試験動物の無いことであつた。兎等に感染せしめ得たといった学者はあつたが、何れも確かではなかつた。此に最初に成功したのはパストール研究所のメチニコフとルーであつて、類人猿に於て成功したのである。一九〇三年のことである。此をきっかけに梅毒の研究は矢つぎ早に進んで、医学界無比の賑かさを呈したのであつた。即ち其から二年後の一九〇五年にはベルリンでシャウディンとホフマンが病原体たるトレポネーマを発見し、二年後の一九〇七年には同じくベルリンでワッセルマンが診断の血清反応試験法を發表し、更に三年後の一九一〇年にはフランクフルトでエールリッヒと秦氏によってサルヴァルサンが世に送られたのである。此と前後して病原体の純粹培養が成就された。此は一八〇九年のシェレセウスキーの業績に始まり、三年後の野口の作業に至つて成就されたのである。続いて野口は学者の間に問題となつていた麻痺性痴呆と脊髄癆にトレポネーマを検出して、ここで梅毒の研究が充足を見るに至つた。この期間正に十箇年である。野口の業績の學術的の眞の価値を公正に理解する為めには、この十箇年の歴史を語りつつ進まねばならない。

病原体の研究に最も大切なことは、其を人工的に感染せしめ得る試験動物が得られることである。容易に感染せしめ得る動物のある疾患では研究が進み、其の無いもので研究の進み難いのは当然である。研究の進まない疾患の多くは試験動物の得られていないものである。また実験に用い得る動物の種類には自ら限りがある。例えば類人猿の如きものは、感受性があるにしても、特殊な恵まれた研究者でない限り、其を用いて研究するわけには行かぬ。この難関を突破する途は、感染せしめる特殊方法を見出すことである。研究者達の苦心によつて、家兎、天竺鼠、鼠等の普通な試験動物に感染せしめることに成功されたものが若干ある。癩の家兎感染が目下我国の研究者によつて苦心されているようである。この関門が開かれると、研究は其に乗じて躍進する活況が見られるのである。微毒を試験動物に感染せしめることに努力が注がれたことはいうまでもないが、久しく成功した者がなかつた。その間に人体接種試験がしばしば行なわれた記録もある。接種試験成功の曙光の認められたのは猿であつた。接種陽性試験の報告は一八七九年以来、しばしば出ていたが、一九〇三年のメチニコフとルーの作業に至つて欠点のない猿接種微毒が得られたのである。最初の成功例はチンパンジーの若い雌で、陰挺包皮に接種して、二六日後に局所変化が生じ、一箇月後に腹背上腕に発疹が生じ、リンパ腺、脾臓の腫大が見られ、其から第二の動物に移植することに成功した。続いて接種試験が反覆されて、其等の所見は一般学界の認めるところとなつた。他の研究者達も試験を進めて、此を追認し、類人猿に限らずもつと下等な猿でも接種可能であることが知られた。チュニスのニコルは逸早くマカクスで成功し、続いて三四の研究者によつて追認された。ドイツ政府派遣のナイセル等の研究班がジャワに来て、多くの種類の猿に就て試験を行ない、猿微毒の知見はいよいよ豊富確実にされたのであつた。此は一九〇五年から翌年にかけてであつて、トレポネーマ発見と前後している。

一九〇六年になつて、兎の眼に接種することが成功された。イタリアのベルタレリーの業績であつて、角

膜に接種して、角膜炎、紅彩炎を起させ、そこに多数のトレポネーマを証明し、代を継いで移種し得たのであった。そして追試して同様な成績を得たという報告も多数現らわれた。試験動物として兎が役立つことになったのは、実験研究の上で著しい利益を与えたのであるが、更に兎の辜丸接種感染が成就されて、いよいよこの方面の関門が開かれた状態となった。この作業の勲功者はイタリアのパロージで、一九〇七年である。辜丸内或は陰囊の皮下に接種すれば、数週間乃至二三箇月の潜伏期の後に硬結が生じ、やがて辜丸炎、辜丸周囲炎を起し、潰瘍に陥り、更に全身症状を呈するものも生じて来るのである。この兎辜丸黴毒はドイツのウーレンフトとムルツェルの系統的な研究で確実にされ、氏等は脈管内注射、心臓内注射によつて全身症状を呈せしめることが出来、其は遺伝黴毒に似た所見であるといつた。辜丸接種の研究は大いに進歩して、トレポネーマの極めて少数に存在する血液、尿、乳汁、脊髄液等に於ける存在もこの接種試験で確かめ得られるまでになった。

エールリッヒと秦氏の黴毒治療薬サルヴァルサンはあまりにも有名である。両氏の黴毒治療薬の研究は、右のパロージの研究の出現に恵まれたところが大きいのである。化学療法という新しい方面に向つたエールリッヒは、先ず色素から入つて、砒素の合成化合物に至つた。そして試作合成品第六〇六号でスピロヘータに因る熱性病である再帰熱の殺虫療法に成功したのである。そこでこの大きい仕事は当然同じくスピロヘータの類であるトレポネーマに因る黴毒に進み入る段取となつたのであるが、そこで恵まれたのがパロージの兎辜丸接種の業績であつた。エールリッヒは秦氏をイタリアに赴かせて、其を確かめさせ、材料を持ち帰らせた。そして研究は兎辜丸黴毒で進められて、光輝ある結果に到達したのであつた。

以上叙べた動物接種試験の研究進行には野口は登場しない。次の病原の発見の局面に至つて登場して来て、其の最後の幕の主角を演ずることになるのである。

病原体の発見者シャウデンは、一八七一年生れ、発見の翌年三五歳の若さで死んだ、いわば慧星的存在であった。動物学者で、細胞学から原生動物の研究に入つて、矢つぎ早にコクシデウム、マラリア・プラズモディウム等の見事な研究を仕上げ、寄生原虫学の面目を一新せしめ、生物象界に一つの賑かな舞台を造り上げた。それで『原虫学のコッホ』ともいわれている。眼よりも頭で仕上げた業績だと誹る者もあるように、後年の血液寄生原虫の研究などはこの弱点の故に失敗しているが、特殊な天才的の人物であった。後年医学の方面に向いて、衛生院の研究所に入り、先ず赤痢アミーバと無病害性のアミーバとを区別する仕事をし、続いて黴毒病原体の発見の大業を成した。この研究は皮膚病黴毒の専門家ホフマンとの協同作業で、後者はハルレ大学の教授になっている。発見は前に記したように一九〇五年で、四月から五月にかけて三回の短報を出し、五月十七日にベルリン医学会で講演をした。何十回となく発見が報告されて、空しいものであつた歴史のあるものだけに、さすがに氏等は病原体としての断定には遠慮深い態度をもつていたが、世界の各地の追試者の結果は、久しからずして其の病原性を認定してしまつた。

発見された微生物は、長さが〇・〇一ミリメートル(〇・〇〇五乃至〇・〇一五)六乃至一四回螺旋状に細かく規則正しく巻曲し、両端が徐ろに細くなつて、鞭毛状になつて終つてゐる。スピロヘータの類のうちでも形態が特殊であるといふので、シャウデンは此が為めにトレポネーマという属を設けた。一つの著しい特質は、虫体が顕微鏡下で光線を強く屈折させないで、極めて不鮮明であり、細菌等をよく染色する色素で染色されることが至つて弱い。それでシャウヴェインは此に命名してトレポネーマ・パリーヅムとした。即ち「蒼白いトレポネーマ」の意である。大きさは決して小さいものではないから、研究者の眼から逸してゐたのは、小さい為めではなく、恐らく「蒼白な」点にあつたのであろう。このトレポネーマは、黴毒病菌に純粹な状態に於ては存在しないで、他の種々の微生物と混在している。其等のうちには異なる種類のスピ

ロヘータもある。シャウデインは其を區別してスピロヘータ・レフリンゲンスと命名した。よく光線を屈折して明視され、染色されることが強い。レフリンゲンスと命名された所以である。此は体の巻曲が不規則である。後にいうが、野口はパリーヅムに近似している別の一種類を區別した。

或る生物体が或る疾患の病原体であることが認められる為めには、下の諸点が要求される。第一は当該疾患以外の疾患には見出されずして、その疾患に限って普遍的に見出さるべきこと、第二に其が純粹の状態に於て培養せられ、その培養株によつて本来のものと同様な疾患が発病せしめ得らるべきことである。そして此等の二項の雙方を完全に成就したのが野口の業績であるといつてよいのである。

トレポネーマを培養することは、此が発見せられた当初から世界中の研究者が熱中したことであるに相違ないのであるが、容易に成就されなかつた。五年を経て始めて第一次の成功者が出て来た。其はロシア人シエレセウスキーであつた。その方法は、馬血清を六〇度に反覆加熱して、半凝固の試験管高層培地とし、之に材料を刺針培養とするのであつた。その刺條を中心にして培地は雲状に融解して、汚臭を發し、そこにトレポネーマが増殖しているのである。但し其は純粹にはなくて、種々の微生物が混じて發育している。そしてまた、此で動物に發症せしめることが出来なかつた。この成功に緒を得て、更に独自の工夫を加え、また混合している雑菌種を分離することに努力が注がれ、やがて純粹培養株を得たと報告するに至つた研究者が出て来た。先ず現らわれたのがドイツの齒科医ミューレンスの業績である。氏はシエレセウスキー法に工夫を加えた培養基で口腔内寄生スピロヘータの培養に成功し、その方法によつて黴毒トレポネーマの不純培養を得、其から分離培養を反覆すること数千回にして、終に雑菌から分離することを得たのであつた。氏の培地は馬血清と寒天を一と二の割合に混じた固形培地である。其から後二年の間に、培地並びに分離法に改案を加えて、純粹培養を得た研究者が続出し、動物接種試験も成功された。ソワーデ、ホフマン、レヴァジチー

及びスタネスコ、トマチエウスキー、ドイツに留学中の島峯徹氏、中野等氏等がそれである。此等と前後して、同じ一九一一年に野口が培養の研究成績を発表した。而して其は、その方法に於て独自なところがあり、また著しく優れた特質を有するものであった。

野口の用いた培地は、血清、腹水（肝硬変症などの患者で、腹腔に滲出して腹部を膨大させる液）を用い、三倍量の水を加えた血清水、其に寒天を加えた固形のもの、又は腹水と寒天培地を二と一の割合に和したものであつて、独自の点は、無菌的にとつた兔の臓器の小片（腎臓と睾丸が最も良い）を其に沈めること、及び培地の表面に厚くパラフィン層を作つて嫌氣的にすることであつた。最初に混合して発育して来る雑菌から分離する方法にも一つの工夫がなされた。其はトレポネーマが細菌濾過管を通過することを利用したのであつた。

野口の旺盛な仕事振りは、スピロヘータの培養、並びに培養スピロヘータの研究を更に広く深く進めた。そして、トレポネーマ・バリーヅム以外に、梅毒で混在するスピロヘータ・レフリングェンスも純粹に培養した外に、硬性下疳から別の一種を分離してトレポネーマ・カリギールムと命名し、外陰部の侵蝕性潰瘍から一種を分離してスピロヘータ・ファゲジネシスと命名した。また従来知られていて、培養もされていた口腔のスピロヘータを材料として、トレポネーマ・マグロデンティウム、ト・ミクロデンティウムの二つの純粹株を分離し、また齒槽膿漏から粘液を形成するスピロヘータを純粹に培養して、ス・ムコースムと命名した。なおその外に、旧くから知られていた、鳥類のスピロヘータ・ガリナルム、再帰熱のスピロヘータ等でも純粹培養を成就し、再帰熱では、アフリカ種、アメリカ種、アジア、ヨーロッパ種等を何れも培養した。

野口は、他の研究者の純粹培養株というものは、多くのものが汚臭を発するといわれるが、氏の純粹培養株は臭氣を発しないといひ、汚臭を発するものは不純粹なものであると批評した（中野等氏も同説であつた）。

また培地に臓器片を入れなければ、トレポネーマ・パリーヅムは決して発育しないと云った。

微生物トレポネーマの研究に於ける野口の最も大きい業績は、麻痺性痴呆、脊髓癆の脳及び脊髓にトレポネーマ・パリーヅムを検出し、其の性状を確かにして、病原体としての問題を結着させたところにある。此を説くには微生物そのものに就て略述する必要がある。

微生物には、第一期、第二期、潜伏微生物、第三期の区別がされている。通常約三週間の潜伏期の後に初期症状が現られる。其は硬性下疳で、隣接リン巴腺の腫脹が伴なう。此が第一期である。感染後六乃至九週間になると、トレポネーマは広く身体随所に蔓延して、皮膚や粘膜に種々の発疹が現られ、リン巴腺が腫脹し、発熱等も見られる。この皮膚微生物ともいわれるべきものが第二期である。この時期には病毒は全身に拡まつているけれども、内臓諸臓器はまだ侵害されていないことが少なく、治療はよく効果をあげ、或は自然に軽快して、諸症候は漸く納まり、所謂潜伏微生物となる。更に進んだものが第三期微生物であつて、内臓微生物である。内臓諸臓器は勿論、筋肉、骨、皮膚、粘膜等に種々の病変が現られ、病変は増殖性の変化と退行性の変化が混じ合い、複雑な像を呈し、護膜腫の形成が特殊である。此等の症状は少なくとも三年、しばしば十年、十数年後に現られるのである。なお外に微生物性のものとされていた麻痺性痴呆と脊髓癆とがある。

シャウディン等が最初に検出したのは第二期の丘疹の組織液中であつた。続いて第一期と第二期の病変部には虫体が少なくなく、続々検出されたが、第三期の患者では検出が困難で、しばらく検出されなかつたが、久しからずして検出され、血液、尿、脊髓液等の内からも見出されるようになった。そして残るは、麻痺性痴呆と脊髓癆のみとなつた。此等の病症はメタシフィリス或はパラシフィリスと呼ばれて、患者の多数に於て微生物の既往症があるので、両者の関係は一般に肯定されていたのであるが、中枢神経系に微生物に固有な組織的变化が認められず、駆微生物法が十分に反応を示さない等の諸点から、両者の関係が学者の間に問題になつ

ていて、盛んに討議され、**微毒**の病原体の直接の作用ではなくして、其の毒物の作用であろう、という折衷説も出ている状態であつたのである。そして野口によつてトレポネーマが検出され、且つ其から培養が得られて、他の部位に於けるものと同様のものであることが明らかにされた。かくしてメタシフィリスは第四期**微毒**といふべきであるということになり、問題が解決し、病原体検出が完了され、病原論が充実されることが出来たのである。

最初に野口の考へたことは、脳や脊髄では虫体は固有な螺旋形の形態をもつて居らずに、変態して、例えば**顆粒状**のものになつているのかも知れぬということであつた。純粹培養中で、虫体がしばしば**顆粒状**に変形し、其を適当な培地に移すと固有の形態のものに復するといふ現象を見ていたのである。ところで発見されたものは他の局所に於けると異ならぬものであつた。先ず**麻痺性痴呆患者**の脳を、助手のムーアと共に検査して、七〇例中に十二例に於て虫体を検出したのである。次で**脊髄癆**では十二例中一例で脊髄中に見出した。この検査の技術は、スピロヘータの検査に特殊な方法である。組織内にある虫体は普通の染色標本ではよく染色されない。それで特殊な方法が考案されていたのであつて、其は、組織を固定し、媒染剤を働かした上で、銀剤を作用させて、スピロヘータ体を銀化させるのである。この方法によると虫体は黒色の体になつて見出される。この方法は旧くから行なわれて來ている神経の銀化法から出立したもので、フランスのレヴァジチー等によつて改良されていたものなのである。野口はこの方法による標本を多数に細密丹念に顕微鏡で見て行つたのである。

なお更に仕事を續けて、二百例の脳組織中四八例に確實に証明した。虫体は多くは脳皮質中に見出され、灰白質中には少なかつた。散在している像も、神経細胞と神経間質纖維の間に多少集まつている像も見られた。また神経細胞に接觸していたり、細胞中に入つてゐるものさえあり、細胞は退行變化を現らわして、形状や

構造が不正となり、核や突起が腫脹したり、融解したりしているのも見られた。そして注目すべき点として、血管附近には稀少であつて、其の壁や管腔には皆無であることを認めた。それで氏は、麻痺性痴呆なるものはトレポネーマ・パリーツムに因る慢性実質性脳炎であつて、駆黴療法の効果の及ばないのは、虫体が血管から遠く離れて、脳実質中に侵入しているが為めである、と結論したのであつた。

野口は右の染色標本での検出では満足せず、更に進んで、其等のトレポネーマがそこで生きて居り、且つ病原性をもっているものであることを確かめた。微生物の生きているものの検索には、暗視野装置というものを顕微鏡に装置する。其は光源からの強光を視線と直角の方向に注ぐようにして、親野が暗黒で、微小体がそこで無色に光つて見ゆるようにする装置である。この装置を用いて、脳実質中に於けるトレポネーマは運動していることを確かめ、なお動物接種試験で、其等が固有の病変を発呈せしめることを証拠立てたのである。

一九〇七年にベルリンのワッセルマン、ブレスラウのナイセルとブルックが、黴毒の血清反応による診断法を考案した。ワッセルマン反応として周知のものである。前に書いたように、野口は此に關する研究を多数行なつて発表している。

純粹培養に成功し、特に其を豊富に得る培養法を手に入れた野口は、其を用いて黴毒を診断する方法を考へた。即ち純粹培養トレポネーマから抽出したもので、皮膚反応を検することであつて、抽出体をルエチンと呼び、ルエチン反応というものである。このことも前に述べた。ワッセルマン反応はその手技や材料が簡單でなく、普ねく臨床医家の手では出来難いという欠点がある。それ故に其を簡易にする方法が、多数に考案されているが、何れもその成績に於てワッセルマン反応には及ばないのであつて、依然としてワッセルマン反応が現在でも最も信頼を得ている状態である。皮膚反応の検査は実施が簡易であるから、一般に實用さる

べきものであるので、一時は注目をひいたのであったが、ルエチン反応はワッセルマン反応と比較して、確實性に相当大きい隔りがあつて、広く行なわれるには至らなかつた。

オロヤ熱とペルー疫病 オロヤは、ペルーの海岸にある首府のリマからアンデス山を横ぎつたところにある町で、オロヤ熱、ペルー疫病は、そのアンデスの谷地にある奇病である。オロヤ熱は高熱と高度の貧血を症候とする、死亡率の高い病氣、ペルー疫病は全身の皮膚に贅疣の生ずる病氣で、瘡は血瘡であることもある。前者は猛悪な伝染性のもので、一八七〇年に、アンデスを横ぎつて、リマとオロヤの間の鉄道を敷設した際に数千の工夫の死亡者が出た。四〇人の水夫がイギリス船から脱出して来て、工事に働いているうちに、一年足らずの間に三〇人は同じ病氣で瘡れた、というような悲惨な事実があり、病人が発生すると、土人は他の谷地や海岸地に移つて、其から免かれるという風習もあつた。オロヤ熱とペルー疫病が同一疾患の二つの型のものであるか、然らずして別々のものであるかに就ては、議論があつたが、近年は同一のものと考えられていた。雙方とも同時に罹るものがあり、その場合には熱症は軽いとされて居り、疫病は慢性の場合と考えられていた。此等が同一疾患であるということ信じさせるには、貴い犠牲が払われていたのであつた。其はカリオンという医学生が、両者の異同の議論を自身で実験して解決しようと決心して、瘡から探つた液を自身の腕に接種したところ、その結果数日にして発熱して瘡れた。此は一八八五年のことである。

一九一三年にハーバード大学の熱帯病研究団が来て、此等の病氣を研究して、両者は独立のものであるとした。此より四年前の一九〇九年にペルーの医師のバルトンが、オロヤ熱の患者の赤血球中に微小体を発見していた。研究団はその微生物、即ちバルトネラ・バチリフォルミスを病原体とした。研究団の得た所見では、疫病には此が見出されない。また疫病は容易に猿に感染せしめ得られるが、オロヤ熱では其が不可能で

ある、というのであつた。また一人の特志家を得て疣の接種を行なつたが、オロヤ熱には罹らなかつた。そしてカリオンの死は、恐らくチフスか何かの偶然の併発であつたか、或は材料を採つた患者がオロヤ熱にも罹つていたのであるう、としたのであつた。

一九二〇年九月に野口はリマからオロヤ熱患者の血液を持ち帰つた。そして其からバルトネラの純粋培養を得ることに成功した。更に其を猿に感染せしめることが出来た。培養を眉の皮膚に注射して血疣の形成されるのを見たのである。そして更に其からバルトネラの培養を得たのだつた。翌年の四月にはリマから取寄せた疣が届いた。其を乳剤にして注射した猿が発熱し、その血液からバルトネラが検出された。猿での試験は種々の興味のある所見を提供した。

野口の研究は更に進んで、その結果は、カリオンの死、ハーバード研究団の所見の不一致の原因を暗示した。其は、菌株によつて毒力、性状が著しく異なるという事実である。バルトネラの十二種を集めて、其等に九通りのものを区別した。其等は形態的にも差別があり、特に毒性に於て甚だ異なつているのである。そして非常に毒性の強い株はオロヤ熱を起し、弱い株は疣病を起すのである、と結論するに至つた。

オロヤ熱の感染経路としては吸血昆虫の媒介が旧くから考えられていた。有病地で、野外の作業を日没前に切上げることによつて、患者が出なくなつたという事実もあつた。カリオンの犠牲事件の後間もなく、昆虫学者のタウンSENDが此の研究を行なつて、「ぶと」(フレボトームス)が伝播者であろうとしていた。野口は協同研究者と共にこの問題をも解決して、其の伝播者たることを確かめたと報告した。

このオロヤ熱の研究は、一九二六年に第一報が発表され、生前に第一四報まで書かれ、歿後協同研究者と共に著のフレボトームスの研究の報文で終つてゐる。其は第一六報になつてゐる。

トラコーマ　トラコーマの病原体の研究、発見は、彼の研究生活の大部分を通じて頭にあつた問題であつた。トラコーマは世界に三千万の患者があるといわれ、人類保健上の主要な問題の一つである。病原体として報告されたものも少なくないが、プロワゼックのトラコーマ小体というものが討議の対象となつてゐるのみであつて、病原体の発見者に対して巨額の懸賞金の授与が申し出されてゐるという状態にある。野口は以前に微生物を培養して報告したことがあるが、其後は報告すべきものを仕上げていなかつた。最後の研究は、一人のドクトルのすすめでその機会が与えられたものであつた。プロクターという医師が、南部ユタ、ニューメキシコ地方のインディアンにトラコーマ患者が極めて多く、其等は治療を受けることがなく、初期から盲目になつたものまでのあらゆる病期の患者が夥しくあるので、わざわざ野口を訪問して研究をすすめたのであつた。野口はその話を聞いて研究する決心をして、現地に行つた。治療を受けていないトラコーマ患者は合衆国では珍しいのである。

野口は、病原体が存外あり来りの形態のものであるかも知れぬということ、また発病までには相当に長時間を要するものかも知れぬと考へていたようである。ニューメキシコのアルビュケルクで採集した材料から五種の微生物の培養を得たが、其等の三つは周知の種類のものであつた。そして唯一株を除いては、一時的の反応や急性の炎症を生ぜしめるに止まつた。この試験には種々の猿を用い、チンパンジーをも用いた。そして一株で、顆粒状結膜炎を起させ、其が現地で見つたトラコーマと非常によく似てゐるといふ結果に達した。ワシントンでの会で此を報告し、論文をアフリカへの出発に迫まつて書き上げて、最後の遠征の途についた。前にもいったように、自身は病原体だといわなかつたが、世間では発見といつて評判してしまつた。

アクラでの研究は発表されない。十六篇のオロヤ熱の研究、其にリケツチアと、このトラコーマの研究とが、彼の最後の五年の業績になつてゐる。

黄熱 黄熱は野口にとってまことに悪因縁の疾患であった。前にもいったように、野口が此に乗出した事情は、自発的なものではなかった。そして遠征六回、努力十年の結果は、病原体の問題に限る限りに於ては、学界の容認を受けるものではなかった。病原体としてのレプトスピラ・イクテロイデスの問題の学界の嚮向に就ては、前章に記述したところで大体明らかであろう。一時は熱帯病学、伝染病学、寄生虫病学等の教科書、専門書等で、此を病原体として記述したのも多かつた。併し最初から一貫して此に賛同しなかつた研究者は少なくなく、疑をもつていた学者が多かつた。彼自身も最後のアフリカ行に於て、此を否定していたことは知られる。そして新しく研究を展回しようとして、それを果さずして悲しくも殞れた。アクラでの研究の内容は発表されない。協同研究者であつたヤングも、彼の後を追つて殞れたので、半歳餘に亘つた、両氏の貴い作業の内容は、世に知られない始末となつた。野口は五三歳の若さで殞れた。なお十年の壽命を与え、ロッキンフェラー財団の財力とその組織を以てして、存分に彼の天分を發揮せしめたならば、この問題の結局の解決が彼の生涯を飾る更に大きい一つとなつたかも知れない。併しまた、病原体の問題に限る限り、努力十餘年の決算に終つたかも知れない。アクラに於ける殉学は、野口の生涯を突然に断ち切つて、さまざまに解き得るような謎でもあり、また解き得ざるようでもある謎を、力強く投げ出した、偉大で茫漠な幕切れであるところに、稀に見る異常性をもっている、悲劇的、英雄的死である。

黄熱に就ては、これまで述べて来たもので足りているように思われるのであるが、以下に若干の追記を加えよう。野口にとつて至上の因縁をもつたこの疾患に就て、読者諸君の印銘を一層深くすることが、野口の死への手向でもあろうからである。

黄熱は遙か昔は西インド諸島と西アフリカの海岸の一部に限られていたものらしい。其が十七世紀頃、西

インド諸島からメキシコに移り、其それから南北に拡まり、十八世紀には合衆国に入ってフィラデルフィアで大流行を起し、南方のニューオルリーズからミシシッピー流域にしばしば流行を見たが、幸にして浸淫状となるには至らなかつた。中央及び南アメリカでは浸淫的になり、東海岸ではメキシコからサントスまで地方的になり、海岸のみならず内地まで拡まつた。南端はモンテヴィデオまで達したが、地方的にはなっていない。西海岸でも一帯に患者があり、特にエクアドルが著明である。ブラジル、西インド諸島、メキシコ湾の一带では、漸次ぜんじ駆逐されて患者数も地域も漸減ぜんげんした。アフリカでは、ギネア湾の北岸、リベリア、アイボリーコースト、ゴールドコースト、ダホメー、カメルーンの諸地に浸淫している。ヨーロッパにも侵入したことがあるが、その都度つど防圧された。

合衆国では一七〇二年から一八〇〇年までに三五回の流行があり、一八〇〇年から一八七九年までには流行のなかつたのが二年だけだつた。一七九三年にはフィラデルフィアの人口の十分の一が此に斃たおれたといわれている。このフィラデルフィアの大流行以来、約百年の間、この疾患の伝染、非伝染が論議され続けたが、結局伝染性のものとして認められるようになり、一九〇〇年に至つて、軍医団の研究によつて、此が蚊によつて感染せしめられるものであることが立証された。此これは合衆国軍医団のみならず、合衆国医学の一つの光彩とされている作業なのである。

キューバの港ハバナの駐屯部隊に黄熱患者が発生したので、重大視した軍当局は、軍医から委員を命名して、其それを研究させた。主席はリード、委員はカロール、ラゼアール及び後年ジャマイカの会合の席で野口に反対意見を述べたラゼアールであつた。研究の先ずま最初は、蚊による伝搬の問題に向けられた。蚊伝搬説は、久しい以前（一八八一年）に、ハバナのフィンレーが周到な立論の上で主張していたのであるが、実験的の根拠はなかつた。そして其後にマナリアで、マンソン、ロッシ、グラッシイ等の研究の結果、同じ経路が確実に

されていたのである。ところで黄熱に感染させられる試験動物がない。それで試験は人体に就て行なう外なかつた。周到な考察がなされた末に、委員会は、危険を十分に理解した上で、全然その自由意志で、此に応募する人があれば、其は人類の為めの大い貢献である、という結論に達した。併し其を外に求める前に、委員会の内部に於て先ずその危険を敢てするのが義務である、ということに意見が一致した。第一の試験はカールが自体で行なつた。患者から吸血した蚊に刺咬させたのである。その結果、四日後に発症して、三日間は危篤状態であつた。第二の試験者の篤志者、ディーンも同様に発症した。併し幸にして二人とも恢復した。ところで実験的に刺咬させたのでなく、偶然刺咬されたラゼアルが感染して、不幸にして一週間後に殞れた。この第一の犠牲者を記念する為めに、実験所は「キャンプ・ラゼアル」と命名されて、研究が強行された。そして合衆国軍の名譽の為めという精神で、軍隊内から試験者としての篤志者が続出して、希望数を超過した。患者の臥床、衣類其他のものを容れ、空気の流通を悪くした、防蚊装置の完全なところに十二日間生活した者からは罹病者は出なかつたが、「しまか」に刺咬された二人の篤志者が感染した。そして共に犠牲となつて殞れた。これで百年来の問題は解決された。

この発見を基礎として行なわれた実地作業の結果は驚くべきものがあつた。記録の存する過去約半世紀の間では、ハバナ市に年平均七五〇人の黄熱死亡者があつた。「キャンプ・ラゼアル」の試験の翌年二月から始められた、防蚊装置及び蚊の駆除作業の遂行の結果として、前年に三〇五名の死者のあつたのに対して、僅かに六名しか出なかつた。他地で感染した患者が市内で発病することはあつても、其からの感染はなくなつた。黄熱の病原体は、濾過性、即ち陶製の濾過管を通過する、顕微鏡の拡大力では、形体として認められない、極微の生体とされている。即ちウイルスである。このようなウイルスの研究は近年漸次進展して来て、これからの微生物学界に於ける重要性和興味を中心とならんとしている。そして多数の疾患の病原体としてのウ

イルスが知られ、其等それらの大きさが研究されている。黄熱のウイルスは、その直径が二ミリミクロン（二ミリミクロンは百万分の一ミリメートル）とされている。細菌のうちで最も小さいもの一つである霊菌は七五〇ミリミクロンの直径を有する。

六 人 間

フレキシナー教授は、野口の死を弔した言葉のうちで、『野口に優れたものが三つある。その第一は、明澄透徹な精神、その二は人間の仕事とは思われぬ程精妙な技術、その三は他に比類なき勤勉である』といったという。この言葉は専ら学人としての彼に關してであるが、筆者には、この言葉が野口英世を髣髴せしめなさい。第一の意味がよく理解出来ない。第二の点には疑問がある。欧米人は至つて不器用である。日本人としてどの程度までの精妙な技術を野口がもっていたか、疑問である。第三の比類なき勤勉は彼にとつて最大なものであり、彼に於て最も偉大なるものであることはいうまでもない。

人間野口の奥まで知つていた奥村氏は、『要するに、私の心の中には、野口さんという人は、非常に偉い人であると同時に、又非常に偉くない人として映る』といつてゐる。この言葉によつて人間野口英世が眼前にいきいきと現らわれ来るのを覚えるのである。世間は——特に伝記の記者達や、修身の先生達などは、兎角非凡な人物を偶像にしてゐたがる。此は一面に於て意味のあることであり、必要なことでもある。併しそれでは、そこに血が流れてゐない。血の通つてゐる人間を味わうことが、生きてゐる人間の学問である。右の奥村氏の抽象的な批判的な言葉に対して、私は茲で『彼は力強い自然児であつた』という言葉を出してみたい。至つて不十分な言葉であるが、人間野口英世の一生面を表現し得るように思ふのである。

奥村氏は、『恐らく野口さんの心には二つの流れがある。一つは湯である。然かも極めて濁濁にして熱い。一つは水である、然かも極めて清澄にして冷たい。そして此の二つの流れは絶対に相混淆することがない、常に其の何れかが、奔流の如く行為として現われる。少なくとも野口さんの前半生に於ては此の二つが、間断なく心の中に激しく相闘つていたことと想像される』といつてゐる。そして氏はその伝の一章を「清濁」と題

している。私には、人間野口英世に於ける清濁という風に対立的でない、一二つ、三つ或は四つものものが、自然的に、奔跳的に、交錯し、活動し、相剋し合っていたかに感じられる。併しまた多年交友を重ねた奥村氏の言葉を尊重するのが正しかろう、とも思う。

デンマークから血脇氏に書いた手紙のなかに、『人は稟性三分育性七分に御座候、勿論共に境遇といふ重要な勢力に左右せられ候も、畢竟は人間は人為によりて器となる事を得るものと信申候』とある。彼が境遇の児であることは明白である。併し其は彼独自の稟性があつての上でのことであつて、その稟性と相対的關係に於て、私には境遇の方は小さい要因としか思われぬ。それ故に右の三分七分の言葉が逆になつてゐるものとして彼の生涯を見たいのである。自然児と見るのである。

彼の面目を試みに数え上げるならば、先ず何を措いても、精勵、努力、奮闘、その基になつてゐる負けじ魂、強剛なる意志を挙げねばならぬ。そして野心を蔵し、名譽心もあり、そして多分の稚氣をも有してゐたことが感得される。而して野性ともいふべき奔放的な本質をもちながら、如才ない一面もあつた。なお一面には趣味心もあり、興味のあることにはセンチメンタルな情緒をも具えてゐた。金銭に無頓着で、借金はその生涯の過半に於て常習であり、青年期には酒色にも赴いたことがある。而してまた注目すべき点として、多くの良友、良師をもち、其に愛され、親しまれて生涯變るところがなかつた。力強い自然児という言葉が、斯くの如き性格、行動の表現として、不十分ながら役立つように思われるのである。

少年清作は秀英ではあつたが、神童という類のものではなかつた。彼をして頭角を抽んでしめたのは何と云つても努力、奮勵であり、その基たる好學の精神と負けじ魂であると思われる。貧農の小学児であつて、駐在所の巡査に國語と漢文を、寺の和尚に漢學と英語を學んだ。此は、寧ろ母親シカ女の方に重点を置いて見た。往復三里の道を、風の日も雨の日も缺席なしに通學した。此が伝記に特筆されているが、当時はこの類

の少年が少なくなかったのである。また泥鰌どじょうをとって町に売ったということが、多くの読物などに重要に取扱われているが、奥村氏もいつているように、この風は土地一般にあったと見るのがよからう。上級になって教師の代理をつとめた。此これも、当時の過渡期の学校では、寺小屋で年長者が代講をやった遺風がまだ存していたのであろうと思われ、各校に清作少年の如ごときが一二あったものと想像されるが、儕輩さいはい（仲間）から抜け出るといふ天稟てんりんは此こゝによって満足させられ、また助長もされたであらうと思われる。清作少年が貧困のうちに勉学したことに就つてはさまざまの話題が伝っている。隣家の旅人宿松島屋の風呂場の用を手伝って、そのランプで読書した、という類である。彼は学習に敏で進歩も早かった。それには同輩から抽ぬんでるといふ彼自己満足が伴なつたであらう。会陽医院の書生としての彼には、医学修業という目標が建てられていたのであるから、勉強には真剣味が加わつていた筈はずである。茲こゝでも亦競争相手ともいふべき同輩——吉田があつて、負けじ魂の刺戟は日夜彼の身辺を離れなかつた。吉田は清作に劣らぬ明敏な青年であつたという。食費持ちで勉学に住み込んでいたのであるから、清作にとつてその負けじ魂を揺るに有力なものであつたらう。吉田も勝気で負け嫌いであつた。上京して翌月には前期試験を通過したということは、勉学の異常さを示している。十一月に高山齒科医学院の書生になつて、その月末にはドイツ婦人のドイツ語の夜学に通いたいと血脇氏に申出たということも、好学心の異常を物語るものである。済生学舎に学び得ることになつて、最初は一四時間も詰め切つていたという。彼の好学心を満足させたのであらう。やがて彼は勉学精励ばかりの清作ではなくなつて、逍遙先生の野々口清作型と見ゆるものになつた。併しかし其それと違ちがう一面を確た持もつていた。勉学は怠おそつていなかつたのである。

裸一貫の渡米。フィラデルフィアで人生の岐路に立つて、深刻な試練のもとに、彼の天稟てんりんは発露された。蛇毒の研究は彼の一生の前途を決定したものであるが、そこには彼の努力精励が主要な要因になつて見

ねばなるまい。無論そこには頭腦の問題がある。殆んど新たに手をつけて、あれだけの局面に研究を展開させたことは、並大抵の頭で出来るわけではない。併し努力が仕遂げさせたのである。フィラデルフィア時代は、人生の岐路に立つて、いわばのるか、そるか、の立場に置かれたのであるが、デンマークに留学させられ、ニューヨークに移つて、大体安定した位置に置かれることになつて、彼の努力と奮励が更に一層加大されたように見ゆるのは、まことに偉観といふべきである。其が、研究所の正員に昇り、押しも押されぬ世界の大家になつて、其が變るところなかつたことは、正に学界にその比倫を見ないという感歎を起させる。結婚以前には二四時間主義といふことをいつていた。睡眠時間を短縮して勉めることは会陽医院、齒科医学院、済生学舎時代を通してやり通して来た途であつて、体力も具えていて、常人には出来ぬ、三時間睡眠などということが、身につけていたのである。ニューヨークの研究所の独身生活時代には、朝食前に下宿なりフラットなりに歸つて来て、九時頃にまた研究所に行く日が多かつたというが、研究所で三四時間位の睡眠をとつていたのである。結婚生活後はフラットに器具材料を持ち込み、研究所の延長のようにして、或はまだ宵のうちから、或は深夜に数時間仕事をしたようである。この辺の消息の一端は、前章に引用したエックスラインの描写によつて知ることが出来る。

『研究者には、頭で働く者と、頭と手で働く者がある。エールリツヒの如きは、自分の頭で考えたものを人にやらせる。それで立派な仕事が出来ることが出来ることが出来ぬ』と、荒木青年にいったことである。この言葉は、彼自身は頭と手で働く、頭も非凡であるという意味のようであるが、手で働くということを自分の本領としていたと解すべきであらう。非凡であるに相違ないが、その頭だけで群学者から抽んでるといふ考はなかつたのである。彼は自らを鈍才だと称したそうである。この鈍才という言葉は無論アイロニーであつて、つまりは、頭も相当以上のものだが、俺はその上に頑張りで行くの

だぞ、という気持であるに相違あるまい。麻痺性痴呆の研究の達成の如きは、全く彼の鈍才意識の頑張りの賜である。

学問なり研究なりに熱中して、精勵な生活をする人には、いろいろの型がある。万事を忘れてその仕事に自己を吸収せしめて了ったといわれる人もある。此にも二通りの型があつて、野火の如く熱狂なものと、寒巖枯木の如く、壁の如く静寂なものとがある。野口の場合は此等の何れでもなかつた。夢中になり、狂喜し、跳び立ち、沈み込み、癩癩を起し、その間には将棋をさし、ハイネを読んだり、ファウストを読んだりした。ニューヨーク時代の前半は狂人の如くである日が多かつたといわれている。

熱狂するものはやがて醒めるといふのが一般公式である。熱狂が人間の一生にそう長く続くものでないということも同様である。この二つに於て、野口が異常例であることが一つの偉觀である。そして特に意味深く感ずることは、彼が特殊な仕事に執着をもち続けたことである。トラコーマの問題の如きは、研究生活の全歲月を通じて執着していたものであつたようである。

野口を評した言葉に、「ヒューマン・ダイナモ」と云うのがある。正に彼は生きてゐるダイナモであつた。併しダイナモの如くに単一で規矩に嵌まつた運動ばかりをしてはいなかつた。その意味でこの言葉は当らない。彼は長槍、大刀、小劔を手あたり次第、突き廻し、振り廻し続けたのである。

奮闘精勵と負けじ魂とは關係が深い。両者の間の結びつきは必然的なものではないが、両者が天稟的に結びついた場合に、その成果は著明である。野口の場合に此の代表的なものを見ると思われる。負けじ魂は野口の天稟中の主要なものであつた。そして此は母親からの遺伝でもある。少年清作の負け嫌いの一例として、左義長の日の朝の話がある。三城瀉の村では、この朝に、村の西組と東組の少年が朝起きを競争して、勝つた組が固有の歌を唱つて相手方をはやし立て、寺に行つて白紙を貰い、其で御幣を切つて、鎮守の社のその

夜の注連飾り焼きの中央に立てて誇るといふ行事がある。清作は終夜眠らずに未明に飛び出し、年々勝は彼の組のものになつていたといふ。後年ニューヨークで将棋を覚えて、其が一つの道楽になつた。そして親しい友人堀などと其を闘わしたが、勝つまでは何番でもやらねば置かず、一夜に四十番以上もやつて、結局相手の負けにしたといふ。堀氏のところへ行つて、負ければ翌晩必ずやつて行つて挑戦した。学問の上でも此があつた。この意気が彼に研究をさせてやまなかつた。

負け嫌い、負けじ魂と結びつきの深いのに功名心、名誉心といふものがある。野口に於て此も亦明らかに感知される。後期試験に及第した際に、血脇氏は取敢えず、齒科医学院の病理学、薬物学の講師に取立てた。数箇月前まで、時間の鐘をならし、ランプ掃除をして、小使のような仕事をしていた、風采いたつて見苦しい田舎出の青年が、いきなり教壇に立つたのであるから、生徒の啞然としたのは当然であつた。後年錦を着て帰朝した節に、『あの学院の小使から、一躍教授となつて、生徒達の荒胆を挫いたのが、一番痛快であつた』といつたそうである。も一つ此とは趣きの違つた話がある。伝染病研究所時代、彼の生涯の決定の緒になつた、フレキスナー一行来朝の折、前にいつたように、東京視察の通訳案内をした。研究所では一行を迎えて晩餐会を催した。そして彼はその席には列せられず、別室で食事を供された。食卓に列せしめねばならぬ彼ではなかつたのであるが、彼にとつては痛恨事であつた。そして発奮の意気が熱した。帰朝の際に、同窓の会合の席でこのことに言及して、感慨深く見えたといふ。

功名心、名誉心といふものにもさまざまのものがある。或るものは悪性であり、或るものは良性である。軽蔑すべきものがあり、また愛すべきものもある。野口に於て、此が良性なものであることが気持よく感じられる。そこには稚氣といふべきものが混じているのを感じるのである。以上に述べた二つの挿話を見ても、何れも無邪氣、純真である。彼一人の関するところであつて、他を押しける等といった工作を伴なつていな

い。其それが為ためめに工作をしたのでもない。陰険なところは無い。稚ち氣きというべきものが多分に加味されているのである。フィラデルフィアで、蛇毒の研究が一段落をつけて其それが認められ、ナショナル・アカデミーの会合で報告をなし、その夜の学者の晩餐会に招かれ、新聞に報道されたりした時は、彼の功名心はこの上もなく満足させられた。血脇氏に宛てた当時の手紙が細かに此これを物語っている。エクスアドルの黄熱研究行で、グアヤキル引上時の送別感謝の豪華な行事は、この上もなく彼を得意にしたことであろう。贈られた軍服を着けて気取った写真を撮っている。

野口は中等以上の正規の学校を一つも経ていない。独学で、しかも駈かけあし足で蛇毒の研究までとりついて、一挙に学界に躍進してしまった。それで若年で学界に頭を擡もたげた。この若年であるということが、彼の功名心、負け嫌いを満足させるものであったことが知られる。ロックフェラー研究所の開所当時のことを報じた手紙のなかに、『所員は目下のところ、所長フレクスナー氏を初とし、其他その他小生とも六名有之申候これありも申し、其内二名は既に Professor の称号を有するものにして勿論四十年以上の年輩に候、……他の三名は小生の次席に有之申候これありも申し、年齢より申せば小生は最若年者に有之申候これありも申し』と書いたりしている。

野口は殆ほとんど生れながらにして、肉体的にハンディキャップを負わされていた。其それは左手の火傷である。此これは如何いかにも気の毒なことである。併しかし私には此が単に彼の不幸ばかりであったとは思われない。考えようによつては、反対に、少青年時代に於ける、後年の野口たらしめた有意義な要因の一つとして此これをあげてよいように思われるのである。渡米出発に際して、小林先生は、その訓戒のうちに、第一に母の慈愛、第二に観音様の慈悲、第三に左手のことを、心に銘して奮励せよ、といわれたという。この第三の点をどういう意味でいわれたものか私には明らかでない。其それが私の考と同じであつても違つていても、私はこの左の手のこと

を挙げられたことを敬服するのである。

少年清作にとつて、此が大きいいひけめであつたことは明らかである。不自由であつたことはいうまでもない。鉛筆を削るに困つたといい、後には学僕としてランプの火屋の掃除に苦勞したという。實際上の不自由はそれとして、精神的に大きいひけめを感じたであろう。清作は腕白でも、餓鬼大将でもなかつた。寧ろ内気な児であつたという。此には手が関係していたかも知れぬ。これを見られまいとするに苦心したという。当然のことである。学校での辨当に握飯を持つて行つて片手で食したという話もある。子供仲間では悪口もいったであろう。子供ばかりでなく村の衆にも冷視する者もあつたろう。併しこの可哀そうな一面には、また彼の負けじ魂を揺り動かし、奮起せしめたことも想像出来る。意志精神の虚弱な者の場合には、本人にとつて甚だ不利益にだけ働いたであろう要件が、清作の場合に有利に刺激的に働いたであろうということは考えてよからう。また一面には此が農耕の仕事に不適當だということが、母親にも、自身にも、また周囲の人達にも理解されたということが、貧家の児であるに拘らず、学問に志すという行動を容認せしめたことも明らかであろう。渡部ドクトルの手術を受けて、機能が或る程度まで可能にされたということは、それ自体が幸福であつたと共に、医術の人道的の意味を感得する機因となつて、医学を志すことになり、またその書生となる因縁ともなつたという意味合に於ても、野口にとつてその左手は意味がある。医学を志さずして、他の部門の学術なり事業なりに進んだとしても、彼の天分と努力とを以てして、何処に於ても優偉なところまで伸び上つたであろうとは考えられるが、或はそうでなかつたかも知れぬということも、否定は出来ないだろう。要するに、身体上の不具などというハイデキヤップは、劣悪者もしくは凡庸者には陰性的にのみ働けけれども、その人によつては、逆作用的な働きをすることを私は感ずるのである。

野口は機敏な男だといわれた。風のような男で、小さい隙間にも這入り込むと、アメリカでいわれたとい

う。此はいろいろの意味で野口の天稟をいい表らわしている。伝染病研究所で、フレキシナーを案内している間に渡米の話をしたことなども、この例として語られている。学問の上でも、この機敏ということがいえないことはない。併し私とは別な見方をしている。

野口は研究の題目として大ものに取りついている。まだ発見されない病原体を俺が発見してみせる。誰も培養しない前に俺が培養してみせる。他人のやり通さぬものを俺がやってみせる、というところがあつた。『学問というものは一種の投機事業だよ』といった言葉は、このような仕事振りの彼にとつて、その通りであつたのである。併し彼は投機性の大きい仕事ばかりにしがみついていたのではない。それと同時に、手当り次第というように、いろいろの問題に手をつけた。そして其等の多くのものを相当な研究に仕上げた。至るところで材料を捜がしていた。捜がしていたというよりは、どんな材料でも物にしようとしていた、という方がよいかも知れぬ。黄熱の研究に遠征しても、其ばかりはやっていない。その土地その土地でさまざまの材料を手に入れたり、仕事を始めたりしている。黄熱の研究は前後五回、第二回以降は不幸にして患者は甚だ少なかつた。豫期の研究は出来なかつたが、寸暇なく仕事をしている。ペルー行の際のオロヤ熱の如きは最も大きい収穫である。ジャマイカの学会に出席して、植物に寄生する鞭毛虫のあることを聞き、帰り途にホンジュラスに立寄つて其の材料を持ち帰り、シャンデーケンの山荘附近で更に其を発見して、研究を仕上げたということなども、好い例である。このような研究振りは、此を機敏ということも出来るが、この言葉は当らぬように思われる。

野口は多数の外国語に通じていた。此は秀でた頭脳と勉強の結果であつて、外国語に巧みというものではなかつたらしい。小学時代から英語を学び、その進歩が著しかった。会陽医院時代にドイツ語の力も一通り進んで、専門書の翻訳をやるという程度であつたし、フランス語の勉強も始めていた。牛荘の滞在中には口

シア語も役に立つ程度に習得した。渡米する際には、自身には十分の自信があつたに相違ない。併し實地にフライデルフィアに行つて、其が案外に通じないので、彼を失望させ、苦しめた。『得意の英語は半分も不通実に閉口此事に御座候』と手紙に書いているのは、実情であろう。最初に病理学会で研究の発表をした時には、会衆は、言葉もわからないし、何をやっているのか呑み込めない、といわれて、大いに奮起したとのことである。混み入つた新しい研究を、わからない英語で述べたのであろう。フライデルフィアの学校仲間では、彼の英語を「カウ・イングリッシュ」（牛の英語）といつて冷やかしたということである。癖の沢山あるアメリカ語を器用に真似て、お調子よくやらかすようなことは、野口に出来る芸当ではなかつたのである。ヨーロッパに行つて、ドイツ語には不自由であつたらしく、ウイーンの会合の時の模様なども、それを伝えている。後年にはスペイン語も習得して、エクアドルで挨拶をしたりした。つまり多くの外国語を習得して、自身の用に役立てたが、結局頭の語学であつたのである。そして茲にも、彼の頭の働きの英俊さと、勉めてやまざる努力を見るのである。

野口のニューヨーク生活には、まるで違つた二面のあつたことが認められる。研究所に於ては壁の如く、東洋の壁の如くである彼は——助手などには手ひどいことを口にしたりはしたそうであるが——フラットでは半狂人の如くであつたという。結婚後の生活にしてもあまり類を見ないものであつたようである。そしてこの二面生活が彼に於てそれぞれ如何なるものであつたかは、理解に難くない。私は此を次のように見る。彼は強力な自然児であつた。そして自由が許される範圍に於て、その本質を遠慮なしに奔放させた。併し一面社会人、公人としては、其を屈服し、調節していたのであろう。或は常人以上に社会的に行動したとまでいつてもよいと思われる節もある。半狂人の如く振舞う本質をもちながら、其を調節することを心得ていた。ま

た如才じゆばいないところがあつた。彼は癩癩かんしゃくもちであつた。しかも甚だしい癩癩かんしゃくもちであつたらしい。其それを場所と場合で出さなかつたらしい。前に書いたウイーンでのコリホ研究員の名刺を引ちぎつた事件は、その会での得意が、常々の調節ブレーキをきかなくした場合であろう。私は自然児たる野口に大きい感興を覚え、且つまた其それを調節した他の一面に感歎するのである。

ペンシルベニア大学時代には、他と争うことを好まず、大抵のことは耐え忍んでいた。同僚が、『あんなに莫迦ぼかにされても、よく黙っているね。どうして言いまくつてはやらないんだ』というとき、『日本の学生は、先生や長上からどんな無理なことを言われても、言い返したりはしないのだ。仮令たとひ其それが同僚でも、其それに掛り合う程の時間には自分にはないから』といったという。胸に一物あつての忍耐であつたらう。デンマーク留学中、マドセンはデンマークの風物などの批評をしばしば彼に求めたが、其それに關して少しも語るところがなかつた。然るに同氏に伴なわれてオックスフォードに旅した時、イギリスの土を踏むや、縦横にイギリスの批評を放つた。意外に感じたマドセンは、デンマークで何等の答をしなかつたのがイギリスで自由に批評するのは如何なる訳かと質ねた。其それに『私はデンマークで教えを受けている生徒である。軽率に批評などをしてはならんと思つていた。殊ことに貴下の父君が陸軍大臣の要職にいられることは、私を一層自重警戒せしめたのである』と答えたという。荒木氏とフラット生活時に氏に次のように教訓したともいう。『目上の引立てを受けて、出世しようと思えば、必ず「ノー」ということを云つてはならぬ。所長のフレクスナー先生は、僕にとつては大恩人だ。で、僕が全力を傾けて為し遂げたものでも、世に発表する時には、先生の名を附して、協同研究にしる——というのだ。それが既に三つあるよ。学究の徒として、これ程口惜くやくしいことはない。然しかし若し僕が「ノー」といつて見給たまえ、疾とくに首になつて了しまつて、今のこの研究は続けていられないんたらう』。研究所のメンバーになつた一九一四年に血脇氏にあてた長文の手紙があるが、血脇氏個人にあてて書いたも

のではない調子で、そのなかに『世の中は常に一步の譲りを怠る可からず、正義なりと信じ其一筋に遣り通すも面白い、然し最後の勝敗は斯る瞬間に決するものにある間敷きか、大なる抱負あるものは先ず忍ぶことを学ぶべく、小生は若し権利主張などをやり来りしならば、逆も今日の正員にもなれず愉快に満足に研究を樂しむことも出来なかつたのであると思う』とある。ニューヨークで高名になった後でも、研究所では、常に何人に対しても謙遜で叮嚀であつたという。大正二年の手紙のうちに、『近年他人のヤキモチを起し中々厄介に御座候』といっている。此等のヤキモチに対しても陰性的な態度で接していたことであろう。

野口の自然兇らしい一つの点として、稚氣というべきものが発露していることに興味がある。そして此が親しみを感じさせる。奥村氏の伝記には彼の手紙が多数に採録されているが、其等の文面には、自身に就て可なりに誇張をした書き方をしていることが随所に見出される。そして其等は彼の稚氣というべきものの発露とすれば了解が得られるように私は思う。彼のたわいのない性行の二つを拾つて紹介しよう。海港検疫官になつて着用した金ビカの制服が彼の稚氣を満足せしめるものであつた。牛莊に赴くに當つて、其に名残惜しさを感じた。そして其を脱ぐ最後の晩に、愛人を訪問した。たわいないところに豊かな味のある挿話である。も一つは、前にいつたウイーンでの自然科学者医学者総会の折の挿話である。真鍋嘉一郎氏の記述が面白い。

『野口博士は不案内であつたために、……まごついて居られた。丁度私が出会した。……私から「野口さんですか」と尋ねた。すると「お前は誰れか、何しに来てるか」といきなり性急に言われるのだ。「私は真鍋、内科学と物療科の研究に」と答えると、忽ち大きな声で、「そんなら何故お前はミュンヘンのフリードリッヒ・フォン・ミュラーの処へ行かないのか、こんな処にいて何になるか」と一喝を喰つてし

まった。そこで「ミュラー先生のところは既に卒業してしまいました」と言う、……「そうか、もう済んだか、よく気がついた、君は偉い」といつて大いに気に入られ、……偶然にもミュラー先生のことで大変喜ばれた。』(ミュラーは、この会の会場で、野口は極めて尊敬していたのである)』

『そこへ電話がかつて来た。「真鍋氏の話では会場のことのようになっているが、翌日の朝のホテルのことらしい」。それがミュラーであったから、「ミュラーがあなたを訪ね度いがかえるかという電話ですが」と言うと、「なにミュラーが俺を訪ねる、ミュンヘンのミュラーが態々来る、そんな筈があるものか、もう一遍よく聞き直して呉れ」と言われるので、再び電話に出たが同じことなので、「それに相違ありません、確かです」と言うと、了度その時野口さんはワイシャツを着ようとしている所だったが、「本当か、ミュンヘンのミュラーが俺に会いに来るといふのか、俺として欣喜雀躍(きんきせつやく)これ程のことがあるか、これが躍らずにいられるか」と言うと、ワイシャツのまま部屋の中を躍ったり跳ねたりして、またしても「真鍋、これが躍らずにいられるか」と繰返して居られる。電話で先方は待っているのだし、気が気じゃないが返事を聞く隙間がない、実に弱った。』

強気で、負け嫌いである彼に、至つて感傷的な、情緒的な、或は情熱的というような一面があつたことも注目される。交友に対して仁侠的(にんぎやくてき)であつたことも伝わっている。趣味性も普通以上にもつていた。このような人間味の豊かなところに、私は深い親みを感じさせられる。

少年の時から漢詩を作っていた。アメリカでの作、母国訪問中の作もある。油絵を画いた。重篤(じゆうとく)だつたチフスから恢復(かいふく)して、マウント・サイナイ病院を退院する前夜、堀氏から道具材料一箱を贈られて、山中で静養した時から始めたもので、シャンドーケンの山荘では、論文を書く仕事と、魚釣りと、油絵を熱心にやつた。やり出せば熱中して、日に二三枚も書上げることもあり、幾日も一枚に費したりしたという。文学書も

読んでいたようである。渡米の船中でシエークスピアを読んでいた。ニューヨークの男世帯生活で、ハイネや、ファウストを読んでいたことが書かれている。エックスタインの文のなかに、顕微鏡を見ている傍でメリー夫人が書物を読むのを聞いていることが書いてあるが、その一つがトルストイのクロイツェル・ソナタであったという。最後の黄熱研究行の船中でこの同じ小説を読んでいる。

メリー夫人との結婚の経緯は、前記のこと以外には伝っていない。興味の深いのは彼に恋慕話があつて、其が野口らしいものであることである。其の筋を語つて置こう。会陽医院の前に大きい醬油問屋があつた。その当主の弟と仲好しになつた清作は、閑な時にその店先の床几で新聞を借りて読むのを常としていた。そしてその床几から見ただ一女性が彼の胸から消え難いものになつた。その年、フランス語を習いに行つていた天主教会のクリスマス夕に、彼は自作の讚美歌を唱つたという。その時に会衆中に彼女を見出した。彼女は裏町に母と唯二人きりで細い暮しをして、女学校に通い、家門再興を志している少女であつた。Y子といひ、十六歳であつた。渡部ドクトルの妹の友達であつたので、身許や事情等を知ることを得た。そして再三手紙を書きおこつた。併し其等は学校に廻されて、返書は来なかつた。度重なつた末に、教会に呼ばれて、牧師から叱責訓戒を受けた。清作が出京した後、Y子も上京した。Y子の従兄が彼の当時の硬軟両途の盟友菊地氏であつた。Y子は順天堂病院の看護婦になつて医学修業を志したのである。その父が以前にこの病院の医員であつた関係があり、菊地氏の斡旋で看護婦になつたのであつたが、周囲が女医志望を賛成しなかつたので、そこを出て、済生学舎に入学して宿志を達しようとしていた。同じ学舎に通つていた清作は、しばらく後になつてY子を学舎に見出した。そして情火は再び燃え上つた。Y子の方では理解も尊敬もしていなかつた。清作は頭蓋骨を手に入れて彼女に贈つたりした。それからお座なりの挨拶などを交すようになり、やがて質問をして教えて貰うようになつた。牛莊に行くことになつて、防疫医の金ピカの制服に名残を惜んだ彼は、

その最後の宵に、其を着用してY子の寓居を訪ねた。自身の抱負希望を語り、彼女の成功を祈った。併し彼女の態度は空々しいもので、彼を失望させた。半荘から帰る時には、指輪を二つ作って、自身の名とY子の名を刻ませ、一方を贈った、併し其は彼女の抽斗に放り込まれたままであった。其後度々訪問したが、彼女は宿の主婦にたのんで、面会しない方法を講じた。或る日これを知って、憤然、其後は訪ねることをしなかった。フィラデルフィアに行つてからも、郷愁を感じる時には、Y子のことも頭に浮んで来て、其後の消息が知りたかつた。そして菊地氏に質ねてやつて、彼女は日出度く医師免許状を得、若松の医師と結婚したことを知った。後年母国 訪問の際、若松で再会したという後日譚もあるが省く。

野口の大きい缺陷は金銭の上でルーズであつたことである。東京時代に窮乏の結果借金の習癖が生じて、其が高じた。入手金があれば浪費した。よからぬ典物の如き行為にまでも陥つた。当時の書生生活では珍らしくはなく、寧ろ普通のことであつたのだが、兎に角良からぬ行為があつた。収入の多かつた牛荘でも浪費が続いて、渡米費用の貯蓄は出来ないで歸つて来た。借入金で渡米するつもりで帰郷し、八子氏から其の承諾を得たが、小林先生の訓戒で其は実行しなかつた。そして別途の借入金を得て渡米の費用が出来たのであつたが、其を浪費して了つて、血脇氏の援助で出立した。フィラデルフィアに着いて、ワシントンの小松氏に借金を申込んだ。フィラデルフィア時代にも為っていたのである。コペンハーゲンでも借金が出来た。歸米して研究所入りをする事になつて、体面上にも注意と心掛けが必要になつた。フレクスナーも注意を与えた。『一人前の紳士の待遇を受け居り、……将来他人に借金等を申込むこと能はず相成申候。フレクスナー氏も既に前以て其辺の注意を与えて呉れ候次第に候』と書き、『明年よりは必らず多少を問はず貯金致す決心に御座候』とも書いてある。併し彼の性分は如何とも為し難かつた。『学事には大成功なるも、経済上には実

に零点以下に有之申候』というのが実状であつた。

野口が借用する際の言葉なり態度がどんなものであつたか、私は知らない。併し其は恐らく極めて簡単な無邪気なものであつたであらうと想像される。そのために策を考えたり、技巧を加えたりはしなかつたであらうと想われる。荒木氏との生活時のことに就て、奥村氏から一節を左に借用する。

『彼に金銭の必要の起る時は、黙つてパーラーの卓の上に、いつの間にか「今日五ドル入用」「十ドル必要」と書いた紙片がピンで留めてあつた。荒木は、陶材作業に疲れて、夜遅く帰つてから其を読んで、その都度、彼に必要なだけの紙幣を、その紙片にかえて、黙つてピンで留めて置くのであつた。それが漸次二十ドル三十ドルと額は嵩んで来た。荒木は陶材作業では尠なからぬ収益もあつたのであるが、それでも手許に不足をつけて苦しい時にも、無理算段をして、一度も拒絶したことがなかつたから、金額も追々嵩んで、遂に数百ドルにもなつた。

或る夜、荒木は、常より早く帰つて、彼の研究の手の休む機を見計らつて、研究室に入つて行つた。物柔かにいう心算であつたが、氣ばかり焦つて、思わずブツキラ棒にいい放つた。『私は今日迄、先生の必要がある毎に、お金の融通も致しましたが、それは反つて先生を、精神的にも、肉体的にも毒するばかりであると知りました。向後一切私は御融通申上げないことに致します』「いや、よくわかつた。君の誠意は有がたく受ける」。それ以来、いつものパーラーの卓上に、彼の紙片を見受けることがないようになつた。』

野口は浪費し借金したが、他人の懐をあてにして浪費したのではない。金銭に無頓着であつたのだという。買ひものが好きで、懐中に金があれば無頓着に買ひものをしたという。研究所の費用で研究に立出する場合に、その準備に材料を豊富に買ひ込む際などは、ひどく愉快らしかつたという。そして研究所の備品である

ということなどには極めて無頓着で、研究地を引あげる時に、其それを無頓着に呉くれて帰ったりしたということである。つまりルーズという以外に出なかつたのである。逆に借りられる側、貸す側の立場の気持を考えて見れば、其等それらには不快に思つた人達もあつたらう。併しかし不快な思ひばかりをさせ、不義理ばかりを為なし、だまし借りをしていたのでは、借金が長く続けられるわけはあるまいと思われる。彼は貸して呉くれる相手をもつていたのである。この点に私は野口の本質の一つを見るように思う。最も長い関係の血脇氏ちまきに就つては後章にゆずる。チフスに罹かかつた時は、星一氏が、入院費用を支払つてなお残りの少くない程の送金をして呉くれた、母国訪問の費用も同氏が出して呉くれた。彼の学人としての大成を期念して、援助するということ気持の人達もあつたではあるう。併しかし彼を知る人達に、理窟ぬきで彼を助けさせるサムシングがあつたことを認めないわけに行かないように私には思える。

晩年には、ニューヨークで日本人嫌いといわれた。日本人に不親切だということで、在留人の一部、旅行者などに評判がよくなかつた。攻撃する者もあつた。研究所への来訪者を甚だしく嫌つた。面会しても日本人に英語でしか話さなかつた。研究所には諸国の所員が居り、幹部にもフランス人やドイツ人もいたが、所内では英語を用いるという申合せであるという。日本人に対する野口の英語は其それにも因よるのであるが、実は追払うの手でもあつた。日本人の来訪を嫌つたこと、或は追払つたことは事実である。併しかし此こゝに就つては二つの注意すべきことがあつて、前記の評判や非難は當つていないのである。ひとつは日本の海外放行者に見る缺點けつてんであり、一つは日本人嫌いと思評された野口が甚だ深い日本愛をもつていたことである。日本の習慣は、訪問の規律、また作法おびに於おて乱雑らんざつであり、不遠慮である。海外に旅行する日本人は、行く先々で在留者を頼り過ぎる。あまりに在留者の世話になりたがる。在留人を頼つて無益な訪問をして廻りたがる。海外に居て勉

強した経験のある者は、この迷惑の苦痛を大なり小なり感じていることと思う。日本人の少ない土地で、久しぶりで廻り合い或は訪ねられるのは、相手が何人であつても愉快なことである。併し大きい都会に忙がしく勉強して、通りすがりや見物旅の唯の甲乙丙丁にやたらに訪問されて、時間を空費させられ、仕事の邪魔をされることは迷惑この上ないことであり、場合によっては腹も立つのが当然である。合衆国の関門ニューヨークで、野口に会って行こうというつもりで続々訪ねて来る日本人達に、一々相手になっていられる筈のものでないことは明白である。英語で追払う位の手は用いられて一向無理でないのである。学問の方面でも、留学生を世話しないというので評判が悪かつた。世話をしなかつたのは如何にも事実である。併し此を以て野口を責めるのは彼の仕事を知らぬからである。前に彼自身の言葉を引用したように、彼はエールリツヒ型の研究者ではなかつた。自分の頭で自分の手で、自分で頑張る研究者であつた。協同研究者と行なつた研究があるが、其等は彼の手を助けたのである。そして自身の仕事に時間を普通以上に用いてなお足らなかつたのである。それでも、最初から留学生などの世話をしなかつたのではない。世界大戦になつてドイツに行けぬ医学の留学生は米国に行った。其等の世話を引受けたこともあつたが、其をやめた。手紙に『両方の為めにならぬ故、今後は留学生を入れぬ方針に御座候』と書いている。この文字通り雙方の為めにならないのであつた。

ニューヨークで野口と親しかつた人は少ないであろうが、款待を受けた者は少なくない。私も至つて愉快的な会見をする機会を有した。そのみでなく、彼の日本人に対する仁侠的の美談も伝わっている。大正七年（一九一八）に留学中の畑嘉門氏が流行性感冒に罹つた時の親切な力添えの始末が伝わっている。野口の歿後同氏は『野口英世博士の面影』という冊子を印行したそうである。

渡米のはじめから、常に郷愁が胸にあつた、故山を想つて涙する気持は絶えなかつた。永住する決心のつ

いたのは十年あまりも後のことであつた。このことは前に書いた。大正十四年（一九二五）に嬉しい母国訪問をして、その間に彼の日本愛好の心は甚だしく高まつた。長くなるほど帰りたくなくなるから急いで帰るといったということであり、帰米してからは、諦められぬと諦めた、といったということも、前に書いた。その後の彼に就て、エックススタインは次のように書いている。

『彼は往来で誰かが「ジャップ」というのを耳に入れる。以前ならば、彼はそのまま通り過ぎた筈だ。今は、立どまる。その誰かに話しかける。自分はロックフェラー研究所の野口だという。その誰かはすぐ詫びる。其は彼を激させるだけだ。彼がロックフェラー研究所の野口であるからではなく、彼が日本人であるから、この言葉を使つてはならぬのだ。彼は勘忍袋の緒を切つて、十分にその男に言いきかせて、気を安くして歩み続ける』。

日本人嫌いとして彼を責めてよいであろうか。

野口は短軀で、風采は至つて揚らなかつた。頭髪を独自の工合に乱雑にしていた。巻首に掲げた写真は少しく男振がよすぎて出来ている。この頭髪は人の目についたものらしい。ウイーンの会に行つた時に、ベルリンのヒス教授が『なるほど人相を見ても彼は偉い』『あの頭髪が春き上つているだろう。あすこが偉いところだ』といったという。笑談ではあろうが。

七 母・師・友

野口の伝記には、肉親、師友の名が繁く織り込まれている。特に彼の前半生に於て、傍系的にそこに持ち込まれるのではなくして、其等の少なからぬ人達が、彼の生涯に、いわば有機的に結びついて居り、彼の生涯が多角的というよりは、立体的といったような観を呈していることが、類の少ないもののように思われる。先ず第一にあげられるのが、母親のシカ女である。この女性は何種々の点に於て珍らしい貴い人物であった。野口の生涯はこの母親の血の遺伝に負うところのものが多い。男系には優れた者がなかった。そして不幸にして野口にこの系統の血も流れていたことも争われぬようである。次に彼はまことに良き師をもっていた。少年として小林先生、青年として渡部ドクトル、続いて彼にとつての大危期であった東京時代から血脇先生と、良き先生、肉親以上に血の通つていたような恩愛の師の庇護のもとに置かれて来たのである。更にまた彼は良き友をもっていた。少年時代から此が既に始まつていた。後年アメリカ生活が久しくなつても、日本には彼の援護者が出来ていた。

野口を語ることは、此等の人物をも語ることになる。この冊子でも既にしばしば語つて来た。併し野口の場合に於ては、野口の側から語るのみでなく、此等の人物の側から野口を語ることもせざるに置けぬように感じられる。それほどに、此等の人物、其等の結びつきが、特殊であり、興味があり、また教訓的であるからである。

先ず母親のシカ女から始めよう。シカ女の六六年の一生は、文字通り生れた時から、肉体的、物質的には、貧窮、労働、苦難ということ以外に何もなかつた、といつてよい生涯であつた。世界的の学者、デンマー

クのナイト、ロックフェラー研究所の正員、恩賜賞受賞者たる英世の母であつて、それで猪苗代湖畔の寒村の茅屋ぼうおくに、貧農の老婆として安住し、娑婆しゃはの華かさから完全に遠ざかつた生涯を終始したのである。

英世の曾祖父岩吉の代から野口一家の家計は不如意ふによういとなり、祖母みさ、その智養子善之助ちやうしの代になつて貧困はいよいよ窮迫を告げて来た。そこへ嘉永六年（一八五三）九月にシカが生れた。やがてみさは家出、善之助はシカを置き去りにして家を去り、四歳のシカは四八歳の祖母のみつと二人残された。七歳の時に善之助は歸つて来たが、またも家出してしまった。そしてその時には祖母のみつは、瘡毒で、稼ぎ働きの出来ぬ体になつていた。八歳になつたシカは、自ら同村の二瓶方に子守奉公に出た。その内儀は有名なしつかり者で、シカは子守、走り使い、台所仕事から、百姓仕事までさせられ、夜は藁仕事をさせられた。その間に祖母に孝行を為しようとしたが、ままならなかつた。他家で貰もらつた菓子などは、みな家にもつて行つたという。十一歳になつた冬、祖母の病は重つて危篤になつた。その前年に、父善之助が中間奉公ちゆうけんから歸つて来ていたが、極貧の一家をどうする途みちもない状態であり、シカは苛酷な主家から十分な暇は与えられず、僅わずかかの給金で買い薬を服ませ、観音様に所願する外なかつた。かくして唯一の頼みの祖母は世を去つた。それから後数十日のこと、菩提寺長照寺に詣つたシカは、十幾銭かのお金を和尚おしょうに差出して、祖母の信仰していた観音様へお供えしてくれとたのんだ。和尚おしょうは、この信心に動かされて、此これを御堂に供え、観音經二巻を誦した。あけでシカ十二歳の春、一家に陽ひかりさが恵んで来た。しかし其もあわただしいものだった。突然母のみさが九年振りに歸つて来、祖父の岩吉も奉公先から戻つて来たのだった。両親と祖父がそろつて一家は明るくなった。しかしそこには平和はなかつた。その冬には善之助は、またしても中間奉公ちゆうけんに出て京都に向つて行つた。この地方では降雪がひどく積もる。一冬の間は何回か屋根の雪を切り下ろさねばならぬ。雪の下ろし手のない、手入れが出来ずに朽ち続けて来た野口の家は、遂ついに押し倒されて半潰となつた。人の住むとも思われぬ荒屋

の冬籠りの家に、善之助が帰つて来た。併し働く氣持のない彼は、ただ喰う口を一つ増すだけだった。祖父の岩吉はその冬に死んだ。十四歳のシカは、自分の働く時だと自覚した。懸命に稼いだら、家を興すことが出来ぬことはあるまい、観音様がお加護下さる。こう決心したシカは働き出した。田畑の耕作、他家の農作に雇われ、荷負いの駄賃取り、一人前の男ほども働いた。併し小娘の収穫は何といつても哀れなものではなかった。

天下は騒々しくなつて来た。京洛では血なまぐさい風雲が動いて来た。会津は徳川の親藩である。慶応三年（一八六七）、善之助はまた中間として抱えられ、暗雲の京をさして登つて行つた。十五歳のシカは、やがて庄屋へ奉公することになった。あけて慶応四年は明治元年（一八六八）でもある。猪苗代湖畔の猪苗代、翁島、戸ノ口の道が所謂会津征伐の官軍の進路の一つであった。『笹に小判が生りさがる』という磐梯山の歌を、軍卒どもは『笹に生首生りさがる』などと歌つて、やつて来た。村民はみな避難し、シカは主家の家族と母と共に山奥の炭焼小屋に逃れた。この時のシカの勇敢な行動について逸話が残っている。

明治五年（一八七一）、シカ二十歳。婿養子佐代助が迎え入れられた。翌々年に長女イヌが生まれ、更に翌々年に長男として清作が生まれた。これからの一家の消息は大体前に述べた。

茲でこの物語は十数年後にとゞぶ。

清作の才能は周囲から認められ、その手の不具は農耕の役に立たない。佐代助は飲んでいるばかりである。借債は積つて来る。姉娘のイヌ一人を相手の働きでは、追付くわけではない。思い悩んだ末に、シカは、債権者には不義理とならず、清作にも学業の励めるようにと、一案を立てた。其はイヌに婿養子を迎えて相続させることであつた。併しイヌは其を肯んじなかつた。そして遂に女中奉公に出て行つて了つた。やがてシカは窮餘の一策を得た。縁家に当る家の清作には二つ年上の娘を嫁に迎えて、其に農作を手伝わせ、清作には

学業を専心にさせてやろうといたのであったが、清作は承服し得なかつた。そして敢然自ら農作を手伝う決心をした。学校から帰ると、不具な手を巧みに用いて農事に励んだ。

清作が会陽医院の玄関番から薬局生、齒科医学院のランプ掃除、済生学舎の書生、開業試験及第一途に進んでいる一方、姉のイヌには婿の善吉が来て甥も生まれた。しかしシカの生活に变りはなかつた。激しい農耕の労働、行商、駄賃取りが続けられていた。しかもその間に、讚歎すべきことには、助産術を習得していたのである。村に近村切つての上手といわれた産婆があつた。シカは収入の途の一つにと、その手伝いに雇われて行つていた。その産婆が年老いて来たので、代理をつとめるようになった。そして欲得を離れた、誠実な親切が喜ばれ、慕われるようになり、師匠よりも巧者だという評判もあるようになった。ところがそこに難事が生じて来た。(英世渡米後のことである)。産婆規則が發布されて、一定の資格が必要となつたのである。此はシカ一人の問題ではなく、一般の悩みであつたので、郡では一村一名ずつの産婆を選んで、郡役所で講習を受けさせ、資格者を養成することになつた。シカは其に推薦された。僅かに仮名文字を学んだに過ぎなかつた彼女であつたが、十日間程の講習を受け、検定試験を受けて合格した。試験は形式的のもので、講習で知識を与えて、有資格者の需求の間に合わせたのであろうが、その意気と努力は英世に見るものを茲にも見るのである。村長の發議と盡力で、村民の醸金によつて、時計、聴診器、其他一切が調えられたという。

フィラデルフィアで英世は母親の手紙を貰つた。小林氏あての手紙のうちに、其に就て、『愚母よりなつかしき手紙参り候、総文仮名なれ共充分了読仕り親の愛に咽び申候、小子は誰れが愚母の代筆せしか推察しかね申候、或は愚母が自ら書いたとすれば小子は只管驚くの外無之候、……其手紙の内に恩父より種々の苗を頂きしこと、御老母様の御譲りを頂きしこと、馬の子を得しこと、小子の健康に注意すべきこと、毎月二度ずつ参詣して御話しを承ること、婿の事、竹馬の友の現時等にて、それが皆真情丸写しなれば卒読に堪へざ

りし事に御座候』と書いている。口述して代筆させたものであったかも知れない。右の文面だけでも涙ぐましいものがある。この貴い手紙の公開されていないのはまことに残念なことである。

明治の末から大正の始めにかけて、一家の困窮は甚だしかった。連年凶作が続いた。小作米の滞りも出来、借金も嵩かさんで来た。佐代助は相変らず飲み歩いただけだった。婿むこの善吾はよく働いたが、これも大酒の癖があった。そして孫が三人にもなった。多年手を入れずに荒れるままにして来た住家は、本当に雨風を凌ぐだけのものになった。大正二年（一九一三）の秋には、そのままでは、来る冬を過ごせない有様になった。折よく隣家が北海道へ移住することになったので、小林氏の立替えで、其それを手に入れて住み得ることになった。明治四十五年（一九一四）に、『昨夜城母及義兄善吾氏より来翰一読し故郷の実状眼前に映じて啼泣の極に感じ申候、小子の不孝を顧み愧死の思ひ致し候、今日迄只一刻たりとも慈母を忘れたるには無これなく之、単に金銭のままならぬため、研究の多端なるため……』云々と書き、田畑取戻しの処置、母のたために小さい家の建築などの相談を、小林先生あてに書き送っている。

石塚氏が三城瀉を訪ね、写真と共に、如何いかにも痛々しい老母の現状を、書き送り、其それを手にした英世が、帰朝の決心をしたことは前に述べた。帰朝した英世の、孝行の気持は、見るものを感動せしめるものがあった。大正七年（一九一八）、大戦後の世界を嵐のように駆け回り荒らした流行性寒冒は、困苦累積の間を努力忍従し通して来た、この老女の生命をも奪った。行年六六歳であった。英世はエクアドルの黄熱研究から、この上もない華かな歓送を受けて、ニューヨークに帰り着いたその船の甲板で、この報知を受取ったのだった。英世は額が広くて、顎あごと顴骨けんこつが目立ち、強い口もとをしていたが、シカ女も額が広くて、目を一文字に結んでいた。頭がよくて、剛直で、負けじ魂をもっていた点に於おて、母子相通じていたのであろう。シカの負けじ魂、精励、叡智等について数々の逸話が伝わっている。七歳か八歳の子守の頃、村の稻荷堂に鶴浦とい

う法印がいて、娘達はそこに通つて手習をしていた。羨ましいが、それどころではないシカは、手本を懐に入れていて、僅かの暇に取出して、頭のなかで運筆をしてみていた。どうかして習字をしたいと考えた末に、小盆の上に囲炉裏の灰を薄く盛り、月夜の晩に、其に指先で字を書き習つたという。法印はその執心と努力に感心して、僅かの暇々に訪ねて来る彼女に懇切に教えてやった。シカはその奉謝に何かと手伝をするのを怠らなかつた。後年赤痢が村や近在を襲つて来て、法印一家が枕を並べて感染した。村の衆は怖れて近づかなかつたが、シカは、報恩はこの時だと、その看病に當つた。村の鎮守の八幡様の祭の夜には、娘達は、一年一度の着飾りをして、白足袋を穿いて夜詣りをする。自ら働いて一家を支えようと振るい立つた十三四の頃、その晩にシカがきちんとした木綿着に白足袋を穿いて詣でた。食うや喰わずの貧乏暮しのシカの白足袋が娘どもを驚かした。ところがその白足袋は、負け嫌いの彼女の手細工で、白紙製のものだったという。またその頃村で踊りが流行して、隣家の娘二人が其を習っていた。負け嫌いのシカは一所に習つた、そしてその晩は夜明けまで働いたという。英世の姿を茲にも見ることが出来る。戊辰の動乱はシカ十六歳の年である。村が荒らされた当時の逸話も二三伝わっている。村の衆は皆家を捨てて逃れた。官軍は行く行く民家を焼討ちして進んで来た。父祖伝来の家々が烏有に帰して行くのを悲歎したシカは、官軍の隊長に面会して、歎願し、三城瀉は七戸を焼いたのみで助かつたという。また避難した人達の米が盡きた時に、单身米を取りに行つたという話もある。

英世が恩賜賞賞牌と共に賞金を授与された際、債権者はその賞金を債還にあてることを申出た。シカはその申出に承服しなかつた。そして英世帰朝の節、水田一町二段、畑四段歩が購入されて、恩賜田と命名された。小檜山氏が時価三分一位の代価で提供して呉れたのであつた。『自分の田のお米の御飯や、自分の畑の野菜は、一倍うめいなア』とシカは語つたという。私は、我等の郷土に多い、社会的には堂々とした顔をして

いるこの種の金融人への嫌悪と、シカの強健な意志の賞讃と、二つの為めに、特にこの一節を書く。

シカは観音様を信ずることが厚かった。その苦難累積の長年月を、働きに働いて生き通した力の源は此にもあつたであらう。英世は黄熱研究行にお守札をもつていたという。シカの手から行つた、信仰していた中田の観世音のそれであつたらう。母子雙方の気持がゆかしい。

シカの生涯に私の最も深く感ずることの一つは、自身に関する限り、他に頼らず、他に求めずして頑張つたことである。息子の英世、しかも世界的人物となつた息子にすらも、求めるところはなかつた。そして働きぬいて、物質的にはまるで乏しい状態に安住して動じなかつた。私はこの点に最も深い感銘を覚えるのである。

てんぼうの清作少年が、三ツ和小学校に巡視に来た、猪苗代高等小学校の首席訓導小林榮氏に認められて、学業を続けるようになり、此が彼の生涯のスタートに於ける幸運であつたこと、其から、同氏の恩情のおかげで不具の手の手術となり、延いて会陽医院の書生として、医学修業の首途を踏出したこと、此等の彼の生涯の最初の重大な部面に就ては、前に述べた。かくして始まつた同先生の恩愛は野口の終生を通じて続き、のみならず彼の死後に至るまで変らない。まことに師弟恩愛の輝かしいものである。小林先生の温情は英世一己に対するのみに止まらなかつた。村に残つた貧困な母親の上にも及び、更に一家に及ぼされて、周到深甚なものがあつた。此は英世個人のみならず、母親シカ女の天質が然らしめたものでもあり、母親に於て、英世と切離しても、其に値するものがあつたということも考えられるけれども、一口にいえばやくざ者の父親佐代助までも世話をして、一家を扶援したという態度の如きは、まことに龜鑑として特記せらるべきものであつた。小林先生は現在なお健在で居られる。野口歿後十年の先頃、生家の地に計画中であつた記念館も目出度

く完成した。かくして野口の知友の友愛思慕の意志と共に、先生の恩情は長く記念されるであろう。郷土文教の爲めに至慶この上もないことである。

清作の上京、東京生活、『当世書生氣質』から英世との改名、其が小林先生の選んだ名であること等々、既に述べた通りである。牛莊から帰朝して渡米費用調達目的で帰郷し、八子氏から金五百円提供の快諾を得て欣喜したが、先生の訓戒によつて其を辞退したこと等も前に書いた。その時に先生は、他を頼るといふ心が不成功に終るといふことを裏書きしている、彼を知り己れを知つて百戦百勝、先ず背水の陣を布いて、大死一番敵前に奮起するんだ。それでこそお前を信頼することが出来るのだ、という意味をいわれたという。血脇氏の仲介で、金三百円の出途がついて、いよいよ渡米の途に上るに當つて、喜びを胸に湧き立たせて村に歸つて来た英世は、流石に母親の将来に後髪がひかれて、苦しく淋しかった。渡航費の出途については打ちあけなかつた。此も英世には気がかりであつたであろう。先生はいよいよ翼を張つて飛び立つ彼の雄図を一途に喜んだ。仏壇に燈明をあげて礼拝をした。——この仏壇に就て、伝記にもう一つの挿話が載っている。てんぼう、清作に目をつけた先生が、母親と同道して訪ねて来よ、といい、母子が訪ねて行った、そもその交情の最初の時に、シカは、座敷に通されて仏壇を見、先ず其に礼拝して後に初対面の挨拶をした、というのである。——この時に英世は、両手で顔を覆うて咽び泣いた。そして、一家を見捨てて遠く去る苦痛の告白を聞いた先生は、一家一切の事は俺が引受けるから、安心して渡米し、大業を成就せよ、といった。感奮した英世は、先生天婦をお父さん、お母さんと呼ばせて下さい、と願つた。俺はこれ迄も他人とは思つてはいない、という答で、親子の義縁が結ばれた。そして最後の教訓を与えた。其は、国許の事は俺が引受ける、後顧の憂いはない筈だ、誰にも頼らずに奮闘して自分を仕上げる。それには、第一に母の慈愛、第二には宇宙真理の本体たる観音様の御慈悲、第三にはお前の左手のこと、この三つを深く胸に刻み込んで置け、という

のであったという。この三つが、先生の凡庸ならざる見識を表らわしていると思われて、私には感甚だ深い。爾来三十幾年、野口一家に対する情愛、扶持に就ては数々の話があるが、一々は述べない。一つだけ取出して置こう。其は明治四十年（一九〇七）頃のことである。地方の凶作は続き、老母の死があり、口数の多い一家は本当に窮乏の底に達して、田畑は競売に附せられるという状態になった。小林家から米などが貢がれていたが、佐代助の問題を深く考慮した先生は、一家の将来の爲め、現在のシカの苦勞を救う爲めに、郷中から指弾されている、飲みぬけの佐代助を、自ら進んで世話することを提言した。晩酌二合だけを当てがうことにして引取られた佐代助は、その慈愛を感じて、真面目に手伝や雑用を足したりした。小手先の仕事に器用であった。しかし此もあまり長くは続かなかつた。小林氏の骨折りで、隣家を買って、倒れるばかりの旧屋から移ることが出来たのもこの頃のことである。ニューヨークで、英世は梅毒のトレポネーマの研究に半狂人の如く奮励していた頃のことである。

野口の晴れの帰朝を横浜で迎えた先生は、感慨無量であつたろう。大正二年（一九一三）まで千里小学校長を勤めて辞職した氏は、人格修養を眼目とする補習学校を起す意図をもち、帰朝の野口に相談した。野口は贅成して、『私立猪苗代日新館』という扁額を書いた。日新館というのは会津藩学の名であつて、郷土の誇としてゐるものである。この私学日新館は、大正五年（一九一六）十二月に開校された。大正十年（一九二一）、野口はフィラデルフィア市からジャン・スカット賞牌及び賞金を授与された節に、金壹千円を基本金として贈つて寄越した。

小林氏は優れた教育者であり人格者であるが、なおまた夫人と共に、勤儉して産を治めることに勉められたという。育英に献身して産を顧みなかつたというのが美談ともされるが、其よりは、自らを堅持して他を煩わすことをしない態度の方を、私は寧ろより高く尊敬する。

会陽医院の向側むかいがわの族館に齒科の出張診療に來た血脇守之助氏に、勤勉な青年として認められたのが、深い因縁の基となつて、上京した清作が、その庇護によつて、更に彼の生涯の第二段のステップを踏み進み得ることになつた次第は、既に述べた。血脇氏は小林氏とはまた異なつた意味合あひあひに於て、野口を世界の野口たらしめた、重大な存在である。氏は千葉県の人、明治三年（一八七〇）生れで、野口に僅わずかかに六歳の長であつたに過ぎない。しかも両者の交情は父と子の間のものに近かつた。明治二十二年（一八八九）慶応義塾を卒業し、二十八年（一八九五）に齒科医師の試験に合格した。即ち若松での遭會はその年の夏である。

小林先生の場合は、英才児と其の誠実なる母親の扶援、鞭撻べんたうであつたが、血脇氏の場合は、此とはその趣を異にして、蕩児どうじたる行動の目立つた異常人格の青春者の誘導、扶持ふじであつたのであるから、そこには世間に多く類を見ない、情味と深刻さがある。

上京して、高山齒科医学院、済生学舎、順天堂病院、伝染病研究所と続いた数年の間、清作から英世に改まつた前後の時期の野口、其それと殆んど寸時も離れぬ血脇氏の盡力じんりよく、恩情の一端は前に述べた。この時代の野口の伝記は半ば血脇氏の記事であるともいえる程である。野口の評判よろしからぬ行動に就つて、血脇氏は、口にして叱責ししせきすることをしなかつたという。そして親分肌おやぶんまの態度をもつていたようである。次に、味のある一つの挿話を出そう。順天堂に奉職した野口は月給二円だつた。そして其それが懐中にあるのはその晩だけだつた。やりきれない始末で、血脇氏を訪れて、俸給の斡旋を頼んだ。頼んでみよう、という返事を得た野口は、いい洩りながら小遣錢こづかいせんの借用を申出した。血脇氏は、無表情に、懐中の紙入れ（財）を彼の前まへに出して、優しく顎あごで持つて行けという表現をした。先生の小遣こづかいをみんな持つて行つてはすまない、と愕おどろいていう野口に、『まあ好よい、書生時代には、自分より外に知らぬ金があるものだ、……何んでも一応俺に相談してみるがよ

い……』といったという。

叱責ししせきすることなく、人物を見そこなっているといつて忠告をする者があつても、黙していわなかつたという血脇氏に、許してはおかぬ一面もあつたことが知られる挿話がある。其も出して置こう。前と同じ頃、病院で洋服を持たぬので野口は困っていた。某日、渡部ドクトル、血脇氏の友人である某ドクトルを訪ねた折に、洋服をもたぬみじめさを話した。ドクトルは同情して、着古しの一着と附属品一切を与える約束をした。某氏からその話をきいた血脇氏は、いつになく面を曇らした。そして手紙を与えた。其には、僅わずかかの縁故に無心がましい行動をして品位を持ち得るか、必要ならば何故に自分に相談しなかつたか、という意味を訓戒するものであつたという。此は英世の胸に五寸釘であつた。そして一夜眠らずに悶えて長文の謝罪状を書いた。その結びには、誠惶不審、頓首拜白、衢狗清作と認めてある。

牛荘に旅立つことになつて旅費其他その他を支給されたが、高利貸などに攻め取られて、無一文になつてしまつた。出発の時が来て、一行は彼をのこし出立しゅつたうして行つた。期日切迫して、縫すがるところは外になかつたので、思い切つて血脇氏を訪れた。黙々として考えていた氏は、結婚後間もなかつた夫人の晴れ着を始末し、金十五円を調達して、其それを与えた。野口は金五円だけを受けて、再三渡そうとする血脇氏に辞退した。その金で野口は古着屋で金二円の霜降の夏服とハンチング帽を買つた。その塞さいそうな出発姿を見た血脇氏は、室に敷いてあつた赤毛布を無造作にまくり上げて、持つて行き給たまえ、といつて投げ出した。そして辞むのをきかずに、伊皿子の宅から魚籃坂まで見送つた。野口は品川駅に腕車を走らせて出帆の船を追つた。

牛荘からまた懐中空乏して帰つて来て、渡米費用の調達に郷里に行つたが、前記の事情で帰京した野口は、血脇氏宅に食客になつた。そして氏の経営を始めていた齒科学院の講師をさせて貰もらつた。渡米の費用に就つて、血脇氏はさまざまに盡力じんりきうを重ねたが何れも成就じゆうじゆしなかつた。併しかし結局は氏の因縁で箱根滞在中の同宿した某

家との間に話が進行して、渡米費金三百円が調達されることになった。ところがその金三百円が、横浜出帆の数日前に消費されてしまった、餘りにも意外な行動に、流石の血脇氏も呆れる外なかったが、遂に大決心をして、生来始めて高利貸からそれだけの金子を借入れて、旅立たせることにした。横浜出帆のアメリカ丸の甲板上では、血脇氏は寛大な親分ではなかった。彼のあらゆる短所缺点を指摘して、厳然と訓戒を与えた。このことは前に書いた。

以上、小林先生、血脇氏を語るために茲に特に紙面を費した。此等の両氏の野口に対する庇護、誘導の始末は、それ自体に於て、広く世間に伝えて、衆の龜鑑となすべきものである。而して更に此に野口の側の両氏に対する親愛の真情を結びつけることによって、この美しい世界は更に一層の温綯の氣を感得せしめるものがある。其等を茲で詳しく述べることはしなくてもよろしかろう。ただ野口の両氏に宛てた手紙に就て數言を添えることにする。

野口は、アメリカから血脇氏にあてて頗る多くの手紙を書き送っている。しかも多くは長文である。奥村氏の伝記で、小林先生にあてた、これまた数多い手紙と共に、其等を読むことが出来る。其等の手紙には、野口の人物がいるいろいろな風に顕現しているのが窺われて、細心に読む者に、さまざまの感をもたせる。前章でその一つを書いて置いた。此等の手紙には、両先生に対する野口の真情が発露されているのが貴く思われる。野口は手紙を多く書かなかつた。実父実母にあてても、渡米後帰朝までの十六年間、僅かに二度か三度であつたという。此は一家が文字に遠い人達であつたので、小林家宛に書いて伝言を託するという形であつたためであろう。友人達などに宛ててどれだけ言信をしたか、私は知らない。其はなかつたようである。野口には文学を楽しむ性向もあり、漢詩や和歌なども作っているが、筆まめに物を書くというような性分ではなかつ

た。野口の生活には落ちついて手紙を書く時間はありませんかと想像される。私の想像があやまりなくば、野口は小林先生、特に血脇氏にあてた手紙だけを沢山たくんに書いたのであろう。血脇氏の話のうちに『十五年間に二百餘通の長い長い手紙を呉れた』といい、その情誼に感じていた、といつて居る。

野口は多くの良き友をもっていた。此これは少年の時から始まり、晩年に及んだ。友は類を以て集まるという。交わる友はその人物の反映でもあるともいう。良き人物は良き友をもつのが原則的なことであるのかも知れない。併しかし良き人物が必ずしも良き友をもつとは限っていない。野口は良き友に恵まれた幸福者であった。

伝記中の三ツ和村の清作は、少年として、松島屋の代吉君、西川義次君、八子彌壽平君などから受けた友愛が伝えられている。代吉君方の風呂焚きの手伝に行つて、共に読書した話は前に書いた。義次君が清作に袴を送つたという話がある。左手の手術を受けることが出来たのは、此等これらの友愛の結果でもあった。八子氏の名は既に二三回書く機会があった。氏には英世はしばしば経済的の援助も受けたようであつて、交友は長く、彼の晩年まで続いた。少年清作と彌壽平君の情愛譚として伝えられているもの一つに次のようなものがある。漢文教科書を買ひ得ない清作に、彌壽平君が自分のものを与えて了しまつた。再び父に其を買つて貰もらうこともならず、金三円を盗み出す外に途みちがなくて苦悩したが、父が気軽にその金を出して呉くれたという、味の深い話である。野口の晴れの帰朝の時、代吉氏は郡山の近在にささやかに農業を営んでいた。帰郷の日にわざわざ郷村に訪ねて行つた。英世は座敷の上座に招じて待遇し、少年の頃の氣持に返つて談じた。そして上京の忙がしい汽車旅の途中、郡山駅から車をとばして彼を訪ねた。

血脇氏を中心としての知友は多かつたであらう。そして其等それらのうちには深く交わつた友もあつたであらう。伝記には石塚三郎氏の名がしばしば出ている。わざわざ翁島の村に老母を訪ねる友愛を示し、其の写真と音

信とが、英世をして母国訪問の決心をさせたこと等は前に書いた。此等の交友のうちの一人として奥村鶴吉氏が、野口にとつて感謝すべき交友の一人である。面倒至極な資料の蒐集に四箇年を費やし、見事な伝記を世に公にして貰った情誼だけを以てしても、野口は良き友をもつたといわねばならぬ。

野口は、巻頭に書いたように多数の伝記が書かれ、しかも英文の一卷がある。此の著者エックスタインの人物、野口との交友關係に就ては私は知らない。聞くところによれば野口の崇拜者であるという。そして彼は執筆に當つて、わざわざ日本に来て資料を集めた。そしてその来訪は野口に対する情味を一層深めたという。彼も亦野口にとつて別様な良友である。このエックスタイン来日の費用は星一氏によつて提供されたものだという。野口の華かなりし母国訪問の費用もこの星氏の友情の賜であつた。またチフスで療養長日に亘つた折、その費用を辨じて呉れたのも同じく星氏であつたという。私は金銭のこと、特にその額の大小をいうのではない。いわんとするのは交友間の情味である。なお、茲に名を掲げた以外に、伝記にその名の出ている師友がある。

また隠れた大きい師友のあることも忘れてはならない。野口はまことに良き友を多くもつていた、幸福者であつた。

八 後書き

私は唯一度だけ野口さんと会談する機会をもった。——これまでは、私との関係を全く離れて、野口英世を対象として来た。それで、始めは清作、次に英世、後には野口という言葉を用いて来た。最後のこの一節だけは別である。それ故に、これからは「野口さん」という。

大正十年（一九二一）の春五月、私はヨーロッパの遊学から合衆国を通過して帰った。長く滞在する時間と路用をもっていなかったたので、三十日足らずの短日で大陸を横ぎった。ニューヨークに四日か五日か泊った間の某日、ロックフェラー研究所を見せて貰いに行った。特に野口さんを訪ねて行っただけではなかった。また詳しく研究所を見学するという希望ももってはいなかった。当時の私には、医学関係の仕事と別れようという気持もあったし、有名な学者教授にお目にかかっても、研究室や教室を見学に行っても、相対日の間そこで生活するのではなければ、唯のお顔拝見、唯の見物で、たいしたものでもないという考えを、経験からもっていたので、その方面に一向不熱心であったのである。特に野口さんの来客嫌いはよく承知していたし、其の理由は十分に理解していたので、勉強の邪魔をするつもりは全然なかった。紹介状も何もなしに、ロンドンから同行した解剖学のY氏と二人、玄関で名刺を出して所内一覽を申込むと、事務員らしいのが案内して呉れた。こんなお客は沢山ある研究所のこととて、其等の扱い方もきまっています、来観者に礼を失せざる程度で、よろしく所内を一廻りさせて、出口で「グッド・バイ」という式になっているようだった。私としても其以上のことは望んでいなかった。半分ばかり廻ったと思っただ頃、或る研究室に日本人がいた。N氏であった。初対面だったが、雙方で名はよく知っていた。二三会話を交えていたら、事務員氏は案内をN氏に引継いで去った。それからN氏につれられて、拝見をつづけて、とある室の前に来たら、此が野口さんの室

だが会うかといった。来たからには御挨拶だけはして行こう、と私は答えた。ノックしたら返事があったので、戸をあけると、そこに野口さんが白衣を着て立っていた。N氏が私の名をいつたら、「台湾から来た小泉か」といい、「ヨーロッパへ来ていると聞いたが、帰り途か」と続けていった。無論英語である。私は、何れの間にも「そうです」と日本語で答えた。私としても、心得ているだけの礼儀はつくす心掛けはもっている。異国人のいるところで日本人同士で日本語を話すのは悪い位のこととは心得ているが、場所がニューヨークで、アメリカの研究所であるにしろ、外に異国人の居らぬ室のなかで、寸時の訪問の挨拶に、英語を用いねばならぬとは思わぬし、まずい英語よりは、日本の言葉で情味を出した方が本当だとも私は思ったのである。英語と日本語の受け答が繰返された。その内容は記憶していないが、私の旅行の豫定に就てセオバルド・スミス先生に会って行けということから、台湾の牛のプロブラスア病のことになった。この時分には、野口さんの方でも、いつとなしに日本語になっていた。その有病地の牧場主任が野口さんの同郷の知人であったので、私はその名を出した。そして私も同郷の産であることがわかった。それを聞いた野口さんは、「君も会津か」と勢よくいった。その「会津」の発音が標準的の発音でなくて、模範的な会津なまりであった。それから、ますます愉快そうに話し続けた。まあ腰をかける、というので、椅子をすすめたりした。学問上の話、日本の話をまぜこぜに二人でしゃべり続けた。しゃべったのは二人だけで、Y氏もN氏もただ聞いているだけだった。野口さんは大正四年（一九一五）に帰国して其から六年たっている。郷愁というか、慕国の感というか、諦められぬものを諦めていた野口さんの、觸れて貰いたいところへ觸れる手というようなものであったのかとも思われる。チョッキの時計の金鎖を出して、『此は□□君が呉れた。痲癩を起した時に引き切ってしまったので、こんなになっているが、その儘もっている。□□君に会うことがあったらよろしくいってくれ給え』などといった。そして痲癩を起した時の顔つき、手ぶりまでした。鎖は不細工に結びつけてあった。□□君

というのは少年時代の友達で、私の昵懇者じつこんでもある。しゃべり続けて、正午になってしまった。一時間以上もしゃべったのであろう。ひどく邪魔をして恐縮して、別れようとしたら、一所に食事しようという。研究所の食堂はどんなものか見て置きたい気持ちもあつたので、遠慮なしに行つた。食堂では、我等だけで一卓を占めたのであつたが、そこでも野口さんは、大きい声で日本語で話して、時々蛮声ばんせいというようなものを発して、ベランメー調子まで出した。

室に帰って、仕事を見せて貰もらつた。ユカタンへの黄熱研究の後で、レプトスピラ研究の高潮時であつた。培養や標本を見せたり、自分で染色して見て呉くれ、といつて未染色の切片標本を一箱にして呉くれたりした。私は、この研究所で、検査材料からプレパラートを作る仕事場があつて、其の組織がよく出来ているということとを聞いていたので、其それが見たいといつたら、『ナア二つまらん、見なくてもいいよ』といつた。翌日行く豫定のコールドスプリング・ハーバーの遣伝研究所への紹介状を貰もらつたりして、別れた。

私が野口さんに会つたのは、この一度だけである。そして私は、その会見が平凡な会見でなかつたことを喜んでゐる。私はあの時に人間野口の片鱗ぺんを見ることが出来たように思うからである。

右の私の訪問は大正十年（一九二二）で、野口さんにとって最初の痛撃であつたジャマイカの学会の前々年である。そして七年の後にはアクラたお殞おれてしまった。

その一九二八年から二年後に、私は南ヨーロッパと北アフリカへマラリヤ視察見学の旅をした。帰途に急ぎ足で北ヨーロッパを廻つて、黄熱の研究者の話を書き、またその研究室を見る機会を得た。その頃の作業は猿に感染させて行なつて居り、ヨーロッパの大会の真中で其それが行なわれていたのは意外であつた。東洋に多くの港をもつ——というよりは占有しているというような——イギリスは、船舶交通によつて、黄熱の病芽が東洋に逸出して来ることを極度に警戒している。そしてインドで開催された極東熱帯医学会で、研究

の爲めに病毒を持ち込むことを為さないこと、という決議をした。換言すれば、東洋の研究者は黄熱には手をつけられないこと、という意味である。それを、ロンドンでもアムステルダムでも、猿感染試験をして、その上に同じ建物のなかで蚊の飼育まで為しているのは意外だった。そして寒心に耐えなかつたことは、ロンドンでは短時日の間に二回に四名の若い助手の犠牲者を出していたことであつた。アムステルダムでは、仕事最中の研究室を見せて貰つた。一室で感染死後の猿を解剖していた。そしてその研究者が手袋をはめずに素手で解剖しているのに驚いた。質ねたところ、『私はこの研究の最上の適任者です。感染して治つたのです』といつた。旧くはキューバのラゼアル、後にはストークス、野口、ヤングの夫れと同じ犠牲がヨーロッパの大都會の真中で、世間には知られずに生じつつあるのである。私は貴いことにも、悲惨なことにも感じた。そして研究が迅速に進んで、此等の貴い人柱の上に美しい黄熱研究の聖堂が聳え立つことを祈念した。其から早くも十年に垂んとしている。野口さんの十周年は先頃過ぎた。黄熱の研究はあまり進んだとはいえぬようである。こう考えると淋しい心地である。

略年譜

明治九年（一八七六） 出生。

同 十一年（一八七八） 左手火傷。

同 十六年（一八八三） 三ツ和小学校入学。

同 二十一年（一八八八） 尋常科卒業。温習科入学。

同 二十二年（一八八九） 温習科卒業。猪苗代高等小学校入学。

同 二十五年（一八九二） 左手術。

同 二十六年（一八九三） 高等科卒業。会陽医院の書生となる。

同 二十九年（一八九六） 九月上京。十月医師開業前期試験合格。十一月高山齒科医学院学僕となる。

同 三十年（一八九七） 五月済生学舎入学。十月開業後期試験合格。十一月順天堂病院助手となる。

同 三十一年（一八九八） 四月伝染病研究所入所、清作を英世と改名。

同 三十二年（一八九九） 四月フレクスナー教授一行来朝。五月海港檢疫官補任命。十月牛莊行へスト防疫班に加わる。

同 三十三年（一九〇〇） 六月帰朝。十二月渡米、フィラデルフィア着。

同 三十四年（一九〇一） フレクスナー教授の助手となり、蛇毒を研究。十一月アカデミー・オブ・サイエンスで蛇毒研究の示説をなす。

同 三十五年（一九〇二） 十月ペンシルヴェニア大学助手任命。

同 三十六年（一九〇三） 十月デンマークに留学、国立血清研究所のマドセン博士のもとで研究。

- 同 三十七年（一九〇四） 十月渡米。ニューヨークのロックフェラー医学研究所のアシスタントとなる。
- 同 四十年（一九〇七） ペンシルヴェニア大学よりマスター・オブ・サイエンスの学位授与。研究所アソシエートに昇進。
- 同 四十二年（一九〇九） 『毒蛇及び蛇毒』刊行。研究所アソシエート・メンバーに昇進。
- 同 四十三年（一九一〇） 『ばいどく 梅毒の血清診断』刊行。血清学会会頭就任（一九一二年まで在任）。
- 同 四十四年（一九一一） ばいどく 梅毒トレポネーマの純粹培養。医学博士の学位を授与せらる。
- 同 四十五年（一九一二） メリー・ダージスと結婚。
- 大正二 年（一九一三） 麻痺性痴呆及び脊髄癆せきずいろうのトレポネーマ検出。ヨーロッパ諸国巡歴。
- 同 三 年（一九一四） 研究所メンバーに昇任。理学博士の学位授与。
- 同 四 年（一九一五） 帝国学士院恩賜賞を授与せらる。母国訪問、勲四等に叙せらる。
- 同 五 年（一九一六）
- 同 六 年（一九一七） チフスを患う。
- 同 七 年（一九一八） 黄熱調査団に加わりエクアドルに研究行。母シカ歿す。
- 同 八 年（一九一九） レプトスピラを黄熱病原体として発表。メキシコに第二回黄熱研究行。
- 同 九 年（一九二〇） ペルーに第三回黄熱研究行。ユカタンに第四回研究行。
- 同 十 年（一九二一）
- 同 十一年（一九二二） ブラジルへ第五回研究行。
- 同 十二年（一九二三） 父佐代助歿す。帝国学士院会員となる。ジャマイカに於ける熱帯病会議に出席。
- 同 十三年（一九二四）

- 同十四年（一九三五）
同十五年（一九三六）
昭和二年（一九二七）
同三年（一九二八）
- オロヤ熱研究を発表し始む。
トラコーマの病原体研究発表。十月アフリカに黄熱研究行。
アクラにて殉学。勲二等に叙し、旭日重光章を賜わる。

- 『野口英世』（岩波書店、岩波新書・赤版（43） 一九三九年七月第一刷発行）所収。
- 地名・人名は通行のものに改めた。
- 旧字・旧仮名遣いは、新字・新仮名遣いにあらためたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 野口英世の書簡中の「かな」は原文のままにした。
- 読みやすさのために振り仮名を付加した。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>